

北海道利尻富士町

沼浦海水浴場遺跡（第2次）

沼浦遺跡（第1次）

発掘調査報告書

2018年12月

礼文・利尻島遺跡調査の会

目 次

はじめに.....	1
I. 調査の経緯と経過.....	2
1. 立地と周辺の遺跡.....	2
2. 調査の歩み.....	2
3. 調査区の設定・経過.....	4
4. 調査日誌.....	4
II. 各調査区の状況.....	6
1. 堆積構造の分析と層群の分類.....	6
2. B0 区.....	7
3. Bla' 区.....	12
4. Bla 区.....	15
5. B1 区.....	19
6. Blb 区ベルト.....	21
7. Blb 区.....	26
8. B3 区.....	30
9. B7 区.....	32
10. E1 区.....	37
11. TP1.....	40
12. D1・D2 区.....	41
III. 出土遺物.....	45
1. 出土土器.....	45
2. 出土石器.....	123
3. 出土骨角器.....	124
IV. 沼浦海水浴場遺跡（第2次調査）の動物遺体.....	125
V. 沼浦海水浴場遺跡 第1・2次調査出土人骨について.....	142
VI. 附篇.....	149
1. 過去の調査・採集資料 その（2）.....	149
まとめ.....	199
参考文献.....	200

例 言

- 本書は、沼浦海水浴場遺跡（利尻富士町鬼脇字沼浦 132、145、146 番地 摂賀番号：H-10-16）の第2次学術調査と沼浦遺跡（利尻富士町鬼脇字沼浦 99 番地 摂賀番号：H-10-17）の第1次学術調査の概要、及び島内における過去の出土・表探資料を収録したものである。発掘調査には、礼文・利尻島遺跡調査会（岩城克洋・大野彩奈・折登裕介・折井亮子・北沙織・高坂勇佑・箱石幸祐・藤原吉希・柳澤清一・横田真名望）、利尻富士町教育委員会（山谷文人）が参加し、2017年4月28日～5月15日に実施した。
- 本調査及び過去資料の実査、遺跡現状のドローン撮影については、利尻富士町教育長の石川武弘氏、同教育委員会の山谷文人氏、利尻立博物館の佐藤雅彦氏、地権者の祐川イツ氏、道場年模氏、自治会長代理の工藤昭二氏、川村一彦氏、若林吉武氏より格別なるご協力とご援助をいただいた。また調査期間中、西谷榮治氏、藤澤隆史氏、阿部明義氏、藤井優現氏から種々のご教示、ご支援をいただいた。
- 整理作業と報告書の作成は、千葉大学文学部考古学研究室の了解のもとに、同研究室及び関連の施設、各自の自宅において、2018年12月15日まで実施した。
- 人骨判定は藤田尚氏（新潟県立看護大学）に、動物遺存体の鑑定と分析については内山幸子氏（東海大学）に、写真撮影は藤原吉希氏（東京女子医科大学）にそれぞれ依頼した。
- 執筆は、岩城・内山・大野・北・高坂・箱石・藤原・藤原・柳澤・山谷・横田の 11 名が分担した。
- 各種の作業については、資料の拓本・実測（柳澤・山谷）、編集・組版（北）、写真撮影（藤原）、監修（山谷）が、それぞれ担当した。
- 土器の寸・胴・底径を推定復元する場合には、本文・附図とともに推定範囲内の最小値を用いることとした。
- 実測図版・写真図版とともに、遺物資料には重複しない 3 術の番号を付している（本調査 / 土器資料：001～455、石器資料：456～473、骨角器資料：474～485、出土人骨：501～531（人骨に関しては一部一括で番号を付与しているものがある。）、附図・沼浦海水浴場遺跡土器資料：601～655、亦種貝塚土器資料：701～897）。本文中で「(000)」や「0000 例」のような形で、3 術の数字が引用されている場合は、この資料番号のことを示すこととする。
- 土層観察時の土色の判定には、農林水産省農林水産技術会議事務局・財（日本色彩研究所）監修（2001）『新版 標準土色帖』を使用した。

はじめに

平成 29 年 4 月 28 日から 5 月 15 日にかけて、沼浦海水浴場遺跡および沼浦遺跡において、利尻富士町教育委員会監修のもと礼文・利尻島遺跡調査の会による学術調査が実施された。沼浦海水浴場遺跡については、28 年に統一しての 2 次調査であり、沼浦遺跡については、両遺跡の比較検討や遺跡群の広がりを確認するための 1 次調査である。また本報告においては、過去の調査・採集資料として、本町所蔵のこれまで未報告であった資料を掲載した。また、亦稚貝塚の資料についても利尻町立博物館協力のもと掲載している。

沼浦海水浴場遺跡においては、1 次調査の範囲をさらに掘削し層位的な遺跡の変遷をより詳しくとらえることができた。また、E 区や TP1 の調査によって面的な広がりについても検討することができた。さらに、遺跡の古地形や包含層の形成など地質的な分野からも検討を加えている。

一方、沼浦遺跡（D 地点）においては、統繩文期からオホーツク文化期の遺構こそ発見に至らなかったものの、鈴谷式土器が出土し、また近代と思われる道路状遺構を確認することができた。これは、近代における集落のようすや構造を考えるうえでも、貴重な成果となったといえる。

（山谷 文人）

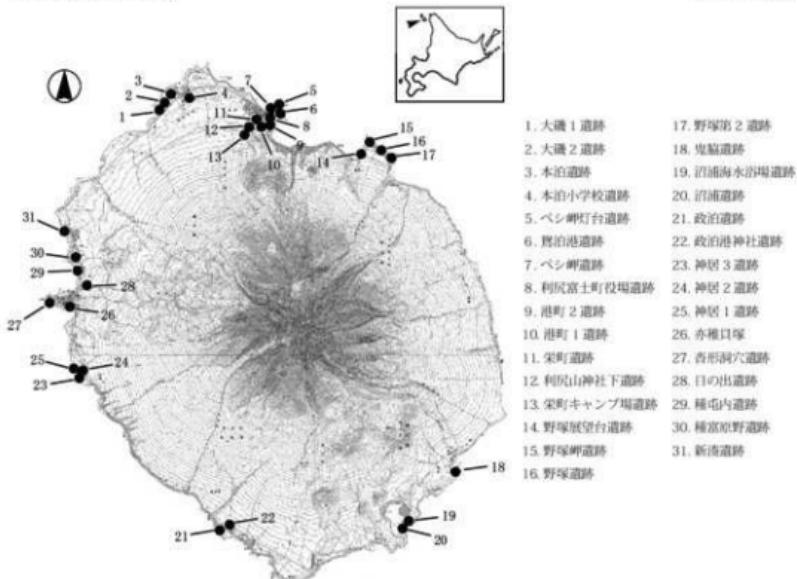


図 1 利尻島内の遺跡（国土地理院発行 1/25,000「鶴泊」「雄忠内」「鬼脇」「仙法志」を改変）

I. 調査の経緯と経過

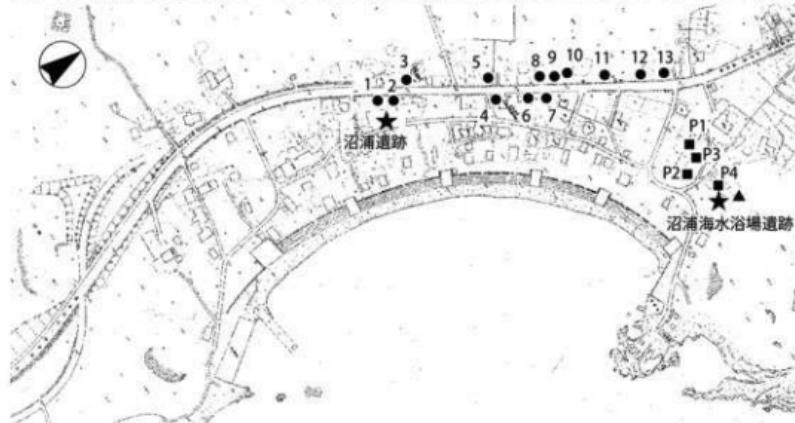
1. 立地と周辺の遺跡（図1）

沼浦海水浴場遺跡ならびに沼浦遺跡は、利尻島の南東部に所在する沼浦地区に位置しており、標高4～5mほどの砂浜海岸を有する平坦な砂丘上に立地している。本地区は、アイヌ語で「ヲタトマリ（砂浜のある入江）」とよばれ、周辺には沼浦湿原やオタトマリ沼などの景勝地が広がっている。また、利尻山の火山活動の痕跡として、約7,000年前以前に起きたマグマ水蒸気爆発による二度の噴火によって形づくられた瓢箪形のマール地形が認められる。さらに、湿原や沼の形成には、縄文海進による海水の流入と約4,000年前以前に起きた海退が影響しているとされる。

また、近隣には鬼脇遺跡（オホーツク文化期）が知られている。なお、平成29年10月27日に柳澤清一氏とともに立地の確認および遺物採集を試みたが、成果は得られていない。鬼脇塗港築港の際に、相当の破壊を被っているとの印象を持った次第である。（山谷）

2. 調査の歩み（図2）

本遺跡の調査史については、前報のなかでも概観した。重複する内容もあるが、以下に述べる。明治時代に藤井秀（東京人類学会会員）による遺物採集の記録がある。採集地点は、径にして14m、人の背丈ほどの高さがある砂丘からという（宇田川1983）。その後、昭和7年に名取武光と後藤寿一による小規模な発掘が行われた。報告の中で、元々の沼浦



● 1～13：北海道教育委員会試掘地点(平成3年度) ■ P1～P4：筑波大学試掘地点(平成6年度)
▲：利尻富士町教育委員会調査地点(平成14年度) ★：今年度調査地点

図2 今年度と過去の調査地点（山谷・内山2004を改変）

の地形は、浜沿いに砂丘があり盆地（集落側）にかけて緩い傾斜になっていたという。さらに、その傾斜面から平地にかけては、3.6m四方の方形の竪穴が5、6カ所あり、また砂丘上に2カ所の貝塚があったことが記されている。また、現在遺跡の範囲に登録はされていないが、集落の西方に和人とアイヌの墓地があったことが記録され（名取 1933）、近隣住民の聞き取りからも言い伝えが残っている。昭和24・25年には大川清による試掘（2地点）が行われている（大川 1998）。

昭和51年には、岡田淳子らによる最初の本格的な分布調査が行われ、沼浦A遺跡（現、沼浦海水浴場遺跡）と沼浦B遺跡（現、沼浦遺跡）が確認されている（岡田ほか 1984）。

平成以降では、平成3年に道教委によって道道の整備工事に伴うB調査で試掘が行われた。平成6年には、筑波大による調査で4カ所のテストピットが発掘されている（未報告）。平成14年には町教委による詳細分布調査が実施され、オホーツク文化期の包含層が検出されている（山谷・内山 2004）。平成28年には、礼文・利尻島遺跡調査の会による沼浦海水浴場遺跡の第1次学術調査が行われた。（山谷）

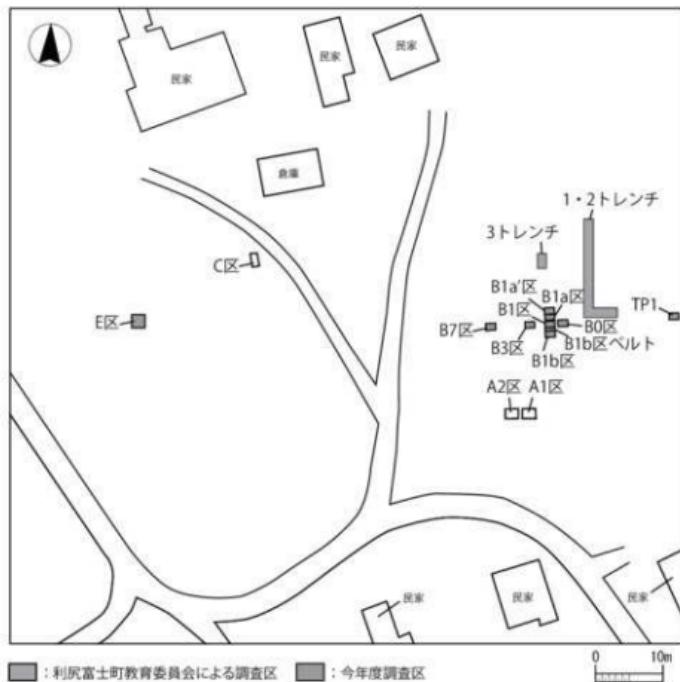


図3 沼浦海水浴場遺跡調査区配置図

3. 調査区の設定・経過(図3)

本年度は沼浦海水浴場遺跡(H-10-16)とともに、隣接する沼浦遺跡(H-10-17)も対象として18日間に亘って発掘調査を実施した。

沼浦海水浴場遺跡 文化層の層位的な変遷を捉るために、調査区を追加しながら掘り進めた。B地点では、昨年度のB1・B1a・B3区に加え、新たにB0区(1.0×1.5m)とB1b区(1.0×1.5m)、B1a'区(1.0×1.5m)を設定し、都合9m²の掘削を完了した。さらに、B0～B1a'区と異なる時期の文化層を求めて、畠屋面上に位置する筑波大学の試掘地点(P4)付近にB7区(1.0×1.5m)を新設した。なお、東側の岩壁下テラス面においても、文化層・竪穴住居跡の有無を確認するためにTP1(1.0×1.5m)を設定し、試掘した。さらにC地点付近における文化層の広がりを把握するために、かつて多量の遺物が出土したとされるC地点西方10m付近をE地点と呼称し、E1・E2区(各2.0×2.0m)を設定したが、E1区のみを掘削して調査を終了した。

沼浦遺跡 平成28年の第1次調査の際、沼浦地区自治会館に近い旧砂丘に沿った緩斜面の畠に貝殻散布が認められ、鈴谷式・剥片類などが採集された。この付近をD地点と呼称し、2.0×4.0mの発掘区(D1・D2区)を設けて発掘したが、出土遺物に乏しく期待したような成果は得られなかった。
(柳澤清一)

4. 調査日誌

4月28日(金) 曇のち晴

機材搬入。草刈り・清掃。B地点発掘停止面の露出。B0区・B1b区の新設。

4月29日(土) 曇のち晴

各区撮影。B7区の新設。B地点掘削開始。B1区：DK1に伴う人骨片検出。

B3区：US131-139掘削。

4月30日(日) 曇のち雨

B0区：US132-133掘削。B3区：土層断面の確認。午後に雨天撤収。

5月1日(月) 曇

B7区：掘削開始。D1・D2区の新設。D区：US401-404掘削。B0区：US130-136掘削。

B1区：人骨取り上げ。B1b区：US134-137掘削。B3区：土層断面精査。

5月2日(火) 晴

鷺泊小学校6年生の体験学習(B7区北側畠表土を発掘)。E1・E2区の新設。B0区：

US135, 136, 141掘削。B1b区：US137, 142, 143掘削、DK1掘削・外形測量。B7区：

US101, 129, 144, 145掘削。D区：US404, 405掘削。

5月3日(水) 晴

TP1設定。 B0区：US135, 136, 141掘削。B1b区：US142, 143, 150掘削。B1a・

B1a'区設定。 B1a・B1a'区：US101, 146掘削。B7区：US129, 144, 145, 148, 149掘削。

D区：US404, 405掘削。

5月4日(木) 晴

B0区:US141, 156, 158掘削。B1a区:US152, 159掘削。B7区:US148掘削。

TP1:完掘。D区:US407-409掘削。

5月5日(金) 晴のち曇

B0区:US156, 158, 166掘削。B1b区:US161, 165掘削。B1区:US119掘削。B1a'区:US159, 164掘削。B7区:US148, 149, 162, 163掘削。TP1:土層断面図作成。D区:土層断面図作成、写真撮影、埋め戻し。

5月6日(土) 雨のち曇

B0区:土層断面図作成。B1b区:US161, 165掘削。B1区:US119, 169掘削。B7区:US163, 165掘削。E1区:US601, 602掘削。

5月7日(日) 晴時々曇

B0区:撮影。B1b区:土層断面図作成。B1b区ベルト:US101-103・DK2掘削。B1a区:ベルト掘削、US173, 174, 119, 175掘削、DK3・4断面精査。B7区:US163, 170, 171, 172掘削。E1区:US602-604掘削。

5月8日(月) 晴

宿舎待機。

5月9日(火) 晴

B1a区:US177, 180-182掘削。B7区:US178, 172, 168, 170, 171, 179掘削。E1区:US603, 604掘削。

5月10日(水) 晴

B1b区ベルト:US137, 116, 117, 142, 143, 161, 180掘削。B1a'区:US180-182掘削。B7区:US171, 179, 183-185掘削。E1区:US604掘削。

5月11日(木) 晴

B1b区ベルト:US186, 187, 165, 182掘削。B1b区:土層断面精査。B7区:US183-185掘削、土層断面図作成。B1b-B1a'区:土層断面精査。E1区:US604, 605掘削。

5月12日(金) 晴

B1b-B1a'区:3D撮影。B7区:3D撮影。E1区:US605掘削。

5月13日(土) 晴

B1b-B1a'区:土層断面図作成。B0区・B7区:埋め戻し。E1区:US605掘削。

5月14日(日) 曇のち晴

B1b-B1a'区:3D撮影、サンプル採取、遺物取り上げ、埋め戻し。E区:土層断面図作成、埋め戻し。

5月15日(月) 晴時々雨

B1b-B1a'区:埋め戻し。機材撤収。

II. 各調査区の状況

1. 堆積構造の分析と層群の分類（図4）

今回調査においては、堆積層、構造物、形成面の全てにユニークな単位番号(US)を付与する形式をとり、堆積構造の把握に努めた。全調査区の構成要素を時系列で並べてマトリクスを構成したものが図4である。これまでの調査で、当遺跡における堆積層は3つの層群に分類されることが認識された。近現代の営為に由来すると思われる搅乱堆積層を第1層群、オホーツク文化期の投棄行為に由来すると思われる魚骨層などを含む傾斜堆積層を第2層群、オホーツク文化期とそれ以前の遺物を若干含む堆積層を第3層群とするものである。図4で用いた層群の色分け（第1層群：無色□、第2層群：灰色■、第3層群：茶色■）は、本報告の各種図表において共通して使用する。（岩城克洋）

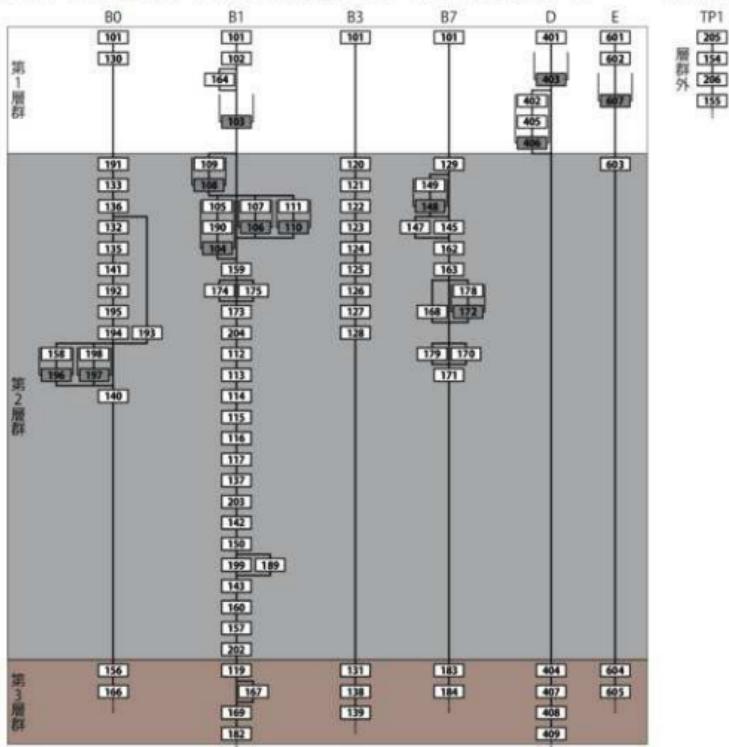


図4 各調査区の層序構成マトリクスと層群の分類

2. BO 区

(1) 概要(図5、表1)

B1 区・B1a 区の第1次調査所見を確認するために、B1 区の東側に BO 区を新設し、B1 区と利尻富士町教育委員会トレンチとの土層対応の把握を目指した。調査区は B1 区の東側に 0.5m の間隔をあけ、 $1.0 \times 1.5\text{m}$ の大きさで設定した。4月29日から5月7日まで9日間に亘って掘り進め、地山(US166)を検出したところで掘削を停止し、記録作業後に埋め戻して調査を終了した。

堆積土層は大きく三群に区別される。耕作などの影響を受けた第1層群(US101・130)、ウニ殻・魚骨を多量に含む層や土層が互層をなす第2層群(US133～136・191～197・140)、その直下に全域で検出され、遺物をほとんど含まない第3層群(US156・166)である。第1層群としては、表土及び攪乱を受けた旧耕作土の2層を認める。第2層群は多量のウニ殻・魚骨を含む層と、ウニ殻・魚骨の混入が見られる暗褐色土層が、傾斜堆積またはレンズ状に堆積している。全体的に南東から北西方向になだれる。層厚と傾斜は変化に富んでおり、起点と終点を異にした斜面堆積の各層を正確に分層することは困難であった。土層断面を対照しながら分層を心掛け、丁寧に掘り下げを行ったものの、土層断面図作成の際には多くの新層が追加された。このように本区では、第2層群の掘削時点での堆積構造の把握が不十分であり、水平掘削によって複数層の遺物を一括して取り上げた可能性があることから、当該層からの出土遺物に関しては、日付を元に便宜的に上中下の三つのまとまりに集約して扱うこととした。このことに関する特別な処置については、出土土器の項目で説明する。第3層群としては区内の全域において、US156・US166 の2層が東壁に向かって緩やかに傾斜する状況が認められた。

本区では、第2層群から最も多くの土器と動物遺存体が検出された。土器で主体を占めるのは、沈線文を施す土器(IV群4類)及びその他のIV群の土器である。その他に、続縄文土器(II群)、元地式に比定される厚手の土器(IV群10類)、擦文土器(V群)が見られる。第3層群では、若干の土器片が出土したにとどまる。動物遺存体では、海獣類は量的には少なく、アシカ科とアザラシ科が僅かに確認された。陸獣類ではブタがUS133・135・136を中心を目立てて検出されている。ウニ類と魚類は多量に出土している。魚類としては、取り上げ資料ではタラ科やフサカサゴ科が多く、1Lサンプルでは、ニシン科がアイナメ科・フサカサゴ科と同じくらい目立てており、タラ科がそれに次いでいる。鳥類は7種が確認されており、量的にも他区を凌いでいる。骨角器や石器などの製品は確認されず、3点の未成品ないし截断片を検出したにとどまる。

(2) 層序と出土遺物(図5・17～23、表1・12・20、写真1・5)

US101 旧耕作土で、近現代遺物が含まれる。掲載遺物はIV群4類の小片1点にとどまる。

US130 黒褐色砂質土層で耕作等の攪乱を受けているが、小片ながら多くの土器片が出土

している。II群やIV群1・3類が混入しているものの、IV群4類などが主体を占めている。動物遺存体としては、魚類としてタラ科、アイナメ科、鳥類ではアホウドリ科、ウ科、ウミスズメ科、哺乳類ではイヌ科・ブタ科・アシカ科が確認された。

US191 北壁土層断面に見られる黒褐色土層で少量のウニ殻・魚骨を含む。1Lサンプルでは、魚類としてニシン科・タラ科・フサカサゴ科・アイナメ科・カジカ科・カレイ科など多くの種類が確認された。

US133 ウニ殻・魚骨層。南壁を除く全ての土層断面に見られる。動物遺存体を除くと、掲載すべき遺物には恵まれなかった。ウニ殻・魚骨・貝類などを多量に含む。

US136 黒褐色土層。ウニ殻・魚骨を少量含む。本層で特に注目されるのは、IV群10類の小片(022)と擦文土器のV群a類(023)が、北壁の最上部で隣接して検出されたことである(写真1-1)。また南壁のUS197切り込み位置付近の本層最下部より、IV群4f類(039)の大きな破片が出土している(写真1-2)。このほかに本層から出土した遺物で、掲載できたものは少ないが、IV群4類(020・029)やIV群6類(030)、厚手のIV群10類(021)、II群(018)などがある。動物遺存体も多数出土している。

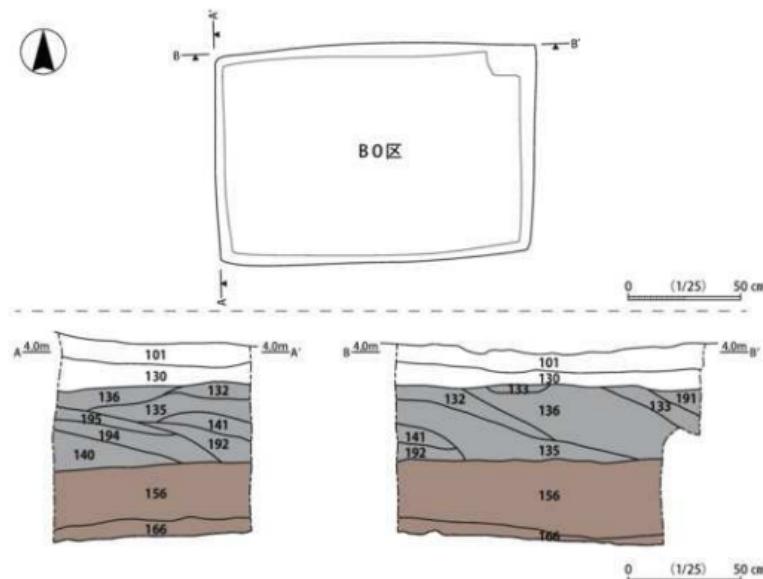


図5 BO区平面図・土層断面図

- US132** 北壁と西壁土層断面に見られる暗褐色のウニ殻・魚骨層で、砂を少量含む。本層出土として掲載できる土器片はII群(016)とIV群1a類(019)の各1点である。
- US135** 黒褐色の土層でウニ殻・魚骨及び砂を少量含み、多くの土器片が出土している。多くの層を包括して遺物を取り上げているため、個々の資料の層は特定できない。本層として取り上げた資料で主体を占めるのはIV群4類の土器である。これらに伴って擦文土器の小片(047)が検出されている。また、IV群1・2類やII群などの古い土器片も若干混じて出土している。
- US141** 黒褐色土層で区内の北西角に見られる。ウニ殻・魚骨及び砂・炭化物を少量含み区内中央に向って傾斜する。出土遺物に乏しく、掲載し得たものは、IV群3a類(041)1点にとどまる。
- US192** 黒褐色土層で区内の北西角に見られる。ウニ殻・魚骨及び炭化物を少量、ロームブロックを中量含む。1Lサンプル内の動物遺存体として、魚類ではツノザメ科、ニシン科、フサカサゴ科、アイナメ科が観察される。
- US195** 黒褐色砂質土層で区内の南西角に見られる。ウニ殻・魚骨及び炭化物を中量、炭化物・砂を少量含む。1Lサンプル内の動物遺存体として、魚類ではニシン科、タラ科、アイナメ科が観察される。
- US194** 黒褐色砂質土層で区内の南西角に見られる。ウニ殻・魚骨・貝類を中量、ロームブロック・砂を少量含む。1Lサンプル内の動物遺存体として、魚類ではニシン科、フサカサゴ科、アイナメ科が観察される。
- US193** 黒褐色土層で区内の東壁土層断面に見られる。ウニ殻・魚骨・貝類を少量含む。魚類ではニシン科、フサカサゴ科、アイナメ科、カジカ科、カレイ科が観察される。
- US158** 黒褐色の砂質土層でUS196の埋土。若干のウニ殻・魚骨のみで、図化すべき遺物は出土していない。
- US196** 調査区の中央部で検出された土坑で、土層断面には表れない。US140から切り込まれている。
- US198** US197の埋土。上位層であるUS136と基質・組成とともに相違点は無く、区分することは難しいため、推定線を引いて便宜的に分層した。掲載し得る遺物は出土していない。
- US197** 南壁土層断面に見られる土坑である。US140から切り込まれており、断面は砲弾型を呈する。
- US140** ウニ殻・魚骨層で区内の南西角を中心には検出される。掲載し得たのは、厚手の元地式の胴部・底部(IV群10g類)の大破片1点(048)にとどまる。本例は、US136最下部のIV群4f類例(039)の直下から検出された(写真1-3)。層位が特定される貴重な一例として注目される。動物遺存体としては、ウニ殻・魚骨・貝類を多量に含んでおり、その含有量は他層と比べてもっとも多い。
- US156** 黒色土層。US141の直下に堆積し、全域に広がる。大波状の沈線文とポッチャを

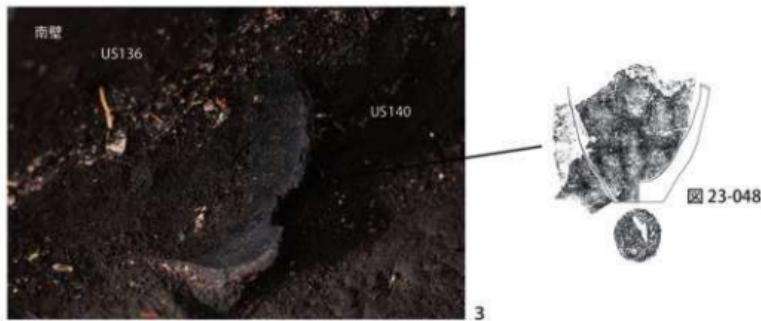


写真 1 BO 区の土器出土状況

有する IV 群 9 類と突瘤文の IV 群 1 類各 1 点が検出されたにとどまる。

US166 暗褐色土層。遺物の出土は少なく、IV 群 4 類 1 点が出土している。

(藤原 吉希・柳澤)

表1 BO 区土層観察表

層序	層名(土色)	特徴
US101	表土 (10YR2/2)	草木の根に富む表土。貝類・魚骨を僅かに含む。しまり・粘性弱。
US130	2 層: 黒褐色砂質土層 (10YR3/2)	貝類・魚骨を僅かに含み、少量の炭化物を伴う。しまり・粘性弱。
US191	黒褐色土層 (10YR3/2)	ウニ殻・貝類・魚骨を少量含む。しまり・粘性弱。追加層①。
US133	3 層 (2): ウニ殻・魚骨層 (10YR3/2)	西壁側で東に向かって傾斜堆積する。ウニ殻・魚骨を主体とした層。
US136	4 層: 黒褐色土層 (10YR3/2)	区内の東壁・南壁側で厚く堆積する。ウニ殻・魚骨の混入は僅少。魚骨を少量含み、炭化物を伴う。
US132	3 層 (1): ウニ殻・魚骨層 (10YR3/2)	BO 区西側にレンズ状に堆積。魚骨・ウニ殻・貝類を多量に含む。
US135	4 層: 黒褐色土層 (10YR3/2)	US132 直下に堆積する。US133 よりもウニ殻・魚骨は少ない。
US141	黒褐色土層 (10YR3/2)	ウニ殻と貝類を少量含む。炭化物を僅かに伴う。追加層②。
US192	黒褐色土層 (10YR2/3)	ウニ殻・貝類・魚骨を少量含む。しまり・粘性強。炭化物・ロームブロックを中量含む。追加層③。
US195	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	ウニ殻・貝類・魚骨を中量含む。炭化物を伴う。追加層⑥。
US194	黒褐色砂質土層 (10YR2/3)	ウニ殻・貝類・魚骨を中量含む。炭化物を伴う。ロームブロックが少量混じる。追加層⑤。
US193	黒褐色土層 (10YR3/2)	貝類・魚骨を少量含む。追加層④。
US158	黒褐色土層 (10YR3/2)	US196 (ピット) の埋土。ウニ殻・魚骨を含む。
US198	黒褐色土層 (10YR3/2)	US197 (ピット) の埋土。US136 に酷似した層相を示す。
US140	4 層: ウニ殻・魚骨層 (10YR3/2)	南西の角から西壁・南壁側に緩やかに傾斜堆積し、ウニ殻・魚骨・貝類を多量に含む。
US156	黒色土層 (10YR2/1)	US141 の直下。全域で検出される。ウニ殻・魚骨の混入は僅少。しまり・粘性中。
US166	暗褐色土層 (10YR3/3)	しまり・粘性弱。発掘停止面。

3. B1a'区

(1) 概要(図6、表2)

本区は、B1a区北側で魚骨層(US152)の濃集部および倒置された元地式土器の底部を検出し、これらが土坑である可能性が考えられたことから、拡張区として設定したものである。調査区は1.0×1.5mの大きさで設定し、うち南側に0.3m幅のベルトを設けた。US119を検出したところで、B1a区US152の濃集部は土坑ではないと判断し、ベルトを除去した。その後はベルト部分を区別せず、一括して面的に掘削をおこなった。5月3日から9日まで7日間に亘って掘り進め、記録作業ののち埋め戻して調査を終了した。

基本層序はB地点の他の区と同様、近年の耕作土や擾乱からなる第1層群、貝層主体の第2層群、貝層群の下に水平堆積する第3層群に大別される。第2層群はおむね南北から北東へ傾斜堆積する様相を呈しており、各貝層間には砂層がみられる。擾乱により不明瞭ではあるが、貝層の堆積はより北側に連続する可能性がある。

遺物は、土器・石器・骨角器・動物骨・魚骨・貝類が出土している。土器については、第1、第3層群でII、IV、V群の土器が、第2層群では一部II群の土器もみられるものの、IV群の土器が主体となる。

(2) 層序と出土遺物(図6・24~45、表2・13・19~20、写真4~5)

US101 表土。堆積1層。B区全体で検出される。黒褐色砂質土を基質とし、草木根に富む。遺物は土器のほかに動物骨、貝類、現代遺物がみられる。II群、III群、IV群2類の土器が出土している。

US102 堆積2層。B区全体で検出される。根を多く含む黒褐色土層。近現代遺物がみられることから、近現代の擾乱を受けていると考えられる。遺物は、土器を主体として動物骨、貝類が出土しており、土器にはIV群4a類、V群a類のものがみられる。US101からこの層までが第1層群であるが、動物遺存体としてオットセイ(メス)ほか海獣類、哺乳類が確認されている。

US103 近現代の擾乱面。B区全体で検出される。US102に覆われる。

US173 ウニ殻、魚骨、アワビ類を含む混土貝層。土色は黒褐色である。遺物は土器、獸魚骨が多数出土しており、人骨、貝類、剥片、テフラを含む。土器は縄繩文土器(II群)、オホーツク式土器(IV群1~4・6・8類)、擦文土器(V群)がみられる。人骨については2点出土しており、内訳は大腿骨近位、頭骨片が1点ずつである。動物遺存体として、海獣類の寛骨(座骨)と哺乳類の腓骨とみられるものが確認されている。1Lサンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、貝類、ウニ類、魚骨はニシン科・タラ科・フカサゴ科・アイナメ科・カレイ科等が確認されている。

US159 黒褐色土層で、貝類、魚骨が混入する。遺物は土器、獸魚骨、貝類が多数出土し、石器、骨角器、ヒトの可能性がある骨、テフラ類や石器剥片類を含む。多様な土器が出土

しているが、掲載したもののうち続縄文土器（II群）2点を除いて、すべてオホーツク式（IV群）に属するものである。石器は尖頭器の基部が1点出土している。また、骨角器については用途不明の製品1点が出土している。ヒトの尺骨の可能性が高いとの同定結果を得た骨も1点みられる。動物遺存体についてはキタキツネ、ブタ、アシカ科、種不明陸獣類・海獣類が出土している。中でもブタとアシカ科が目立ち、ブタの大腿骨には切削痕がみられる。1Lサンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、貝類、ウニ類、ニシン科・アイナメ科・カレイ科等の魚類などの動物遺存体のほか、1点鉄製品が確認されている。

US164 黒褐色土に褐色土がブロック状に入る層で、B1a'区南西端にみられる。攪乱を受けており、現代遺物が数点出土している。

US119 堆積8層。黒褐色土層。この層以下はほぼ水平な堆積を示す。出土資料としては土器のほか、剥片、スコリア、自然石がみられる。土器はIV群2・4・6・8類、V群が確認された。

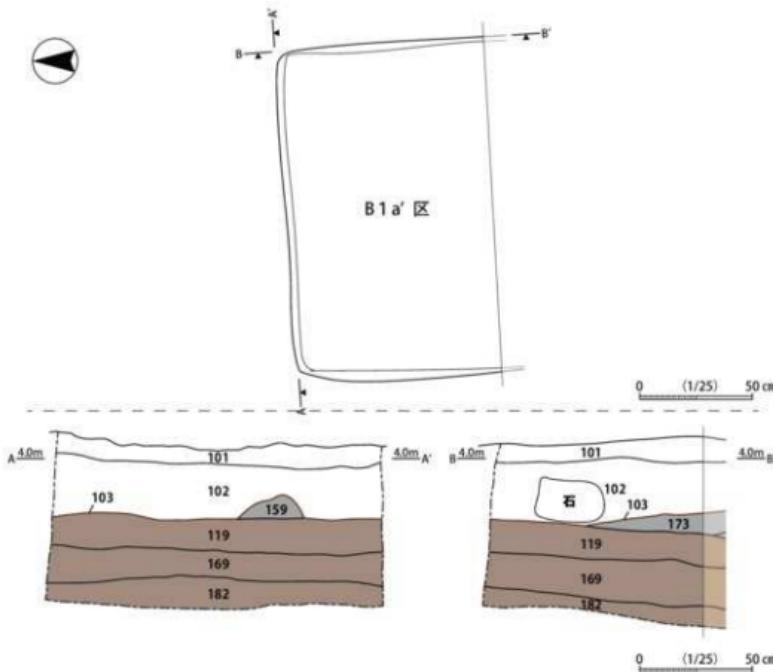


図6 B1a'区平面図・土層断面図

US169 堆積9層。US119の直下に水平に堆積する。土色はUS119と同様であり、色調による分層は困難であるが、こちらのほうがしまりが強い。遺物は検出されなかった。

US182 にぶい黄褐色土層。地山層である。遺物は検出されなかった。 (箱石 幸祐)

表2 B1a'区土層観察表

層序	層名(土色)	特徴
US101	表土(7.5YR2/2)	旧耕作土。黒色砂質土を基質とし、草木根に富む。遺物は土器のほかに動物骨、貝類、現代遺物がみられる。
US102	黒褐色土層(7.5YR2/2)	根を多く含む黒褐色土層。旧耕作土。現代遺物がみられ、土器を主として動物骨、貝類が出土している。
US164	黒褐色土層(7.5YR2/2)	B1a'区南西端に見られる黒褐色土に褐色土がブロック状に入る層。擾乱があり、現代遺物が数点みられる。
US159	黒褐色混貝土層(5YR2/2)	黒褐色砂質土層。土器、獸魚骨、貝類が多数出土し、石器、骨角器、人骨?、テフラ類や剥片類を含む。擾乱を受けており、残存するのは一部のみ。しまりやや弱・粘性弱。
US173	黒褐色混貝土層(7.5YR3/1)	傾斜堆積の貝層。ウニ殻・魚骨、アワビ他貝類を含む。土器、獸魚骨が多数出土し、人骨、剥片、テフラを含む。しまり・粘性弱。
US119	黒褐色土層(10YR2/2)	この層以下はほぼ水平な堆積を示す。遺物は土器を主体とし、剥片、スコリアがみられる。しまりやや強。
US169	黒褐色土層(10YR2/2)	US119と同じ土色だが、しまりが強く遺物を含まない。
US182	にぶい黄褐色砂質土層(10YR4/3)	地山層と推測される。しまり・粘性中。遺物を含まない。

4. B1a'区

(1) 概要(図7、表3)

本区は、第1次調査でB1区掘削の際に人骨を伴う土壌(DK1)が確認されたことによる拡張区であり、B1区北側に隣接して1.0×1.5mの規模で設定されたものである。昨年度にDK1を一部掘削した状況で調査を停止し、埋め戻していたが、現状を回復したうえでUS112より本年度の調査を開始した。4月28日から5月9日までの11日間に亘って調査をおこない、地山層(US119)を検出した段階で調査を終了、その後記録作業および埋め戻しをおこなった。なお、US146の北壁付近において、貝層の濃集部とそれに伴う倒置された元地式深鉢の底部下半を検出し、土壌の可能性があると判断したため、北側に隣接してB1a'区を拡張している。

堆積状況としてはB1調査区内の他の区画と同様に、耕作土や近年の擾乱からなる第1層群、貝層主体の第2層群、第2層群下で水平堆積する第3層群に大別される。第2層群はおむね南東側から北西側へ斜面堆積しており、各貝層間には砂層が確認された。

遺構は、昨年度の調査で土壌が3基確認されている(DK1、DK3、DK4)。DK1は人骨を伴う土壌であり、今回の調査で新たに3点の成年人骨が確認された。DK3については昨年度の調査で掘削を終了している。DK4については出土した骨は人骨ではないと同定されており、またB1a'区側において、覆土(US111)中に現代遺物の混入がみられることがから、後世に擾乱されていると考えられる。

遺物については土器、剥片類、人骨、動物骨、貝類が出土している。土器については、昨年度調査の第1層群では擾乱により混在している土器群、今回調査の第2層群ではオホーツク式土器群(IV群)および若干の擦文土器(V群)、第3層群ではIV群がほぼ全てを占める、といった出土傾向が観取される。また、動物骨、貝類については第3層群ではみられない。

(2) 層序と出土遺物(図7・24~45、表3・13、写真2)

US101 表土。耕作土であり草木根を多く含む。昨年度調査済みである。

US102 堆積2層。昨年度に調査済みだが、土層断面精査中に新たに土器、動物骨、現代遺物が出土した。土器は掲載していない。動物遺存体としては哺乳類とみられる骨片が確認されている。

US105 DK1土壌の埋土第1層。遺物は土器21点、人骨3点、動物骨多数、貝類5点、炭化木材1点が出土した。土器は1点を掲載しており、IV群4b類に分類される。人骨については頭骨2点、肋骨1点でいずれも成人と同定された。これらはすべてDK1の壁際より出土している(写真2)。また、昨年度の調査で得られた一部の遺存骨には切創痕らしき損傷がみられる。1Lサンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、動物遺存体は貝類、ウニ類、ニシン科・タラ科・フカカサゴ科・アイナメ科・その他魚類、鳥類、哺乳類が検

出された。

US190 昨年度に未調査であった、US105 下の DK1 土壌（US104）の埋土第2層。土器、動物骨が出土している。1L サンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、貝類、ウニ類、ニシン科・アイナメ科等の魚類、海獣類が確認された。

US104 DK1 土壌。形態は直径約 70cm のほぼ正円で深さ 40cm を測る。US204、US112 を切る。土壌中心より北東方向の US204 の直上には長辺 50cm、短辺 30cm を測



写真2 DK1 人骨出土状況

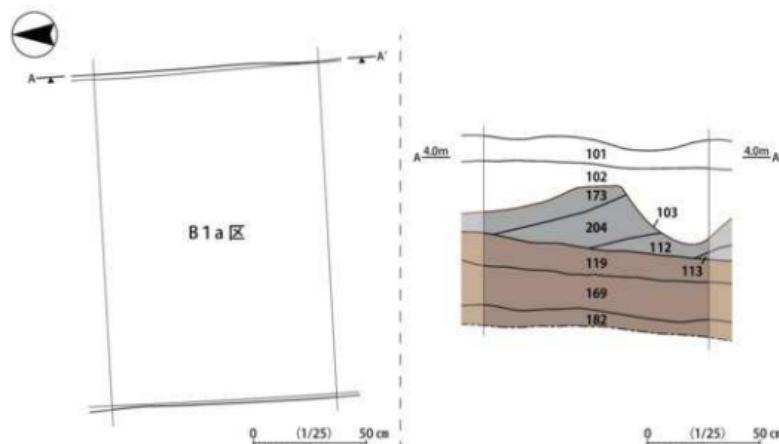


図7 B1a 区平面図・土層断面図

る不整長方形、厚さ 5cm 程度の平石がみられた。土壤掘り込み面と同一面に置かれ、貝層の堆積に沿って傾斜しているとみられる。

US109 DK3 土壌の埋土。昨年度調査済みである。動物遺存体としては哺乳類とみられる骨片が出土している。

US108 DK3 土壌。土層断面では不明瞭である。推定径 60cm で平面形はほぼ正円、確認された深さは 10cm 程度である。上部が攪乱により消失していると考えられる。

US111 DK4 土坑（US110）の埋土。現代遺物がみられ、近年の攪乱が想定される。今回調査で新たに土器 15 点、現代遺物 1 点、動物骨 3 点が出土している。土器は 3 点を掲載しており、内訳は IV 群 4a 類が 1 点、V 群 a 類が 2 点である。

US110 昨年度の調査で DK4 土坑としたものだが、攪乱を受けており不明瞭である。平面形は不整形で長さ 50cm 以上、幅約 60cm、深さ約 30cm を測る。土層断面においても観察は困難である。

US174 三角形の砂だまり状に検出された茶褐色土層で、動物骨、貝類を含む。遺物は土器 9 点、動物骨 11 点が検出された。土器は 3 点を掲載しており、IV 群 6b 類 2 点、IV 群 8b 類が 1 点である。動物遺存体としてはクジラ目ほか、海獣類がみられる。1L サンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、貝類、ウニ類、ニシン科・アイナメ科・カレイ科ほか魚類が確認された。

US173 堆積 3 層。暗褐色混貝土層で、ウニ殻、魚骨、アワビ類を含む。B1a 区北側で濃集し、直上から元地式の土器底部が出土した。遺物は土器 12 点、人骨 1 点、動物骨 6 点、貝類 7 点、炭化木材 1 点が検出された。土器は 3 点を掲載し、内訳は IV 群 10g 類、IV 群 2a 類、IV 群 8a 類が各 1 点である。人骨については椎骨と同定されている。動物遺存体としては海獣類、哺乳類とみられるものが出土した。1L サンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、エゾアワビ・タマキビガイ、ウニ類、フジツボ類、ツノザメ科・ニシン科・タラ科・フカカサゴ科・アイナメ科・カレイ科ほか魚類が確認された。

US204 US173 と US112 の間にやや厚く堆積する土層。遺物は土器 11 点、動物骨 3 点、貝類 3 点が出土している。土器は 4 点を掲載しており、内訳は IV 群 3b 類、IV 群 2a 類、IV 群 8c 類、IV 群 4a 類のものが各 1 点である。

US112 昨年度調査の B1a 区ウニ殻・魚骨層①に相当する。遺物は土器 3 点、動物骨 2 点が出土している。1L サンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、エゾアワビ、ウニ類、ニシン科・アイナメ科・カレイ科ほか魚類が確認された。

US113 極暗褐色砂質土層で、魚骨、貝類、ウニ殻が若干量混入する。遺物は土器 4 点、動物骨 1 点、貝類 1 点、剥片 1 点が出土している。1L サンプルを採取し水洗選別をおこなった結果、貝類、ウニ類、ニシン科・タラ科・フカカサゴ科・アイナメ科・カレイ科ほか魚類が確認された。

US119 堆積 8 層。黒褐色土層。遺物は土器 25 点が出土している。土器は 8 点を掲載し、内訳は III 群、IV 群 2d 類、IV 群 4a 類、IV 群 4b 類のものが各 1 点ずつ、IV 群 4f 類、IV

群8b類のものが各2点ずつである。

US169 堆積9層。US119の直下に水平に堆積する。土色はUS119と同様であり、色調による分層は困難であるが、本層のほうがしまりが強い。遺物は検出されなかった。

US182 にぶい黄褐色土層。遺物は検出されなかった。地山層と推測される。

US0 排土中や前回調査の埋め戻し土より、土器4点、動物骨3点、剥片1点が出土した。土器2点を掲載し、内訳はIV群8c類、IV群6a類が1点である。動物遺存体としてはオッセイ（メス）ほか哺乳類が確認されている。
(箱石)

表3 B1a区土層観察表

層序	層名(土色)	特徴
US101	表土(7.5YR2/2)	旧耕作土。黒色砂質土を基質とし、草木根に富む。本年度では遺物は出土していない。
US102	黒褐色土層(7.5YR2/2)	旧耕作上で、草木根を含む。現代遺物がみられ、土器を主体として動物骨、貝類が出土している。
US109	黒色砂質土層(10YR2/1)	DK3 土壌の埋土。昨年調査済みである。動物遺存体としては哺乳類とみられる骨片が出土している。
US105	黒褐色砂質土層(10YR3/2)	DK1 土壌の埋土第1層。しまり・粘性弱。小礫を含む。土器、人骨、動物骨、貝類がみられる。
US190	黒褐色土層(7.5YR2/2)	DK1 土壌の埋土第2層。しまり・粘性中、US119よりはしまりが弱い。東側に傾斜し、底面はやや波打つ。
US111	黒褐色砂質土層(10YR2/2)	DK4 土壌の埋土。現代遺物がみられ、近年の攪乱が想定される。遺物は土器、動物骨がみられる。
US159	黒褐色混貝土層(5YR2/2)	黒褐色砂質土層。土器、獸魚骨、貝類が多数出土し、石器、骨角器、人骨、テフラ類や剥片類を含む。攪乱を受けており、残存するのは一部のみ。
US174	黒褐色土層	三角形状の砂だまり様に検出された。貝類・獸骨を含む。遺物は土器、動物骨がみられる。
US173	黒褐色混貝土層(7.5YR3/1)	堆積3層。ウニ殻・魚骨層。アワビ類を含む。北壁中央部付近で濃集する。
US204	黒褐色土層(7.5YR2/2)	US173とUS112の間にやや厚く堆積する土層。東壁土層断面のみに観察される。
US112	暗褐色混貝砂層(10YR3/3)	前回調査のウニ殻・魚骨層①に相当する。ウニ殻、魚骨を多量に含み、しまり・粘性弱。
US113	極暗褐色砂質土層(7.5YR2/3)	しまりやや強、粘性中。魚骨、貝類、ウニ殻が若干量混入する。遺物は土器、獸骨、貝類、剥片が出土している。
US119	黒褐色土層(10YR2/2)	しまりがやや強い黒褐色土層。遺物は土器のみである。
US169	黒褐色土層(10YR2/2)	色調はUS119と同様であるが、しまりが強く遺物を含まない。
US182	にぶい黄褐色砂質土層(10YR4/3)	地山層と推測される。しまり・粘性やや弱い。遺物を含まない。

5. B1 区

(1) 概要(図8、表4)

第1次調査では、DK1～3の土壌3基を第2層(US102)直下で検出し、それぞれ区内において壙底面まで掘り下げ、第8層(US119)の上面で調査を停止していた。各壁面に対してはUS119の掘り下げを若干行い、図面上の堆積状況が明瞭になるように計らった。

今回調査においては、B1a区側の調査の進展を待ち、それが完了してからUS119を掘り下げ、以下US169から地山層のUS182まで掘削して、調査を終了した。

US119は、B1a区側からみると南東方向に緩やかに傾斜している。散漫ながら小さな土器片を包含するが、動物遺存体をまったく含まない、しまりのよい黒褐色の土層である。それ以下のUS169、182では遺物が検出されない。なお土器片の大半はIV群4類であり、IV群1類と2類の古いものが僅かに含まれる。

なお本区では、DK1の壙底面付近と考えられる位置(西壁から80cm、北壁から25cm)において、裏返し状態の小型ソーメン文土器片を検出した。出土状況を示す記録を欠いているが、略測した位置からはDK1の壙南壁付近に相当することから、US112上面を掘り込んで構築されたDK1土壙に伴うものと推定される。

(2) 層序と出土遺物(図8・24～45、表4・13)

US105(DK1埋土) 昨年度調査したDK1(US104)の埋土が一部残存していたもの。上述のように小型のソーメン文土器1点が検出されたが、US119の土器群とは明らかに時期を異にするものである。DK2の検出面直下で検出されたソーメン文土器(第1次報告:図44-247例)よりも、一時期古いものに比定される。

US119(旧8層) ウニ殻・魚骨層が互層をなしていた第2層群に比べると、その直下に当たる本層では、遺物の出土量が急減する。これは、本来の遺物包含部がDK1によって切られていることに起因すると考えられる。土器の断面は風化しておらず、遺棄されたときの状態を保っている。接合するものではなく、すべて断片である。掲載できたものは僅か9点にとどまる。そのうち7点は刻文と沈線を併用するものや摩擦式浮文を伴う土器群(IV群4・6・8類)で占められている。時期的には、まとまりの良い資料といえる。その他に、古い突瘤文の小片(156)や刻文土器(158)なども、各1点検出された。本層では、石器・骨角器類などは検出されていない。

US169(旧9層) US119に比べると、しまりや粘性はやや弱く、区内の全域に分布している。北壁・東壁側では、部分的に風化した石屑・石塊を含んでおり、やや硬くしまっている。本層でも、動物遺存体や石器・骨角器類は検出されていない。 (柳澤)

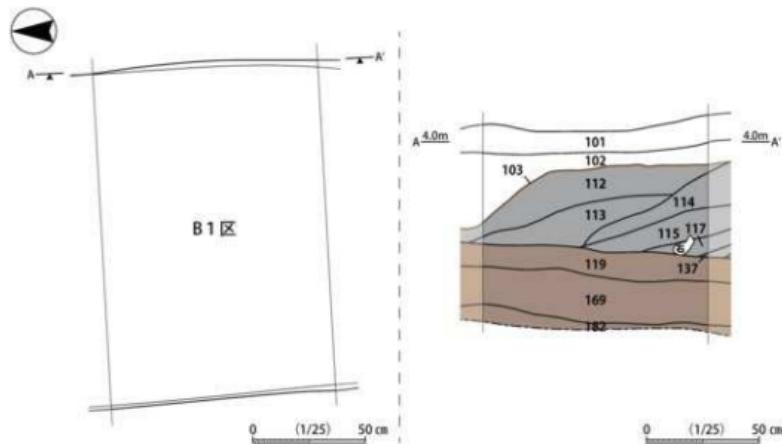


図8 B1区平面図・土層断面図

表4 B1区土層観察表（今回調査分のみ）

層序	層名（土色）	特徴
US105	黒褐色砂質土層 (10YR3/2)	DK1埋土。有機物と多量の小石を含む。US102(旧2層)に比べ、魚骨や貝類、ウニ殻などを相当量含む。土壤は、US119の上面から掘り込まれており、埋土はその面まではほぼ均一な様相で堆積し、人骨の断片を伴う。
US119	黒褐色土層 (10YR2/2)	旧8層。非常にしまりが強く、硬く堆積。区内の全域に分布し、南東方向に緩やかに傾斜する。しまり・粘性強。土器小片を散漫に包含する。
US169	黒褐色土層 (5YR2/1)	US119に比べ、しまり・粘性はやや弱い。区内の全域に広がり、部分的に風化した石肩・石塊を含む。遺物は出土しない。

6. B1b 区ベルト

(1) 概要 (図9、表5・6)

本ベルトはB1b区とB1区の間にあたる部分に位置する。B1区の調査終了後、5月7日より3日間に亘って断続的に掘り進めた。0.5×1.5mの範囲で設定し、B1・B1b区の土層堆積の関連性を観察すること、DK2 土壌プランを確定すること、出土遺物の層位的な変化を捉えることなどを目的として調査を行った。

調査の結果、本ベルトはB1b区とB1区を中心を持つ文化層の境界部分にあたることが明瞭に捉えられた。他方DK2のプランについては不明瞭な点が多く、推定するにとどまった。調査範囲が狭いことから出土遺物は相対的に少量であったが、土器組成という点では、以下のとおり層位的に重要な所見を得ることができた。

他区と同様にベルト内の堆積層は大きく三分される。第1層群は表土とその直下の堆積層で、大部分が近現代に擾乱されていると考えられる。掲載すべき出土遺物は見当たらない。ついでB1・B1b区に連続するウニ殻・魚骨層と砂層からなる傾斜堆積層群が検出される。これらを一括して第2層群として捉える。第2層群内では時期に大きな差ではなく、沈線文を施す土器(IV群4類)を主体とする。その他に厚手の元地式(IV群10類)も見られる。擦文土器(V群)は検出されていないが、B0区に似た出土傾向を示している。US119以下は、土層断面図に見えるように、緩傾斜の堆積土層へと移行する。地山への漸移層であるUS169・182までを含めて第3層群として捉えるが、遺物の出土はUS119に限定される。IV群1類の古い土器も混在するが、大部分は第2層群に類似したIV群4類に限定され、B1区の様相と共通している。排土(USO)からも、同時期の土器片が採集されており、US119に由来するものと推定される。なお以下では動物遺存体について、1Lサンプルのデータも加えて適宜記載する。

(2) 層序と出土遺物 (図9・24~45、表5・6・13・20、写真5)

US101 (旧1層) 表土層。出土遺物は少なく、掲載し得る土器片も無い。

US102 (旧堆積2層) 土器は小破片が多く、文様を有し掲載できるものに乏しい。動物遺存体も少なく、人工的な遺物も検出されていない。1Lサンプルは未採取である。

US103 (擾乱面) 東壁側において、傾斜堆積する多くの層を切り込み椀状に広がる近現代の擾乱面である。

US107 (DK2埋土) 埋土の堆積状況や内容は昨年度の第1次調査におけるB1区での所見と特に変わりない。土壤内から出土した土器で掲載できたのは僅かにIV群4b類の破片1点(066)である。人骨は破片を含めて、1・2次を通じて検出されていない。動物遺存体としては、エゾタマキガイ1点が確認されたにとどまる。

US106 (DK2) 昨年度の第1次調査においてB1区で検出された土壤。残念ながらベルト自体がB1区・B1b区における土層堆積の境界にあたるため、切り込み面や大きさなど

は判然としない。残存部分からの推定になるが、平面は約 80 × 90cm の卵形を呈し、断面形は底面が広く、深さは約 16cm で、全体として皿状の形態になるとを考えられる。

US112 (旧堆積 3 層) ウニ殻、魚骨、貝類を多量に含む土層である。層相は昨年度と変わりないが、出土遺物に乏しい。1L サンプルは未採取である。

US113 (旧堆積 4 層) 本層でもウニ殻、魚骨、貝類をある程度含んでいるが、やはり出土遺物に乏しい。掲載できる土器片も存在しない。

US114 (旧堆積 5 層) ウニ殻、魚骨を多量に含む層である。東壁に向って急傾斜で堆積する。動物遺存体は豊富に検出されたが、他の遺物で掲載できるものは出土していない。貝類は、イガイ・タマキビガイ科の 2 種にとどまる。ウニ類が多い。魚類では、アイナメ科・ニシン科が目立ち、タラ科・フサカサゴ科なども若干含まれている。

US115 (旧堆積 6 層) 暗褐色の砂層で、本層も東壁に向って傾斜堆積する。出土遺物に乏しく、動物遺存体では微量の海獣類が検出されたのみである。

US116 (旧堆積 7 層) 褐色砂を基質として、ウニ殻や魚骨を多量に含む層である。西壁から東壁に向って傾斜堆積する。出土遺物は少なく、土器で掲載し得たのは僅か 2 点にとどまる。113 例 (IV 群 2a 類) と元地式に比定される厚手の破片 (IV 群 10d 類) である。骨角器として、本層の上面で骨鋤の断片が 1 点出土している (479)。動物遺存体としては、ブタ、アザラシ科を含む海獣類、ウミズズメ科を含む鳥類が観察される。貝類は 8 種が検出された。タマキビガイ類が目立ち、イガイやウバガイ、エゾアワビ・エゾチヂミボラ・ヒメエゾボラなども確認された。これらはフジツボ類とともに、僅かに伴う程度である。それに対して、ウニ類は多量に検出されており、魚類では、アイナメ科が最も多い。ついでニシン科・フサカサゴ科・タラ科と続き、カレイ科は微量であった。

US117 (旧 7 層下間砂層) US116 下で東壁に向ってしだいに厚さを増して堆積する砂層である。本層でも出土数は少ないが、興味深い土器片が検出された。沈線を引いた肥厚口縁部を有し、頸部に大きな鋸歯文をえがく 116 例、幅広い口縁部端に爪形文を施し、手捏ね風な作りの 117 例、それに元地式に比定される厚手の 118 例、続縄文土器の 115 例である。また、動物遺存体も若干量が検出されている。海獣類のオットセイ、鳥類のアホウドリ科、貝類、ウニ類が僅かに出土している。魚類ではややタラ科が目立ち、ニシン科・アイナメ科・カレイ科などがそれぞれ少量含まれている。

US137 暗褐色砂質土層。ウニ殻、魚骨、貝類を多く含む。B1b 区側からの堆積層で、ベルト内で末端が収束する。出土遺物に乏しく、IV 群 4b 類 2 点が検出されたにとどまる。動物遺存体も掘削時には鳥類 1 点が出土したに過ぎないが、1L サンプル中より、かなりの種数が確認された。貝類ではイガイとタマキビガイなど、ウニ類も含まれている。魚類では 7 種が確認された。アイナメ科・ニシン科が目立つほか、フサカサゴ科・タラ科・ヒラメなどが続き、カジカ科も僅かに伴っている。魚骨をやや多く含み、海獣類や鳥類の遺存骨に乏しい点が特徴的といえよう。

US203 暗褐色砂質土層。US137 と US142 の間層に相当する。出土遺物に乏しい。若干

の魚骨が出土しているが、1L サンプルが未採取のため、詳細は不明である。

US142 黒褐色砂質土層。ウニ殻、魚骨、貝類を多く伴う。B1b 区から連続する層で、その末端がベルト内で収束する。土器の出土は乏しいが、動物遺存体は豊富に検出されている。貝類は 8 種、タマキビガイ類を筆頭にして、イガイ・エゾチヂミボラなどが目立ち、エゾアワビ・ヘソアキクボガイ・ヒメエゾボラは、ごく僅かに検出された。ウニ類が多く含まれている。魚類も豊富に含まれており、約 10 種が確認された。タラ科が目立っており、それにアイナメ科・フサカサゴ科・ニシン科が続く。その他ではカジカ科・カレイ科の存在も注目される。また点数は少ないが、ツノザメ科やネズミザメ科も検出されている。鳥類ではアホウドリ科が 1 点のみ、陸獣類としては、ブタが多く、他にアシカ科・アザラシ科等の海獣類が僅かに確認された。

US150 US142 の下部にある暗褐色砂層（旧 US142 間砂層）。ウニ殻、貝類、魚骨を少量含む。B1b 区側からベルトに向って傾斜する。

US199 黒褐色砂質土層。US150 の下部に堆積（旧 US142 下部）し、魚骨、貝類、ウニ殻などを多量に含んでいる。B1b 区から連続する層で、ベルト内でその末端が収束する。US142 と同じ砂質土層であるが、動物遺存体の包含量ははるかに少ない。掘削時の出土例は無く、1L サンプル中より各種の遺存骨が確認された。貝類は微量で 1 種に止まる。ウニ類は多く含まれており、魚類も 6 種が確認された。アイナメ科が最も多く、ついでニシン科が目立つ。タラ科・フサカサゴ科はやや少なく、カジカ科・カレイ科はごく僅かに検出された。海獣類や鳥類などを含まない点が、本層の特徴である。

US143 黒褐色砂層。魚骨、貝類を僅かに含む B1b 区から連続する層で、東壁側においてごく僅かに堆積する。出土遺物に乏しい。動物遺存体の出土は無く、1L サンプル中でも、貝類、ウニ類、魚骨などが、それぞれ若干量検出されたにとどまる。

US160 黒褐色砂質土層。ウニ殻、魚骨を僅かに含み、調査区の東側で堆積し始める層である。出土遺物に乏しい。

US119（旧堆積 8 層） 黒褐色土層。非常にしまりが強い堆積層で、ベルト内の全域に広がり南東に向って緩やかに傾斜する。動物遺存体は検出されていない。上位の層に比べると、小面積ながらもかなりの土器片が出土した。刻文と沈線文を併用する IV 群 4 類をはじめとして、刻文土器（160）、十和田式土器（159）などが含まれており、B1 区の US119 に類似した傾向を示している。

US186（焼土②） 暗褐色土層。B1b 区の焼土①（US167）と同レベルの東寄りの地点で検出された。直径約 25cm のほぼ円形で、5 ~ 10cm の厚みを有する。無遺物である。

US187（焼土③） 暗褐色土層。US186 と同レベルでベルト中央において検出された。梢円形を呈し、25 × 40cm の大きさで、5 ~ 10cm の厚みを有する。無遺物である。

US169 黒褐色土層。しまり・粘性とともにやや強い土層であり、ベルト内全域に堆積する。無遺物層である。なお US119 との境界は、漸移的で明瞭には捉えられない。

US182 鈍い黄褐色砂質土層で、地山層に相当する。しまりはやや弱く、粘性に乏しい。

直径2cm程度の固結した粘土粒を含む。無遺物層である。

(柳澤)

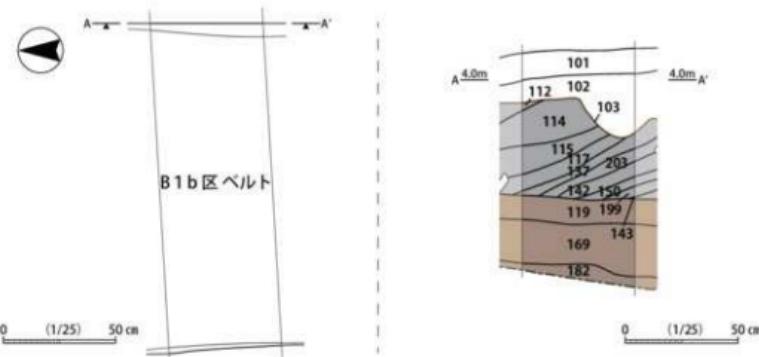


図9 B1b区ベルト平面図・土層断面図

表5 B1b区ベルト土層観察表(1)

層序	層名(土色)	特徴
US101	表土(7.5YR2/2)	草木根を多量に含む旧耕作土。黒褐色の砂質土層。しまり・粘性弱。
US102	黒褐色砂質土層(7.5YR2/2)	旧堆積2層。黒褐色の砂質土層。有機物と多量の小石を含む。しまり・粘性弱。
US107	黒褐色砂質土層(10YR2/3)	DK2埋土。有機物、礫・小石を多量に含む。ウニ殻を主体として、魚骨、貝類を多量に伴う。底面では、US116と区別できない部分がある。
US112	暗褐色砂質土層(10YR3/3)	旧堆積3層。ウニ殻、魚骨、貝類を多量に含み、土質分に乏しい。しまりやや弱、粘性弱。B1b区からB1bベルトにかけて堆積し、北側に傾斜する。直径5~8cmの砂溜まりを含む。
US113	黒褐色砂層(10YR2/2)	旧堆積4層。ウニ殻、魚骨、貝類を少~中量含む。直径3~5cmの砂溜まりが数箇所に存在する。しまり・粘性弱。本区のみに堆積。
US114	ウニ殻・魚骨層②(7.5YR3/4)	旧堆積5層。褐色砂に茶色の成分が含まれ、ウニ殻、魚骨を多量に含む。B1区の東壁側に向って急傾斜で堆積している。砂質土層。しまり・粘性弱。

表6 B1b 区ベルト土層観察表（2）

層序	層名（土色）	特徴
US115	黒褐色砂層 (10YR2/3)	旧堆積6層。黒褐色の砂層。土質分に乏しい。B1区の東壁に向って傾斜する。しまり・粘性弱。
US116	ウニ殻・魚骨層③ (10YR2/3)	旧堆積7層。褐色砂に多量のウニ殻・魚骨を含む。砂質土層で、B1区の南壁側を含むベルト部で検出される。東壁に向って緩やかになだれながら薄層化する。しまり・粘性弱。
US117	暗褐色砂層 (10YR3/3)	旧堆積7層下間砂層。湿り気のある暗褐色の砂層で、ごく少量のウニ殻、魚骨、貝類を含む。しまりやや強、粘性弱。
US137	暗褐色砂質土層 (5YR2/2)	ウニ殻、魚骨、貝類を多く含む。B1b区側からの堆積層でベルト内で収束する。しまり・粘性弱。
US203	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	US137とUS142上部の間層。魚骨を少量含む。しまり・粘性やや弱。
US142	黒褐色砂質土層 (10YR3/1)	ウニ殻、魚骨、貝類を多く伴う。B1b区からベルトに向って厚く堆積し、収束する。しまり弱、粘性やや弱。
US150	黒褐色砂層 (10YR3/1)	US142の下部にある黒褐色砂層（旧US142間砂層）。ウニ殻、貝類、魚骨を少量含む。B1b区側からベルトに向って傾斜する。しまり・粘性弱。薄く均一な層。
US199	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	US150の下部に堆積（旧US142下部）。魚骨、貝類、ウニ殻を多量に含む。しまりやや弱、粘性弱。B1b区から連続する層。
US143	黒褐色砂層 (10YR3/1)	魚骨、貝類を僅かに含む。しまり・粘性弱。B1b区から連続する層で、東壁側に僅かに堆積する。
US160	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	ウニ殻、魚骨を僅かに含む。調査区南東角付近に堆積する。しまり・粘性やや弱。
US119	黒褐色土層 (10YR2/2)	旧堆積8層。非常にしまりが強い堆積。ベルト内の全域に分布し、南東方向に緩やかに傾斜する。
US186	黒褐色土層 (10YR2/3)	焼土②。焼土①と同レベルでベルト内に堆積。しまりやや弱、粘性中。
US187	暗褐色土層 (10YR3/4)	焼土③。焼土①・②と同レベルでベルト内に堆積。しまりやや弱、粘性中。
US169	黒褐色土層 (5YR2/1)	しまり・粘性やや強。全域に堆積する。US119との境界は不明瞭。
US182	にぶい黄褐色砂質土層 (10YR4/3)	地山層に相当する。しまりやや弱、粘性弱。直径2cm程度の固結粘土粒を含む。

7. B1b 区

(1) 概要(図 10、表 7)

B1b 区は B1 区の南側に南北 1.0m × 東西 1.5m の大きさで設定し、5 月 1 日から 15 日間に亘って調査を行った。堆積状況は、第 1 層群(US101 ~ 103)・第 3 層群(US119 ~ 182) がおおむね水平堆積であるのに対し、第 2 層群(US137 ~ 202) は南北に急傾斜で堆積している。このため、調査区内の第 2 層群においては、北壁と南壁、東壁と西壁それぞれにおいて堆積層が対応せず、狭い範囲ながらも複雑な様相が観察された。

第 1 層群は US101・102 の 2 層で構成され、草木根を多く含む。水平に堆積し、区内全域でみられる。南半部については、第 2 層群中の混貝土層からの混入が多い。US137 から US202 までの第 2 層群については、土層断面図作成時の観察及び整理時の検討の結果、調査時点では傾斜堆積状況の認識が不十分であったことが確認された。そのため、遺物の取り上げ層位を正確に特定することが難しく、第 2 層群出土の遺物に関しては出土した日付を元に上中下に三等分して処理している。このことについては、III-1 で詳述する。第 3 層群は第 1 層群と同様にほぼ水平堆積である。US161・165 は区内全域に広がる。US161 は昨年度の B1 区 8 層に相当し、US165 は B1 区 9 層に対応すると考えられる。調査区の南東隅の US165 上面では焼土(US167) を検出した。それより下位の US182 は地山層となる。遺物を含まない本層上面で調査を終了した。

遺物は、土器、石器、骨角器、獸骨、魚骨、貝類が出土している。このうち、獸骨、魚骨、貝類は第 2 層群中に多くみられる。土器片は 150 点ほどを数える。堆積第 2 層(US102) からは、ガラスなど近現代遺物が出土していることから、堆積第 1 層(US101) と堆積第 2 層は近現代の耕作などに伴う擾乱層であると推測される。第 2 層群は厚く互層をなして堆積しており、大半の遺物が集中して検出された。土器片をはじめ、海獸骨、陸獸骨、鳥骨、魚骨、貝類が多く出土している。土器は、上層からは沈線文を施す土器(IV 群 4 類) が出土している。第 2 層群の中では、中層から最も多くの土器片が発見された。摩擦式浮文を施す土器(IV 群 6 類) が主体を占め、ほかに突帯を施す土器(IV 群 1 類)、刻文を施す土器(IV 群 2 類)、無文土器(IV 群 8 類) などが出土している。また擦文土器(V 群) も、ごく少片ながら 1 点が出土している。下層では突瘤文・突帯を施す土器(IV 群 1 類) と摩擦式浮文を施す土器(IV 群 6 類) が主体となっている。ほかに貼付文を施す土器(IV 群 5 類) もみられる。第 2 層群の動物遺存体では陸獸骨が目立っている。種別ではブタが多く、ほかにオットセイやアシカ科も出土している。さらに貝類、魚骨も多量に出土しており、第 2 層群から出土した豊富な遺物群は、当時の人々の生活状況を反映していると考えられる。第 3 層群では爪形文を施す土器(IV 群 3 類) が主体を占め、海獸骨や陸獸骨はみられなくなる。また、貝類、魚骨もごく僅かで、第 2 層群と比べると大幅に減少している。

(2) 層序と出土遺物（図 10・24～45、表 7・13・19～20、写真 4～5）

US101 表土。堆積第1層。黒褐色砂質土を基質とする。全体的に草木根が多く含む。遺物は、土器、獸骨、魚骨、石器剥片が出土している。土器は近現代の攪乱に伴い二次的に堆積したものと思われる。円形刺突文を施す土器（IV群2d類）と無文土器（IV群8a類）が僅かに出土している。

US102 堆積第2層。US101と同様に黒褐色砂質土を基質とする。調査中はUS134としていたが、昨年度の調査でB1区から検出されたUS102（堆積第2層）同じ層であるため統合した。遺物は、土器、石器、海獸骨、陸獸骨、鳥骨、魚骨、貝類、ガラスなどの近現代遺物が出土している。土器は沈線文を施す土器（IV群4b類）を主体として、刻文を施す土器（IV群2a類）、無文土器（IV群8a類）も出土している。動物遺存体はアシカ科・ブタが少量みられる。魚骨は、サケ科・フサカサゴ科・アイナメ科・カレイ科が少量出土している。刺突具の破片が1点検出された（写真5-481）。

US103 近現代の攪乱面である。US102を覆土としている。

前述のように本調査区の第2層群においては、出土遺物の取上げ層位について特別な処置をしているため、帰属する層位を特定できる遺物が少ない。その中で土器に関しては、摩擦式浮文や幅広い凹線を施すIV群6b・6c類が目立っている。刻文・沈線文を併用するIV群2d類もみられる。貼付文のIV群5b類や擦文土器のV群b類（环）も僅かに検出された。またIV群1a・c・d類なども、他区と同様に混在的に出土する状況が認められる。

US137 北壁側で厚く堆積しており、ウニ殻や魚骨、貝類を相当量含む層である。動物遺存体は、主にニシン科・アイナメ科などが確認されている。

US203 US137とUS142に挟まれた間層に当たる。動物遺存体はアイナメ科などが僅かに確認されている。

US142 本層はウニ殻、魚骨、貝類を多量に含む層で北壁側に厚く堆積し、南壁側に広がる。魚骨層と認められる。魚骨で種が同定できるものはわずかで、ニシン科・フサカサゴ科・アイナメ科などが確認されている。

US150 US142の下部を中心に検出された。ウニ殻や魚骨の量は少ない。区内の中央から北側の部分に堆積する。動物遺存体は、ニシン科・アイナメ科などが確認されている。

US199 US150と同じくUS142の下位で検出された。ウニ殻、魚骨、貝類を多量に含む。1Lサンプル未採取である。

US143 南壁から北壁に向って傾斜堆積する層である。魚骨や貝類は乏しい。動物遺存体は、ニシン科・アイナメ科・フサカサゴ科が僅かに確認されている。

US160 ウニ殻、魚骨、貝類が含まれている。動物遺存体は、ニシン科・フサカサゴ科・アイナメ科・ブタなどが確認されている。

US157 西壁側では薄層であるが、南壁側では厚く堆積する。動物遺存体は、ニシン科・

アイナメ科が少量ずつ確認されている。

US202 南西側の隅にみられる。動物遺存体は、ニシン科・タラ科・フサカサゴ科・アイナメ科がそれぞれ少量確認されている。

US119 堆積第8層。黒褐色土層である。遺物は土器、石器、魚骨が出土している。土器は爪形文を施す土器(IV群3b類)が主体的に出土しており、ほかに刻文を施す土器(IV群2a類)や無文土器(IV群8a類)なども出土している。魚骨はニシン科が出土している。

US167 焼土①。調査区南東部でのみ検出される。US165の上面に約 $10 \times 15\text{cm}$ の大きさで梢円形に水平堆積しており、東壁土層観察面においても5cmほどの厚さでみられる。

US169 堆積第9層。暗茶褐色砂質土層である。遺物は、土器のみ出土している。沈線文を施す土器(IV群4a類)、無文土器(IV群8a類)、厚手の土器(IV群10d類)がみられる。

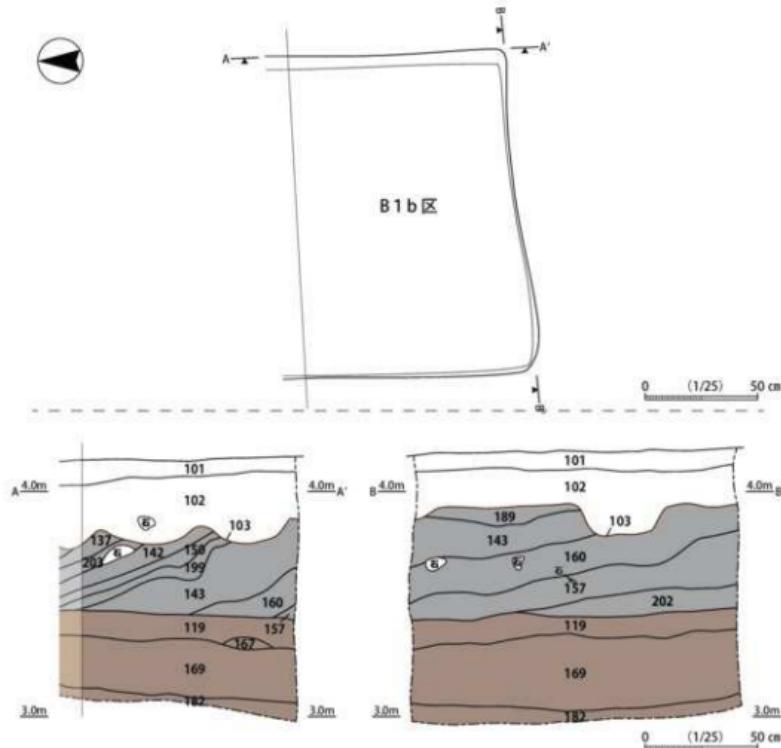


図 10 B1b 区平面図・土層断面図

US182 地山層に相当する黄褐色砂質土層。団結粘土粒を少量含んでいる。遺物は検出されていない。
(高坂 勇佑)

表7 B1b 区土層観察表

層序	層名(土色)	特徴
US101	表土	旧耕作土。草木根を多量に含む砂質土。しまり・粘性弱。
US102	黒褐色砂質土層 (7.5YR2/2)	堆積第2層。小石を含み、調査区全体に堆積する。しまり・粘性弱。
US137	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	ウニ殻、魚骨、貝類を中量含む。北壁付近に厚く堆積する。しまり・粘性弱。
US203	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	US137とUS142上部の間層。魚骨、貝類が少量みられる。しまり・粘性やや弱。
US142	黒褐色砂質土層 (10YR3/1)	ウニ殻、魚骨、貝類を多量に含む。北壁付近に厚く堆積し、南壁土層断面でもみられる。しまり・粘性弱。
US150	黒褐色砂層 (10YR3/1)	US142の下部にある黒褐色砂層。ウニ殻、魚骨、貝類を少量含む。調査区中央から北側に広く見られる。しまり・粘性弱。
US199	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	US142の下部にある黒褐色砂層。ウニ殻、魚骨、貝類を多量に含む。しまり・粘性弱。
US143	黒褐色砂層 (10YR3/1)	魚骨、貝類を少量含み、南壁から北壁に向かって傾斜して堆積する。しまり・粘性弱。
US160	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	ウニ殻、魚骨、貝類を中量含む。しまり・粘性やや弱。
US157	暗オリーブ褐色砂質土層 (2.5Y3/3)	北西隅でウニ殻・魚骨層の下に薄く見られる。西壁・南壁では厚く堆積している様子がみられる。ウニ殻、魚骨の混入はほとんど無い。しまり・粘性弱。
US202	オリーブ黒色砂質土層 (5Y2/2)	調査区南西隅でのみみられる。魚骨を少量含む。部分的に暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) のブロックを少量含む。しまりやや強、粘性弱。
US119	黒褐色土層 (10YR2/2)	堆積第8層。調査区全体に堆積する。しまり・粘性やや強。
US167	焼土① (5YR4/4)	US119下部で部分的にみられる焼土である。調査区南東部で検出される。しまり・粘性やや弱。
US169	黒色土層 (7.5YR2/1)	堆積第9層。US119下に厚く堆積する。しまり・粘性やや強。
US182	にぶい黄褐色砂質土層 (10YR4/3)	地山層である。粒径2cmほどの固結粘土粒を少量含む。しまりやや弱、粘性弱。

8. B3 区

(1) 概要(図 11、表 8)

B3区は、第1次調査でB1区の西側に設定された調査区である。B1区から西側にB2区(未調査)を隔てて、南北1.0×東西1.5mの範囲となっている。昨年度は8層(US128)までで調査を終えており、今回はより下層の状況を確認し、地山の検出を目指した。地山層の12層上面を確認した時点で調査を終えた。

出土土器は、9層(US131)よりIV群を主体に確認されている。10層以下については、遺物は確認されていない。

(2) 層序と出土遺物(図 11・46・47、表 8・14、写真 2)

US131(9層) 黒褐色土。炭化物を含む。遺物は、土器、石器、骨が出土している。掲載できた土器は8点である。IV群主体で、182は沈線文、188は刻文を有する。187は、IV群1類で突帯を有する。189はV群の破片でハケメ痕をもつ。

US138(10層) 9層に似た黒褐色土。しまりあり、砂質。遺物は含まない。

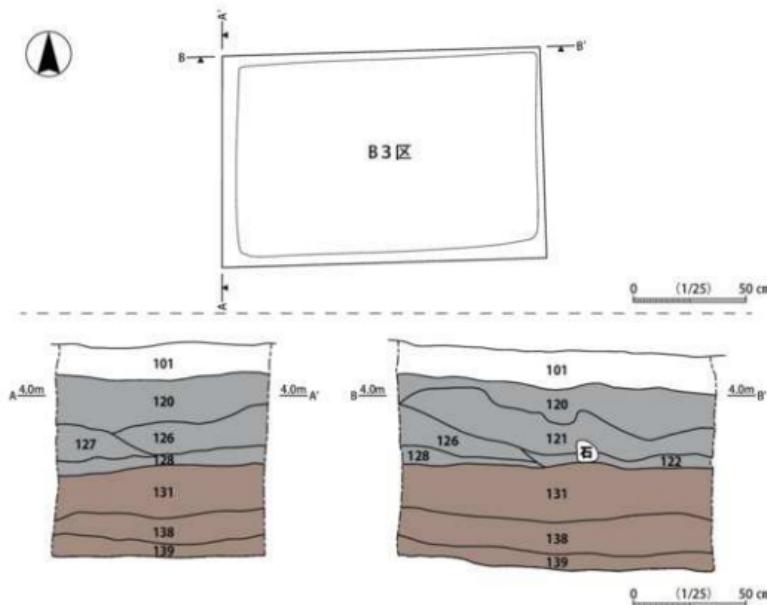


図 11 B3 区平面図・土層断面図

US139 (11層) 暗赤褐色砂質土。しまりあり。褐色土ブロックを含み、東側が貼り床状になっている。ブロックが固化したものであろう。遺物は含まない。地山との漸移層。

(US 未設定) (12層) 明褐色砂層。地山層。東方向に約10cm傾斜している。(山谷)

表8 B3区土層観察表(今回調査分はUS131/US138/US139)

層序	層名(土色)	特徴
US101	1層：表土(耕作土)	全体に15~20cmの厚さで堆積。
US120	2層：暗褐色砂質土層 (10YR2/3)	全体に堆積する。魚骨を含む。
US121	3層：魚骨層	魚骨・ウニ殻・獸骨を含む。特に東側では濃密。炭化物や砂・褐色土ブロックを含む。
US122	3層下部：暗褐色砂質土層 (10YR2/3)	魚骨を含む。
US123	4層：灰褐色砂層 (7.5YR5/2)	さらさらした砂層。遺物を含まない。
US124	5層：暗褐色砂質土層 (10YR2/3)	魚骨を含む。
US125	6層：灰褐色砂層 (7.5YR5/2)	遺物を含まない。
US126	6'層：灰褐色砂層 (7.5YR5/2)	さらさらとした砂層。
US127	7層：暗褐色砂質土層 (10YR2/3)	魚骨を含む。
US128	8層：暗褐色砂質土層 (10YR2/3)	上部は魚骨が混じる。下部は遺物を含まない。
US131	9層：黒褐色土層 (5YR2/1)	遺物、炭化物を含む。
US138	10層：黒褐色土層 (5YR2/1)	砂質でしまりあり。遺物を含まない。
US139	11層：極暗赤褐色砂質土層 (5YR3/2)	しまりあり。褐色土ブロック含む。遺物を含まない。

9. B7 区

(1) 概要 (図 12、表 9)

B7 区は、B0～B3 区の西側に位置する。B 地点の他の区に比べ地表面が 20～30cm 程度高くなっている。現在も畠地として利用されている。耕作の際に土器片が検出されるという情報を得て、文化層の堆積状況の把握を目的に 1.0 × 1.5m の範囲で調査区を設定した。

調査は 4 月 29 日から 5 月 12 日まで 14 日間に亘って行った。上層は度重なる耕作の影響を受けており、砂質土層の中に部分的な魚骨やウニ殻の濃集部を含んでいた。土層堆積は北東に向かってやや傾斜している様子がみられた。遺物は各時期のものが混在しており、現代遺物のほか、刻文土器や沈線文土器などが出土している。中層では砂や魚骨、ウニ殻などの薄い層が北東へ傾斜しながら互層をなしており、部分的に分層が困難であった。調査区の東側で土坑 (US148) と考えられる遺構が確認されており、その埋土からブタの下顎骨や、多数の石が出土している。直径 15cm 程の石がおおよそ同じ高さで複数検出される面 (US172) も確認された。下層では層のしまりがやや強くなり、遺物は少なくなった。B1b から B1a' 区で検出されている層 (US182) と同一と考えられる US185 を検出し、深さ約 1.5m まで掘削したところで調査を終了した。

遺物は非常に多く、土器、石器、獸骨、魚骨、貝類、近現代遺物などが多数出土している。上層である第 1 層群では耕作による攪乱の影響を受け、各種遺物のほか、近現代遺物も出土している。中層の第 2 層群では磁器片が 1 点出土しているほかは近現代遺物がみられなくなり、刻文を施す土器 (IV 群 2 類) や沈線文を施す土器 (IV 群 4 類) が主体となる。下層の第 3 層群では無文の土器 (IV 群 8・9・10 類) がみられるようになるが、全体の出土数は少なくなる。最下層にあたる US183・184 では刻文を施す土器と擦文土器 (V 群) が 1 点ずつ出土しているのみである。動物遺存体としては、アシカ科・アザラシ科等の海獸骨、ブタやキツネ等の陸獸骨のほか、アホウドリ科やウ科をはじめとする鳥骨も出土している。魚骨はタラ科やフサカサゴ科等が確認されている。貝類はエゾアワビやイガイ等が確認されている。また、骨角器は骨鏃が 1 点出土しているほか未成品が多数出土している。石器は石鏃・石斧が各 2 点と未成品数点が出土している。

(2) 層序と出土遺物 (図 12・48～73、表 9・15・19～20、写真 4～5)

US101 表土。堆積第 1 層。畠地の耕作土である黒褐色の砂層である。調査区全面に 5～10cm 程の厚さで堆積している。草木根や石が混入する。遺物は土器、石器、現代遺物、獸骨である。土器は、沈線文を施す土器 (IV 群 4 類) のほか、続縄文土器 (II 群)、刻文を施す土器 (IV 群 2 類)、摩擦式浮文を施す土器 (IV 群 6 類)、擦文土器 (V 群) が出土している。石器は石鏃の未成品が 1 点出土している。獸骨はネズミ科等、貝類はイガイ、ほかにフジツボ類の破片等が出土している。

US129 堆積第 2 層。オリーブ黒色土層。調査区全面に 30cm 程の厚さで堆積している。

魚骨とウニ殻を少量含む。おもに調査区の西側において、ウニ殻、魚骨、貝類がそれぞれ濃集している箇所が複数確認されている。東壁側では下の層であるUS149との境界が不明瞭で分層は困難であった。遺物は土器、獸骨、貝類、現代遺物、石器が出土している。土器は、刻文を施す土器（IV群2類）、沈線文を施す土器（IV群4類）を主体とし、その他に無文の土器（IV群8類）や擦文土器（V群）がみられる。獸骨はブタの頭蓋骨のほか、アシカ科・アザラシ科など海獣骨も出土している。鳥骨はアホウドリ科とウ科のものが数点出土している。また、ヒトの橈骨片と大腿骨片が各1点出土している。貝類はエゾアワビ・タマキビガイ・エゾチヂミボラ・イガイが出土している。石器は石鏃と考えられるものが1点出土している。

US145 堆積第3層。貝類の碎片を主体とする。ウニ殻をごく僅かに含む。調査区の中央部で検出され、東壁及び西壁付近ではほぼ確認できない。上面で薄く炭化物が堆積している様子が確認された。遺物は出土していない。

US147 堆積第3層。暗褐色砂層である。ウニ殻を少量含む。調査区南側のごく一部で

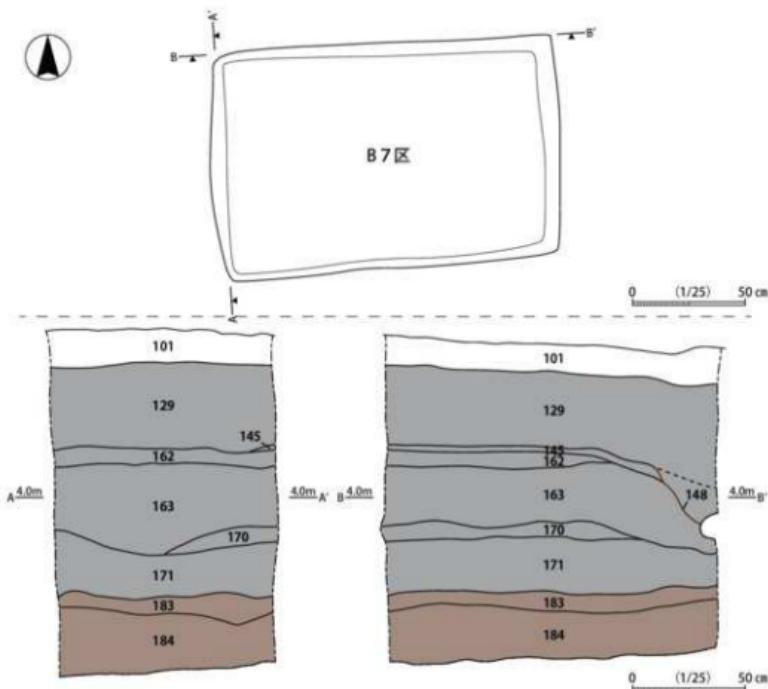


図12 B7区平面図・土層断面図

のみ検出され、土層断面では南壁でのみ確認される。上面で炭化物が検出されることから、US145と同時期のものと考えられる。遺物は出土していない。

US148 調査区の東側で検出された土坑と考えられる遺構である。US145及び147を切り込んで形成されている。壁面はやや緩やかに傾斜しているが、部分的に傾斜が急になり、南壁土層断面ではほぼ垂直に落ち込んでいる様子が確認された。深さは約40～50cmであったが、調査区外まで続いているため、正確な規模は不明である。

US149 US148とした土坑の埋土である。暗赤褐色の砂を基質とする。魚骨を中量含んでいる。部分的に炭化物の集中部が検出されており、US145及び147由来の物と考えられる。遺物は、土器、獸骨、人骨、貝類、石が出土している。土器は沈線文を施す土器(IV群4類)と厚手の無文土器(IV群10類)を中心とする。獸骨はアシカ科・アザラシ科等の海獸骨のほか、ブタの上顎骨が出土している。鳥骨はアホウドリ科・ウ科・カモノ科のものが出土している。貝類はエゾアワビが出土している。石は、北壁際の土坑切り込み面のやや近くで30cm程の扁平な石が出土したほか、15～20cm大の石が複数出土している。また、石礫が1点出土している。

US162 堆積第4層。暗赤褐色土層である。ウニ殻と魚骨をごく少量含む。US145及び147の下に約10cmの厚さで堆積しているが、US148とした土坑の影響で調査区の東側では検出されない。遺物は土器、獸骨、魚骨、貝類が出土している。土器は続縄文土器(II群)、突瘤文を施す土器(IV群1類)のほか、沈線文を施す土器(IV群4類)などが出土している。獸骨はアシカ科等の海獸骨が出土している。貝類はエゾアワビ・エゾチヂミボラが出土している。

US163 堆積第5層。ウニ殻、魚骨、貝類を主体とする層である。US162同様、US148とした土坑部分を除く調査区の全面で確認される。厚さは約20cm程度で、東側に向かってやや傾斜している。遺物は非常に多く、土器、獸骨、魚骨、貝類、石のほか、近現代のものと考えられる磁器片が1点出土している。土器は非常に多様で、刻文を施す土器(IV群2類)、沈線文を施す土器(IV群4類)、無文土器(IV群8・9・10類)等を中心に、爪形文を施す土器(IV群3類)、擦文土器(V群)なども出土している。海獸骨はアシカ科・アザラシ科など、陸獸骨はブタが主体で、頭蓋骨や下顎骨が出土しているほか、キタキツネが確認されている。鳥骨はアホウドリ科・ウ科・ウミスズメ科のものがそれぞれ多数出土している。また、ヒトの肋骨片が1点出土している。貝類はエゾアワビ・タマキビガイ・エゾチヂミボラ・ヒメエゾボラなどが確認されている。また、石斧が1点出土している。

US168 黄褐色の粘質土の集中部である。調査区の北側、US163の最下部で部分的に検出されたが、土層断面では確認できない。遺物は土器が1点出土している。貝類は出土していない。

US172 調査区北側で確認された配石と考えられる遺構である。US163の下部からUS170及びUS171の上面にかけて、約15～20cm大の石数点が半円を描くような形で出土した。

US178 US172とした配石に囲まれる部分を充填する黒褐色土層である。魚骨を少量含む。US170との境界は不明瞭で、特に土層断面においては分層が困難であった。土器は無文土器(IV群8・10類)が数点出土している。獸骨はアシカ科・アザラシ科等海獣骨が出土している。鳥骨はアホウドリ科・ウミスズメ科のものが出土している。貝類はエゾアワビ・タマキビガイ・エゾチヂミボラなど5種類が出土している。また、骨角器の未成品が1点出土している。

US170 堆積第6層。黒褐色土層である。しまりがやや強く、魚骨をごく僅かに含むほか、部分的にオリーブ黒色の粘性の強い土が混入している。おもに調査区の西側で検出される。遺物は少なく、刻文を施す土器(IV群2類)が2点出土しているほか、獸骨は種別不明の海獣骨が数点、貝類はエゾチヂミボラ・ヒメエゾボラ・イガイ各1点が出土している。

US179 堆積第6層。暗褐色砂層である。ウニ殻や魚骨などは含まれていない。調査区の南東側で、US148とした土坑の下に堆積している。US170とほぼ同じ高さで確認されているが、しまりはやや弱い。この層も遺物は少なく、土器は刻文・沈線文を施す土器(IV群4類)と無文土器(IV群9類)などが数点出土している。獸骨は種別不明の海獣骨が数点、鳥骨はアホウドリ科・ウ科のものが各1点出土しているのみである。貝類は出土していない。

US171 堆積第7層。黒褐色砂層である。しまりはやや強く、ウニ殻と魚骨をごく少量含む。調査区の南東隅を除き、約20~30cmの厚さで堆積している。遺物は土器、獸骨、石が検出されている。土器は無文土器(IV群9・10類)が主体で、ほかに沈線文を施す土器(IV群4類)などが出土している。獸骨はアシカ科・アザラシ科をはじめとする海獣骨が多数出土しているのに加え、キタキツネやブタなど陸獣骨も数点出土している。鳥骨はアホウドリ科・ウ科・ウミスズメ科等が多数出土している。貝類はエゾアワビ・ヒメエゾボラ・イガイ等が出土している。また、骨鐵が1点出土している。

US183 堆積第8層。黒色土層である。ウニ殻や魚骨などの混入物はほとんどなく、しまりがやや強い。調査区全体で約10cmの厚さで堆積が確認される。この層から遺物はほとんど確認されなくなり、土器は無文土器の小片数点が出土しているのみである。獸骨は種別不明の海獣のものが数点出土している。鳥骨及び貝類は出土していない。

US184 堆積第9層。黒色土層である。混入物がほとんどなく、しまりがやや強い。US183に比べて粘性がやや強い。調査区全面で確認される。遺物はほとんどなく、無文土器の小片数点と、磨製石斧と考えられるものが1点出土しているのみである。獸骨、鳥骨、貝類は出土していない。

US185 堆積第10層。茶褐色砂層である。調査区全面で確認される。本区は地山層と考えられるこの層を検出したところで調査を終了した。
(北沙織)

表9 B7区土層観察表

層序	層名(土色)	特徴
US101	黒褐色土層(2.5Y3/2)	表土。耕作地として使用されており、草木根や石が混入している。しまり・粘性弱。
US129	オリーブ黒色土層(5Y2/2)	堆積第2層。調査区全面に約30cmの厚さで堆積している。魚骨とウニ殻を少量含む。調査区の西側では、魚骨、貝類、ウニ殻それぞれの濃集部が検出される。しまり・粘性弱。
US149	黒褐色土層(5YR2/2)	US148とした土坑の埋土。魚骨を中量含んでいる。土層断面では部分的にUS129との境界が不明瞭であった。炭化物の集中部がみられる。しまり・粘性弱。
US145	貝類濃集部	堆積第3層。ウニ殻を少量含む貝類の濃集部。調査区の中央部でのみ検出され、南壁・東壁土層断面では確認できない。上面にごく薄く炭化物が堆積している。しまり・粘性やや弱。
US147	暗褐色土層(10YR3/3)	堆積第3層。ウニ殻を少量含む。調査区南側で部分的に検出される。上面にごく薄く炭化物が堆積している様子が確認される。しまり・粘性弱。
US162	暗赤褐色土層(5YR3/2)	堆積第4層。ウニ殻と魚骨をごく少量含む。調査区の西側で約10cmの厚さで検出される。しまり・粘性弱。
US163	ウニ殻・魚骨層	堆積第5層。ウニ殻、魚骨、貝類を主体とする層。調査区の西側ではUS148とした土坑に切り込まれ確認できない。しまり・粘性弱。
US168	黄褐色粘質土集中部(10YR5/6)	US163の最下部で部分的に検出される。粘質土の集中部である。土層断面では確認できない。しまりやや弱、粘性やや強。
US178	黒褐色土層(5YR2/2)	US172とした配石と考える遺構を充填する上層。魚骨を少量含む。US170との境界が不明瞭で、土層断面では分層が困難であった。しまりやや弱、粘性弱。
US170	黒褐色土層(5YR2/2)	堆積第6層。魚骨をごく僅かに含む。部分的に粘性のやや強いオリーブ黒色の土が混入する。土層断面では調査区の北西側で検出される。しまりやや強、粘性やや弱。
US179	暗褐色土層(7.5YR3/3)	堆積第6層。ウニ殻、魚骨はほとんど含まない。US170とほぼ同じレベルで、調査区の南東側で検出される。しまり・粘性やや弱。
US171	黒褐色土層(2.5Y3/1)	堆積第7層。ウニ殻、魚骨をごく少量含む。調査区南東隅では検出されない。しまり・粘性弱。
US183	黒色土層(10YR1.7/1)	堆積第8層。調査区全面で検出される。しまりやや強、粘性やや弱。
US184	黒色土層(2.5Y2/1)	堆積第9層。調査区全面で検出される。しまり・粘性やや強。

10. E1 区

(1) 概要(図13、表10)

E地点は、沼浦海水浴場遺跡の今回の調査範囲の中では、最も西側に位置している。調査区は $4.0 \times 2.0\text{m}$ で設定したものを南北で二分し、北側を1区、南側を2区と呼称した。調査は5月5日から12日の8日間に亘って、E1区のみを対象としておこなった。

堆積層は、大きく3つの層群に分けられる。第1層群(US601・602)は現代遺物を多く含んでおり、耕作土であったと考えられる。第2層群に属すると考えられるUS603であるが、近現代の攪乱(US607)を強く受けて残存層厚が非常に薄くなっている状態のため、これらの攪乱の影響による上位層由來の遺物をある程度含んでいると考えられる。第2層群まではほぼ水平堆積であったのに対し、第3層群(US604・605)は、若干南西に向かって傾斜して堆積していた。これらの層からは土器片や石器・石片が若干出土している。第3層群に入ってからは遺物の出土がほぼなくなったため、調査面積を半分に減じて下位の堆積構造の確認を目指した。その後、北半分のサブトレンチにおいてしまりが強く固結化したブロックをところどころに含んだUS606を検出したところで調査を終了した。

遺物は、土器、石器、獸骨、魚骨、貝類が出土している。この内、獸骨、魚骨、貝類は、全て第1・2層群から出土しており、近現代の活動により残されたものであると考えられる。土器片はUS601～604で出土しており、76点の土器片を掲載した。第1層群からはオホーツク式土器(IV群)を主体とし、鈴谷式土器(III群)・擦文土器(V群)が出土している。第2層群からはオホーツク式土器(IV群)が出土している。第3層群では縄文土器(I群)とオホーツク式土器(IV群)が確認されている。石器はUS604・605から石鏃・搔器が出土している。

(2) 層序と出土遺物(図13・74～84、表10・16・19、写真4)

US601 表土。黒色砂質土を基質とする。草木根を多く含む。遺物は土器、近現代遺物が出土している。ほとんどが二次的に堆積したものと考えられる。土器は、沈線文を施す土器(IV群4b・f類)、摩擦式浮文を施す土器(IV群6a類)、無文土器(IV群8a・c類)などのオホーツク式土器を主体とし、その他に鈴谷式土器(III群)が出土している。

US602 堆積第2層。黒褐色砂質土を基質とし、ところどころにウニ殻、魚骨、貝類の層がブロック状に混入する。旧耕作土と思われる。US601と同様に草木根を多く含む。遺物は土器、海獸骨、陸獸骨、鳥骨、魚骨、貝類、近現代遺物が出土しているが、これらも二次的な堆積物と考えられる。土器では、突瘤文を施す土器(IV群1a・b類)、刺突文を施す土器(IV群2c・d類)、爪形文を施す土器(IV群3a・b類)、沈線文を施す土器(IV群4a・b・c・f類)、摩擦式浮文を施す土器(IV群6a・b類)、無文土器(IV群8b・c類)などのオホーツク式土器を主体とし、その他に続縄文土器(II群)・鈴谷式土器(III群)・擦文土器(V群a・b・d類)が出土している。陸獸骨はキタキツネ・ブタが出土している。

魚骨はニシン科・フサカサゴ科等が出土している。貝類はマイマイ目・クロタマキビガイ? が確認された。

US607 近現代と思われる攪乱面を一括したもの。耕作などの攪乱行為は複数回にわたる可能性がある。

US603 堆積第3層。基質はUS602と同様の砂質土だが、ウニ殻、魚骨、貝類をあまり含まない。全面的に根による攪乱や後世の掘り込み・耕作等による攪乱(US607)を受けている。遺物は土器、海獣骨、魚骨、貝類が出土しているが、US607の攪乱による上位堆積層由来の遺物が含まれているようである。土器では、沈線文を施す土器(IV群4a類)と無文土器(IV群8c類)が出土している。海獣骨はアザラシ科等が出土している。魚骨はニシン科が確認されている。貝類は破片のみで、種を同定するには至らなかった。

US604 堆積第4層。基質は粘性の高い黒色土である。遺物は土器と石器が出土している。土器は縄文土器(I群)、突瘤文を施す土器(IV群1b類)、刻文を施す土器(IV群2a類)、沈線文を施す土器(IV群4f類)が出土している。石器は石鏃2点と搔器2点が出土している。

US605 堆積第5層。黒褐色砂質土を基質としており、地山層の直上の層と考えられる。スコリア状の軽石を少量含んでいる。遺物は石器のみで、搔器が2点出土している。

US606 堆積第6層。基質は固くしまったにぶい黄褐色砂質土で、固結化したブロックをところどころに含んでいる。遺物は確認されていない。
(横田 真名望)

表10 E1区土層観察表

層序	層名(土色)	特徴
US601	表土(10YR2/2)	黒色砂質土を基層とし、根を多く含む。しまり・粘性弱。
US602	黒褐色砂質土層(10YR2/2)	調査区全体に約30cmの厚さで堆積する。根を多く含む。しまり・粘性弱。
US603	暗オリーブ褐色砂質土層(2.5Y3/3)	調査区の全体に堆積する。根を多く含む。しまり・粘性弱。
US604	黒色土層(7.5YR2/1)	調査区の全面で検出される。しまりやや弱、粘性弱。
US605	黒褐色砂質土層(7.5YR2/2)	調査区の全面で検出される。スコリア状の軽石粒を若干含む。しまりやや弱、粘性弱。
US606	にぶい黄褐色砂質土層(10YR4/3)	北側1mの範囲で確認される。地山層と考えられる。西壁では一部段状に落ちる様子が見られる。また、東から西に向かってやや傾斜する。しまりやや弱、粘性弱。

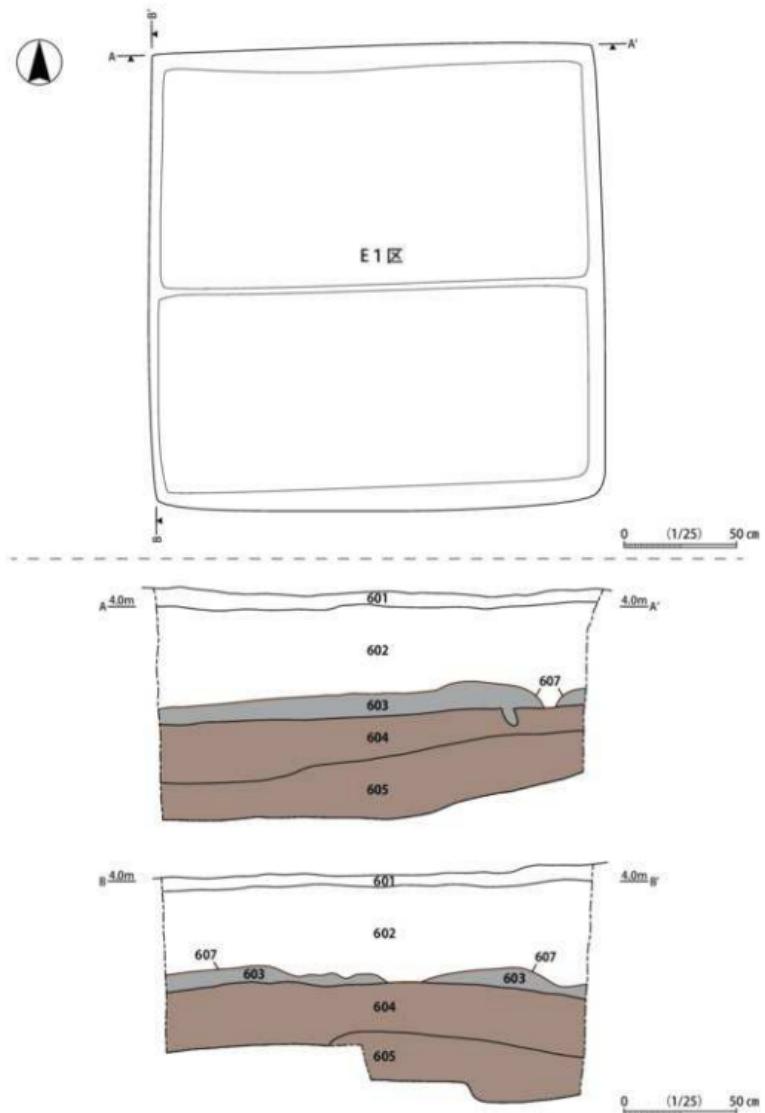


図 13 E1 区平面図・土層断面図

11. TP1

(1) 概要(図14)

TP1は、沼浦海水浴場遺跡の東端に位置する。B0区から平成14年調査の1・2トレーンを挟んで、約15m東に設定した。現地表面において本調査区はほかの調査区よりも高く、テラス状を呈していて背後に展望台の斜面を擁する。この高まりが何を意味するのか、元々の地形を残していること、あるいは近代以降の集落の造成に伴なって寄せられた土であること、その要因を探るべく調査を行った。調査範囲は、東西方向に1.0×1.5mで設定した。

層序は、表土以下、間層をはさんで上層・下層に区分された。各層序がフラットな厚さで堆積し、ブロック状の黄褐色土を含むこと、下層の遺物の時期が混在している状況など、ほかの調査区と様相を異にしていることからみて、現時点では後世の造成による堆積とみられる。第一段階として、下層が盛土され、整地(間層)を行ない、第二段階として、上層→表土の順で盛土されたと考えられる。

(2) 層序と出土遺物(図14・85~88、表17、写真3)

US205(表土) 褐色土。木根や石が多く、黄褐色ブロックを含む。層厚は、43~46cmでフラット。

US154(上層) 暗褐色土。木根や石が多く、黄褐色ブロックを少量含む。層厚は、44~46cmでフラット。表土に似ており、後世の盛土と考えられる。

US206(間層) 黄褐色土。しまり、粘性あり。炭化物を含む。層厚は10cm程度でフラット。

US155(下層) 暗褐色土。黄褐色ブロックや砂、石を多く含む。とくに下端において石を密に含む。遺物を含む。層厚は、34~37cmでフラット。土器は、IV群を主体に、I~III群まで散見される。

(地山層) 黒褐色土。未調査につきUS未設定。しまり強。小石や黄褐色粒含む。(山谷)

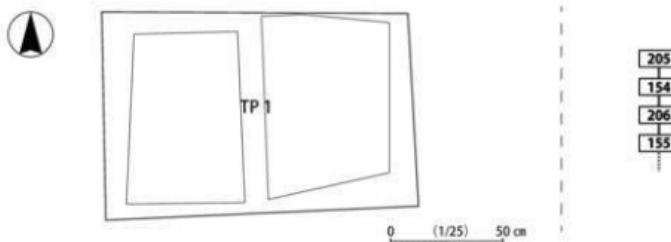


図14 TP1平面図・層序構成マトリクス

12. D1・D2 区

(1) 概要(図 16、表 11)

D 地点は平成 3 年度に北海道教育委員会が試掘をおこなった沼浦遺跡の範囲内に位置し、旧砂丘に沿った緩斜面の畠地である。沼浦海水浴場遺跡の第 1 次調査の際に、鈴谷式土器などが表探されたことから、鈴谷式期およびそれ以前の文化層の層位的な把握を目的として、調査を実施した。南北 2.0 × 東西 4.0m のトレーンチを設定し、それを東西方向で二分して西側を D1 区、東側を D2 区と呼称した。調査は D1・D2 区とともに、5 月 1 日から 5 日まで 5 日間に亘っておこなった。

土層堆積状況の特徴としては、東(D2 区)から西(D1 区)に向かって緩やかに傾斜し、色調の異なる砂層が成層状態を保って整然と堆積しているということが挙げられる。

D1・D2 区ともに表土である US401 掘削開始後、早い段階で US404 を確認した。US404 は第 3 層群に属する地山漸移層であると考えられることから、この段階で全面掘削を停止し、北壁側に D1・D2 区を横断する形で 0.5 × 4.0m のサブトレーンチを設定して、土層の堆積を確認するための掘削をおこなった。その後、D1 区にて US404 に切り込む形で溝状遺構(US406)が確認された。US406 は、側面および底面に黄褐色粘土ブロックが敷き詰められており、近現代の道路遺構の可能性が考えられる。US404 の下層からは US407、そのさらに下層に US408 を確認した。US404 下部および US407 上部で土器が複数確認されていることから、US407 上面がある一時期の活動面であった可能性はあるが、居住空間ではないと考えられる。US408 では遺物が全く確認できなかったため、US409 上面を検出したところで調査を終了した。

遺物は、土器、石器、獸骨、貝類のほか近現代遺物が出土している。土器は US401～407 において出土した。第 1 層群(US401～405)からは続縄文土器(II 群)・鈴谷式土器(III 群)が出土している。これらに混じって磁器・ガラス片・一錢硬貨などの近現代遺物が出土していることから、第 1 層群に属する堆積層は、近現代以降に攪乱・形成されたものと考えられる。沼浦遺跡に設定された D 区においては、沼浦海水浴場遺跡に設定された他調査区で検出されている第 2 層群に属する堆積層は検出されず、第 1 層群の直下から第 3 層群の堆積層が検出される。第 3 層群(US404～US407)では続縄文土器(II 群)が主体を占め、僅かに 1 点のみ無文土器(IV 群 8c 類)を伴っている。なお、下層の US404 においても近現代遺物が検出されたが、検出時の状況などから、これらは D1・D2 区全域に散在している近現代の柱穴や攪乱坑(US403)の影響を受けて第 1 層群から貢入したものと考える。石器は、第 1 および第 3 層群から 35 点の剥片が出土している。

(2) 層序と出土遺物(図 16・89～91、表 11・18)

US401 表土。黒色砂質土を基質とする。近現代に土質改良の目的で畑に撒かれたと考えられるウニ殻および貝類が混じる。遺物は土器片、石器剥片、磁器・ガラス片・一錢硬貨

などの近現代遺物が出土している。ほとんどが二次的に堆積したものと考えられる。土器は続縄文土器（II群）が2点、鈴谷式土器（III群）が3点出土している。

US403 D1・D2区全域に散在する近現代のものと考えられる柱穴および攤乱坑を一括したもの。埋土は全て表土と同じ組成のためUS401扱いとしている。US402および405を切り込むものがD1区、US404を切り込むものがD2区、US404およびUS407を切り込むものがD2区にて確認された。

US402 溝状遺構US406の範囲内において、US401下から検出される堆積層。検出状況からは溝状遺構US406の覆土第1層とも考えられるが、土層断面図を参照するとわかるように、堆積が薄いうえに傾斜堆積の影響でちょうど溝状遺構の外形線付近で当該層の堆積が途絶えていることから、断定することは難しい。黒褐色土を基質とし、堆積範囲はUS405におむね準ずる。遺物は確認されていない。

US405 溝状遺構US406の覆土。US402に覆われる。基質はUS404に近似する黒色砂質土。溝状遺構の底面・側面にあたる部分に黄褐色（10YR5/6）の粘土ブロックが集中するほか、全体にも若干量の粘土ブロックを含む。遺物は続縄文土器（II群）1点のほか、石器剥片や近現代遺物としてガラス片が出土している。

US406 D1区西半分で確認された、近現代のものと考えられる溝状遺構。側面および底面には、黄褐色粘土ブロックを含む土が敷き詰められている。

US404 US401下の黒色砂質土層。D1区西半で溝状遺構US406が切り込む。遺物は、磁器・ガラス片・鉄釘などの近現代遺物のほか、下層で土器片、石器剥片が出土している。土器は続縄文土器（II群）18点が出土した。

US407 US404下の砂質土層。US404からの変化は漸移的であり、はっきりと分層できるものではない。上部で土器片、石器剥片が出土している。土器は続縄文土器（II群）2点、無文土器（IV群8c類）1点が出土した。

US408 US407下の砂質土層。US407からの変化は引き続き漸移的であり、明確には分層できない。遺物は出土していない。

（大野 彩奈）

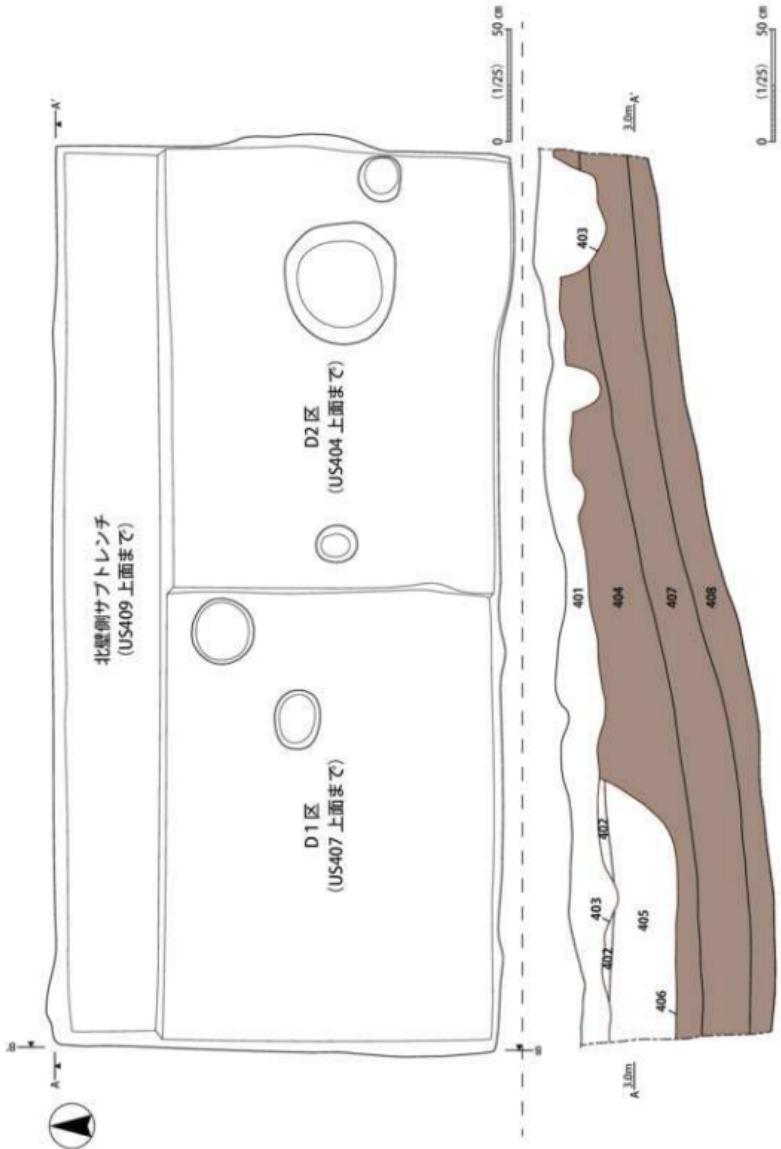


図 15 D1・D2 区平面図・土壌断面図（1）

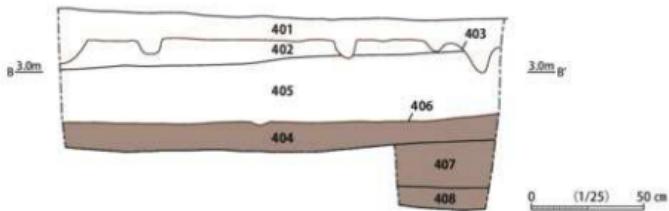


図 16 D1 区土層断面図（2）

表 11 D1・D2 区土層観察表

層序	層名（土色）	特徴
US401	表土	耕作土。黒色砂質土を基層とする。ウニ殻が肥料として混じる。土器片、石器片、近現代遺物を含む。
US402	黒褐色土層 (10YR2/3)	US401 下整地層。西側半分に堆積する US406 の遺構とその覆土 US405 を覆うように堆積する。範囲は US405 に準ずる。
US405	黒色砂質土層 (10YR1.7/1)	溝状遺構 US406 の埋土。基質は US404 に近似する黒色砂質土層。底面・側面に黄褐色 (10YR5/6) の粘土ブロックが集中するほか、埋土全体にも若干量の粘土ブロックを含む。土器片、石器片、近現代遺物を少量含む。
US404	黒色砂質土層 (10YR1.7/1)	US401 下の黒色砂質土層。D1 区西半で US406 遺構が切り込む。しまりがやや強く、粘性は弱い。下層に土器片、石器片を含む。
US407	黒褐色砂質土層 (10YR2/3)	US404 下の砂質土層。US403 の柱穴が 2 カ所ある。西側へ向かって傾斜する。下部になるとしまりがやや強く、粘性は弱い。US404 と漸移しており、境界は不明瞭である。上部に土器片、石器片が含まれる。
US408	黒褐色砂質土層 (10YR2/2)	US407 下の砂質土層。US407 と漸移していく、境界は不明瞭である。遺物を全く含まない。しまりがやや強く、粘性は弱い。

III. 出土遺物

1. 出土土器

(1) 土器の分類

本年度も多種多様な土器が出土した。混乱を避けるため、第1次調査の分類案に若干の変更を加えた（ゴシック体部分）。分類は文様・器形の特徴を基準として大きくI～V群に区分し、更に文様要素の個別的な特徴から細分を行った。本報告内の土器に関する記述と記載にはこの仮分類案を用いる（IV群 1a類を「IV-1a」の様に略記することがある）。

I群：縄文土器

II群：続縄文土器

III群：鈴谷式系

IV群：「オホーツク式系」

1類：突瘤文・突帯などを施すもの

a：突瘤文・貫通孔のみ b：突瘤文とその他の文様 c：突帯、その他の文様 d：胴部文様のみ

2類：刻文を施すもの、スタンプ文などを施すもの

a：刻文のみ b：刻文とスタンプ文・指押文など c：スタンプ・刺突文 d：円形刺突文

3類：爪形文、刺突文、刻み目文・指押文などを施すもの

a：押捺するもの b：捻りを加えるもの c：刺突紋、刻み目文 d：指押文

4類：沈線文・凹線文などを施すもの

a：平行沈線又は沈線・凹線文のもの b：刻文・刺突文・沈線文 c：縦沈線を施すもの

d：矢羽根状の沈線 e：斜格子沈線 f：沈線とその他の文様

g：斜行沈線又は鋸歯文を施すもの h：波状凹線文 i：ボッチのみ

5類：貼付文を施すもの

a：擬縄貼付文 b：直線・波状ソーメン文 c：ネットソーメン文

d：捻りもしくは押圧を加えるもの e：ボッチ・ボタン状 f：太い貼付文のもの

g：沈線・擬縄貼付文

6類：摩擦式浮文を施すもの

a：摩擦式浮文のみ b：摩擦式浮文とその他の文様 c：幅広凹線による摩擦式浮文

7類：突帯を持つもの（削除：1類に合体）

8類：無文のもの

a：胴部 b：底部 c：口縁部

9類：やや厚手のもの

a：刻文 b：貼付文 c：摩擦式浮文 d：無文 e：沈線・凹線文 f：スタンプ文 g：底部

10類：厚手のもの

a：沈線文 b：スタンプ文 c：突帯文 d：無文 e：摩擦式浮文 f：口唇部文 g：底部

V群：擦文土器

a：唐形 b：杯形 c：壺形 d：模倣的なもの e：その他

(2) BO 区(図 17 ~ 23、表 12)

BO 区においては、II-2において述べたように、調査時における第 2 層群の傾斜堆積の把握が不十分であったことから、水平掘削によって複数の堆積層の遺物が一緒に取り上げられた可能性を鑑みて、第 2 層群出土資料に関しては、出土日時をもとに上中下の三つのまとまりに再区分して処理することとした。第 2 層群上部は「BO-2upp」とし、含まれる US は US132, 133, 135, 136, 191、第 2 層群中部は「BO-2mid」とし、含まれる US は US132, 135, 136, 141, 192, 194, 195、第 2 層群下部は「BO-2low」とし、含まれる US は US135, 136, 140, 141, 192, 193, 194, 198 である。これらの処理を経ていることから、分析の精度は限定的である。第 1 層群からはオホーツク式土器を主体として他に続縄文土器、第 2 層群からはオホーツク式土器を主体として他に続縄文土器、鈴谷式土器、元地式土器、擦文土器、第 3 層群からは中厚手を含むオホーツク式土器のみが出土している。三層群とともに、オホーツク土器(IV 群)が主体であることは共通している。(岩城)

表 12 BO 区各層の土器分類別出土点数

US	土器分類別出土點数												総点数	
	I	II	III	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	IV-5	IV-6	IV-8	IV-10	V		
101							1						3	4
130	2		3	1	1	1	7						33	47
BO-2upp	3		1				1				1		22	28
BO-2mid	2				1	2	1		1				29	36
135											1	1		2
192													2	2
193													1	1
BO-2low	2	1	2			4	4			2	1	1	91	109
158													3	3
156				1						2			8	11
166						1							1	1

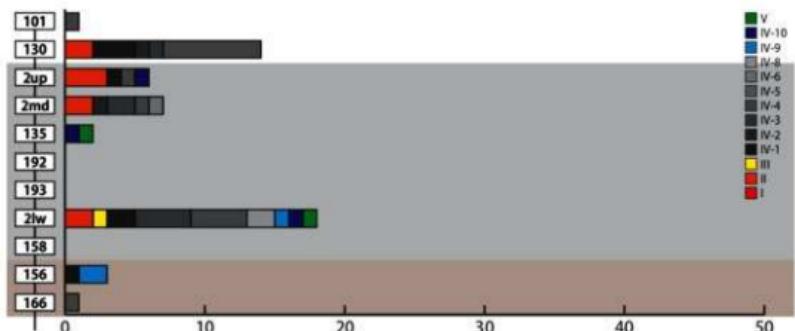


図 17 BO 区堆積各層の土器出土傾向(不明土器片は除く)

US 101



US 130 (1)

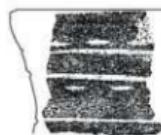
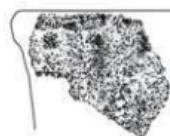
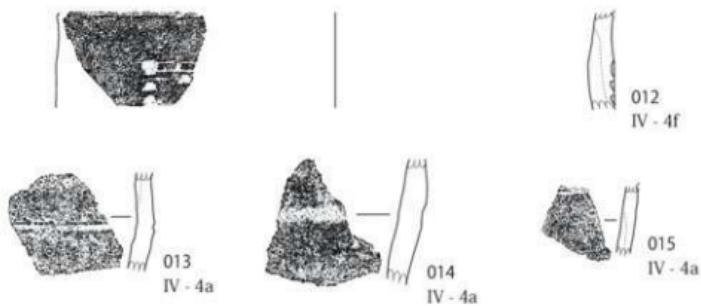
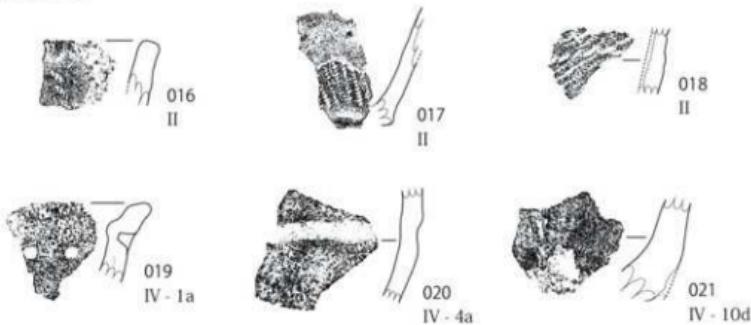


図 18 BO 区出土土器 (1) (S=1/2)

US 130 (2)



第2層群上位



US 135

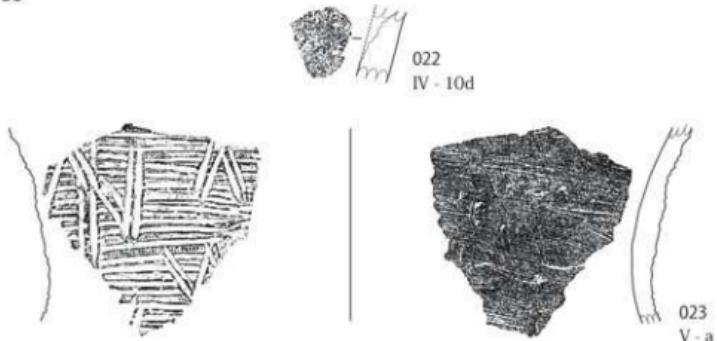
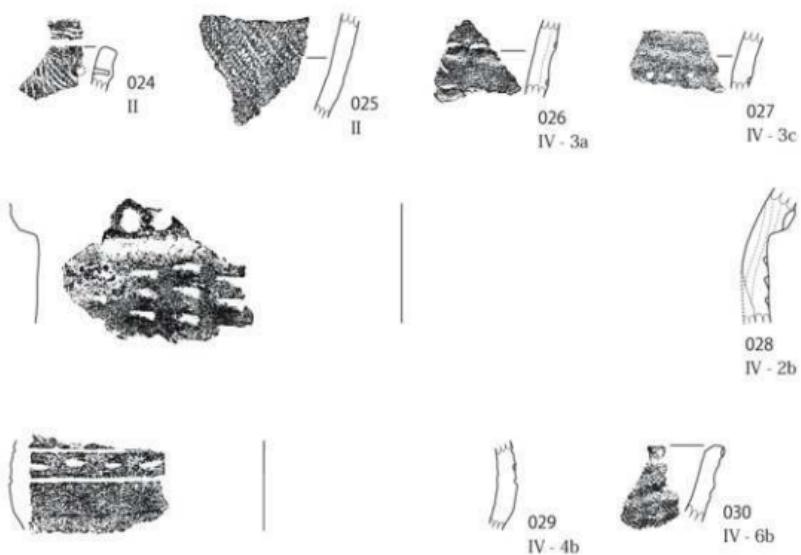


図 19 BO 区出土土器 (2) (S=1/2)

第2層群中位



第2層群下位 (1)

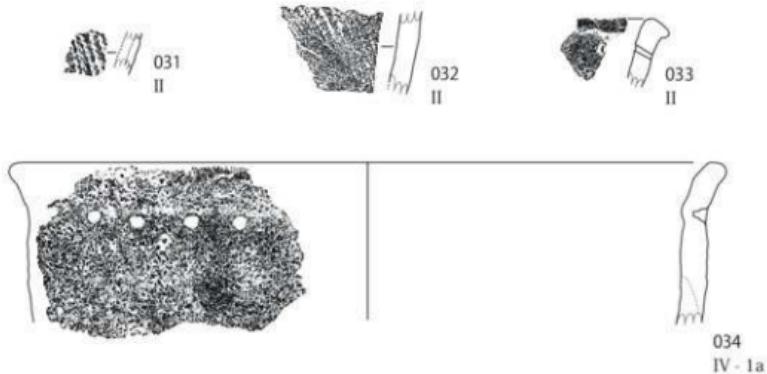
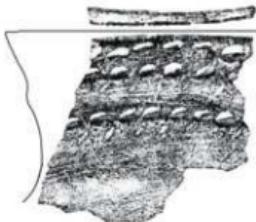


図20 BO区出土土器(3) (S=1/2)

第2層群下位（2）



035
IV - 1c



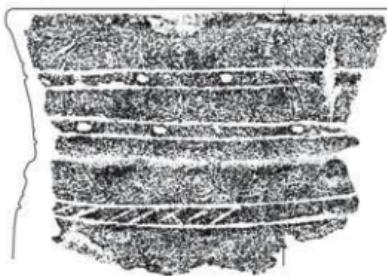
036
IV - 3b



037
IV - 4b



038
IV - 4b



039
IV - 4f

図21 BO区出土土器(4) (S=1/2)

第2層群下位（3）

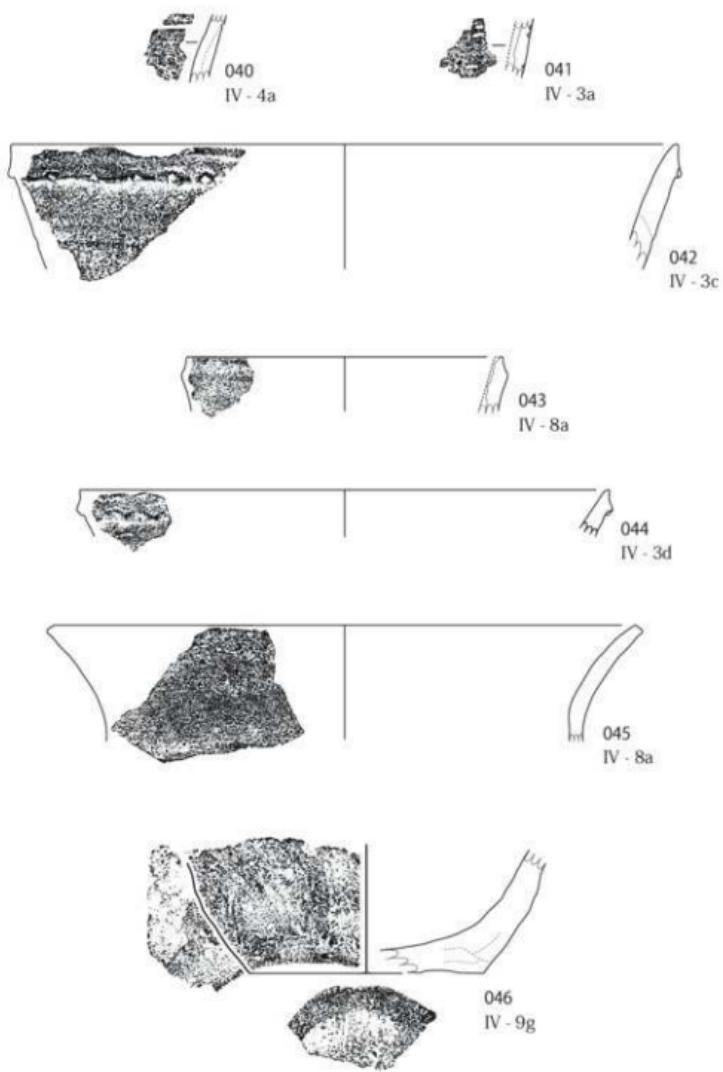


図22 BO区出土土器（5）(S=1/2)

第2層群下位 (4)

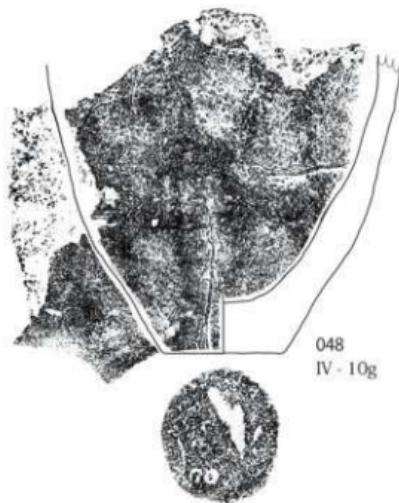


図23 BO区出土土器 (6) (S=1/2)

(3) B1 調査区全体 (図 24 ~ 45、表 13)

まず最初に「B1 調査区」という呼称について説明する。B 地点において B1 系列として設定された調査区は北から順に、B1a' 区 -B1a 区 -B1 区 -B1b 区ベルト -B1b 区であり、最終的に幅 1.5m、長さが南北合計 4.5m の一連のトレンチとなった。初期の設定と命名時に「B1 区」というアルファベットの枝号を付さない調査区を設定してしまった不手際から、この一連のトレンチを一連のものとして指し示す呼称を欠く事態を招いてしまった。以後、本報告においては、B1 系列のトレンチを指し示す場合に「B1 調査区」という名称を便宜的に用いることとする。

B1 調査区について長軸の土層断面を一連のものとして精査した結果、第 1 層群と第 3 層群については、B1a' 区から B1b 区まで一連の水平堆積層が数単位ずつ堆積していること、第 2 層群については、南の B1b 区側から北に向かって投棄を繰り返しながら前進する一連の傾斜堆積層群が形成されていることがそれぞれ判明した。従って、B1 調査区の第 2 層群においては、B1b 区（古）→B1a' 区（新）という一連の時系列が成立することになる。B1 調査区に関して、「II. 各調査区の状況」においては、調査時の掘削単位毎に分けて、それぞれの担当者が個別に状況を説明した。しかしながら、出土遺物を分析するにあたっては、一連の時系列に整列しうる資料を分割して提示することに意味はないので、一括して整列したものを提示し、かつ出土傾向の分析を行った。なお、B1b 区の第 2 層群からの出土遺物に関しては、B0 区の第 2 層群と同様の理由で、調査時に登録された出土層位に関しては、認識が不十分であった可能性を排除できないことから、第 2 層群出土遺物を上中下の三つのまとまりに整理し直す処理を行っている。第 2 層群上部は「B1b-2upp」とし、含まれる US は US137, 142, 143, 150, 160, 189, 199, 203、第 2 層群中部は「B1b-2mid」とし、含まれる US は US142, 143, 150, 157, 160, 199、第 2 層群下部は「B1b-2low」とし、含まれる US は US143, 157, 160, 199, 202 である。

以上の条件をふまえて B1 調査区の土器出土傾向を見てみると、図 24 からも分かるように、オホーツク式が主体を占めることは間違いない。特に第 3 層群の一層目にあたる US119 からは、まとまった数量のオホーツク式土器が出土している。それ以外の類別に関しては、続縄文土器が第 1 層群 (US101)、第 2 層群の上位 (US159, 173)、第 2 層群の中位 (US117) から、鉢谷式が第 1 層群 (US101)、第 3 層群 (US119) から、元地式が第 2 層群上位 (US159, 173)、第 2 層群中位 (US116, 117)、第 3 層群 (US169) から、擦文土器が第 1 層群 (US102)、第 2 層群上位 (US111, 159, 173)、第 2 層群下位 (B1b-2mid)、第 3 層群 (US119) からそれぞれ出土している。出土点数の統計で見ると、第 2 層群の上部と第 3 層群の上部に数量的なまとまりが認められる。

(岩城)

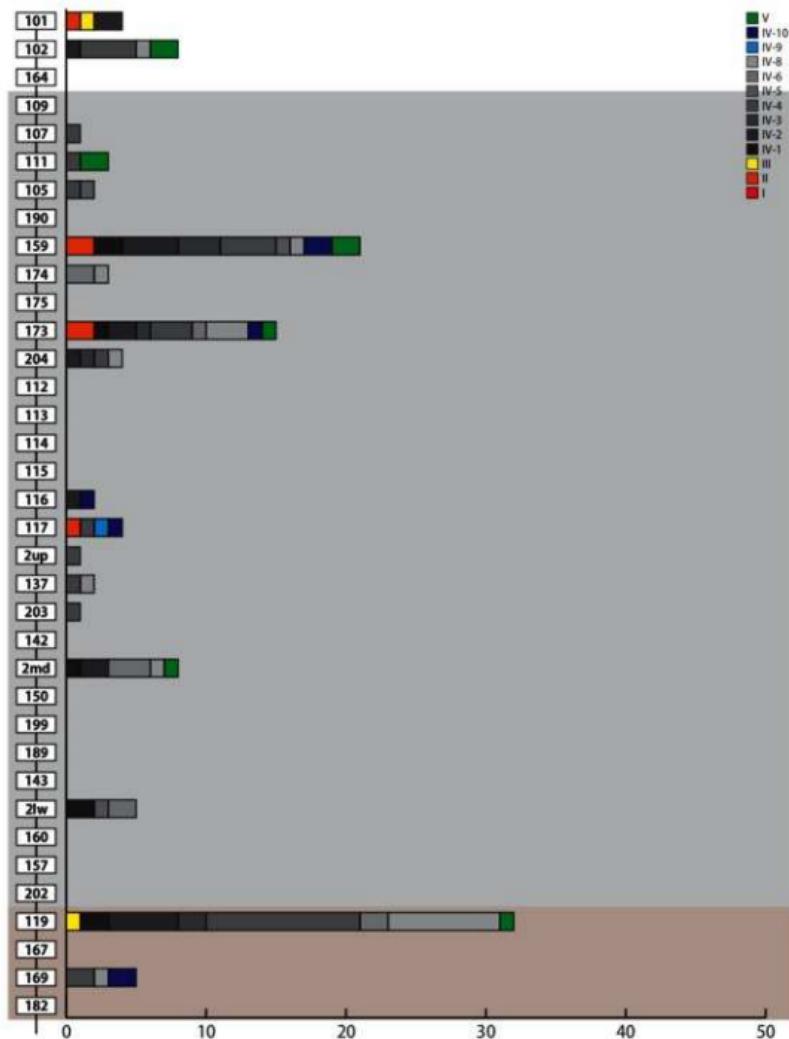


図24 B1調査区全体堆積各層の土器出土傾向（不明土器片は除く）

US 101 (B1a')



US 101 (B1b)



US 102 (B1a')



US 102 (B1a' ベルト)



US 102 (B1b)

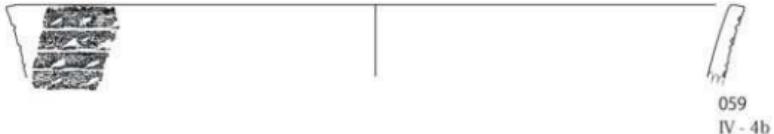
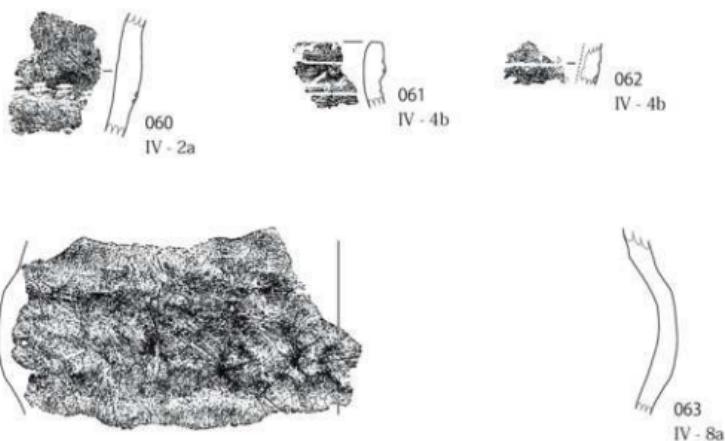
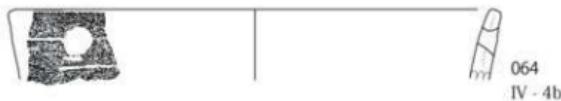


図 25 B1 調査区出土土器 (1) (S=1/2)

US 102 (B1b)



US 105 (B1a)



US 105 (B1)

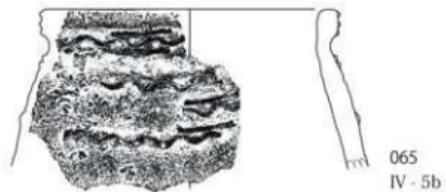
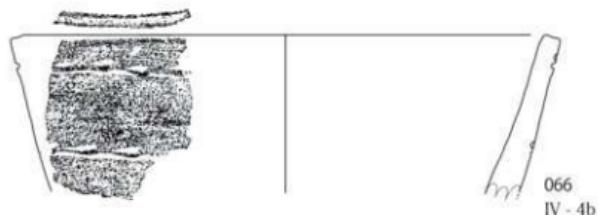


図26 B1 調査区出土土器 (2) (S=1/2)

US 107 (B1b ベルト)



066
IV - 4b

US 111 (B1a)



067
IV - 4a

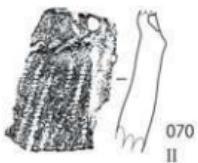


068
V - a



069
V - a

US 159 (B1a') (1)



070
II



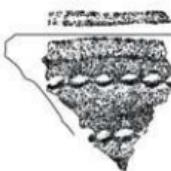
071
II

図 27 B1 調査区出土土器 (3) (S=1/2)

US 159 (B1a') (2)



072
IV - 1c



073
IV - 3a

074
IV - 3a

075
V - d



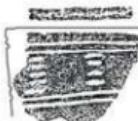
076
V - d



077
IV - 2d



078
IV - 4a



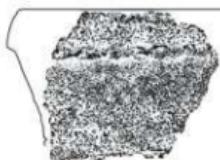
079
IV - 4b

図28 B1 調査区出土土器 (4) (S=1/2)

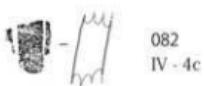
US 159 (B1a') (3)



080
IV - 4a



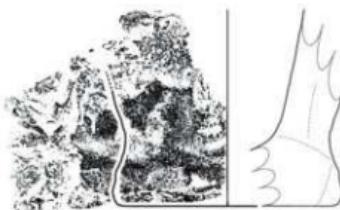
081
IV - 3d



082
IV - 4c



083
IV - 10d



084
IV - 10g



図 29 B1 調査区出土土器 (5) (S=1/2)

US 159 (B1a') (4)



US 159 (B1a' ベルト)

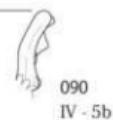
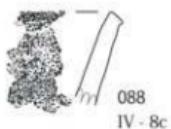
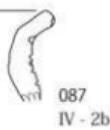
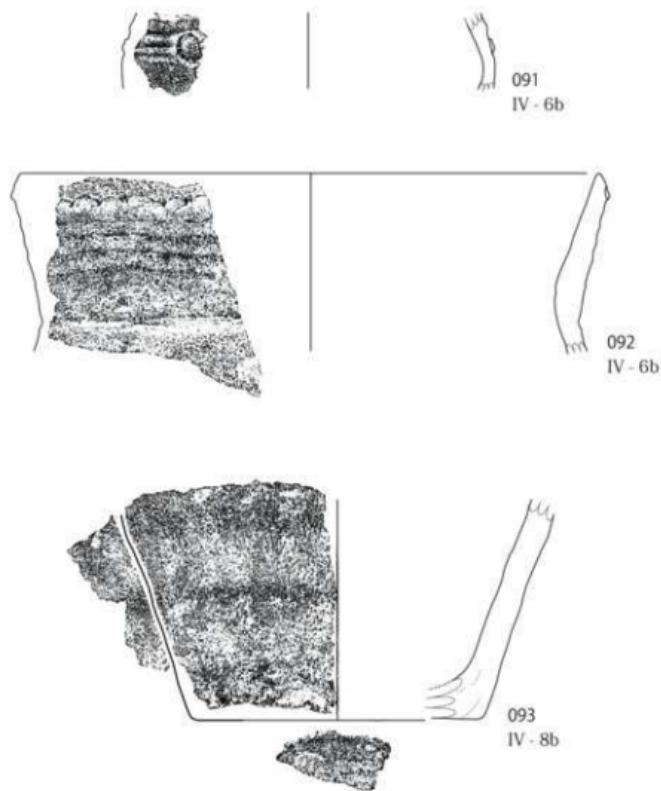


図 30 B1 調査区出土土器 (6) (S=1/2、但し 090 のみ S=1/3)

US 174 (B1a)



US 173 (B1a') (1)



図31 B1 調査区出土土器 (7) (S=1/2)

US 173 (B1a') (2)

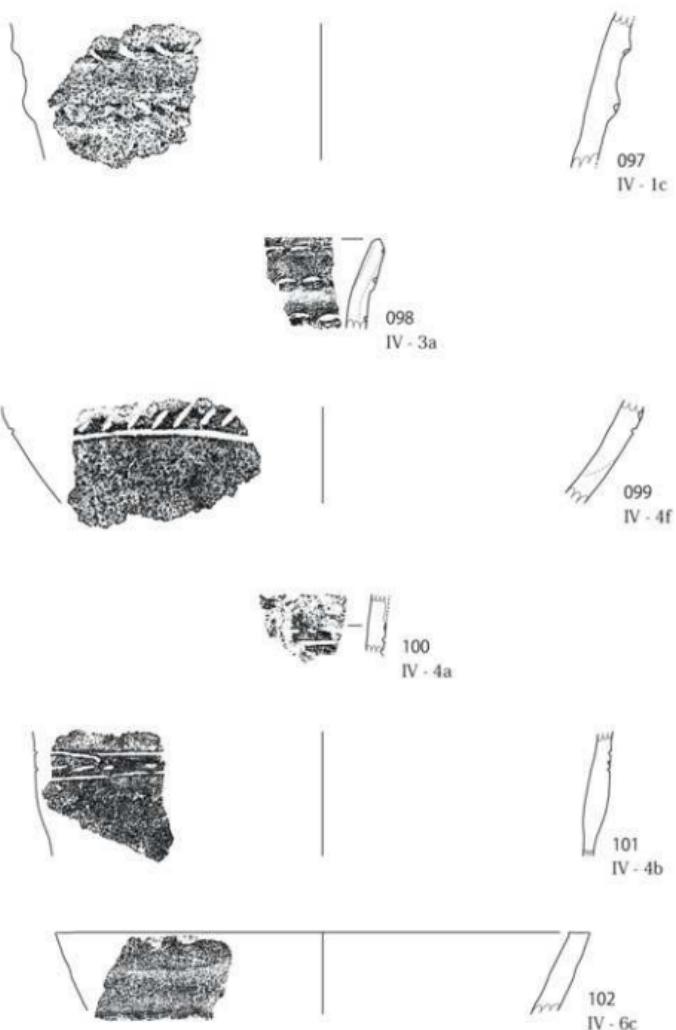
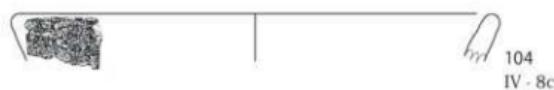


図32 B1 調査区出土土器 (8) (S=1/2)

US 173 (B1a') (3)



US 173 (B1a) (1)

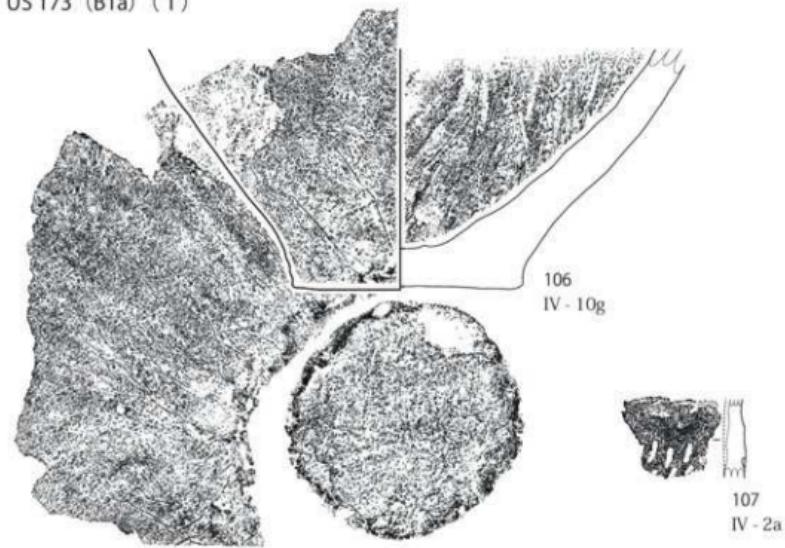
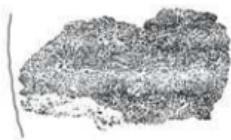


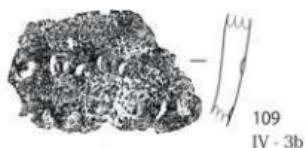
図33 B1 調査区出土土器 (9) (S=1/2)

US 173 (B1a) (2)

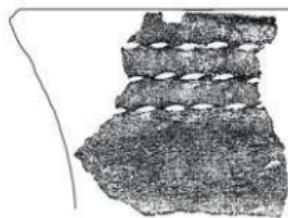


108
IV - 8a

US 204 (B1a)



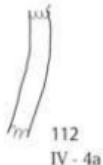
109
IV - 3b



110
IV - 2a



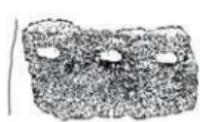
111
IV - 8c



112
IV - 4a

図 34 B1 調査区出土土器 (10) (S=1/2)

US 116 (B1b ベルト)

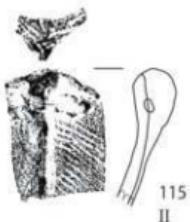


113
IV - 2a

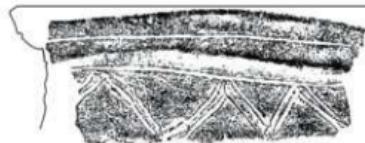


114
IV - 10d

US 117 (B1b ベルト) (1)



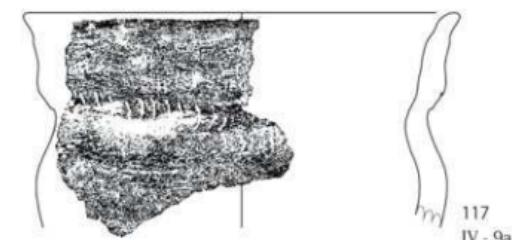
115
II



116
IV - 4g

図35 B1 調査区出土土器 (11) (S=1/2)

US 117 (B1b ベルト) (2)



117
IV - 9a



118
IV - 10d

US 137 (B1b ベルト)

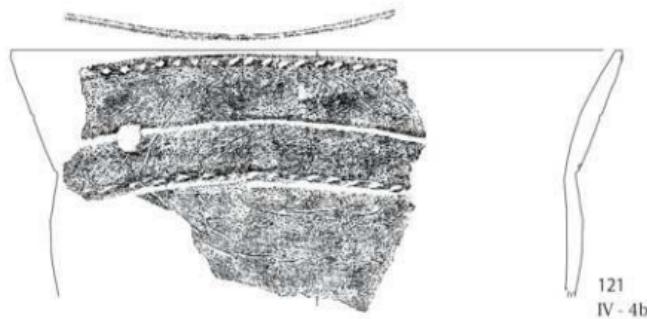


119
IV - 4b



120
IV - 8c

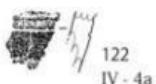
US 203 (B1b)



121
IV - 4b

図 36 B1 調査区出土土器 (12) (S=1/2、但し 121 のみ S=1/3)

第2層群上位 (B1b)



第2層群中位 (B1b) (1)

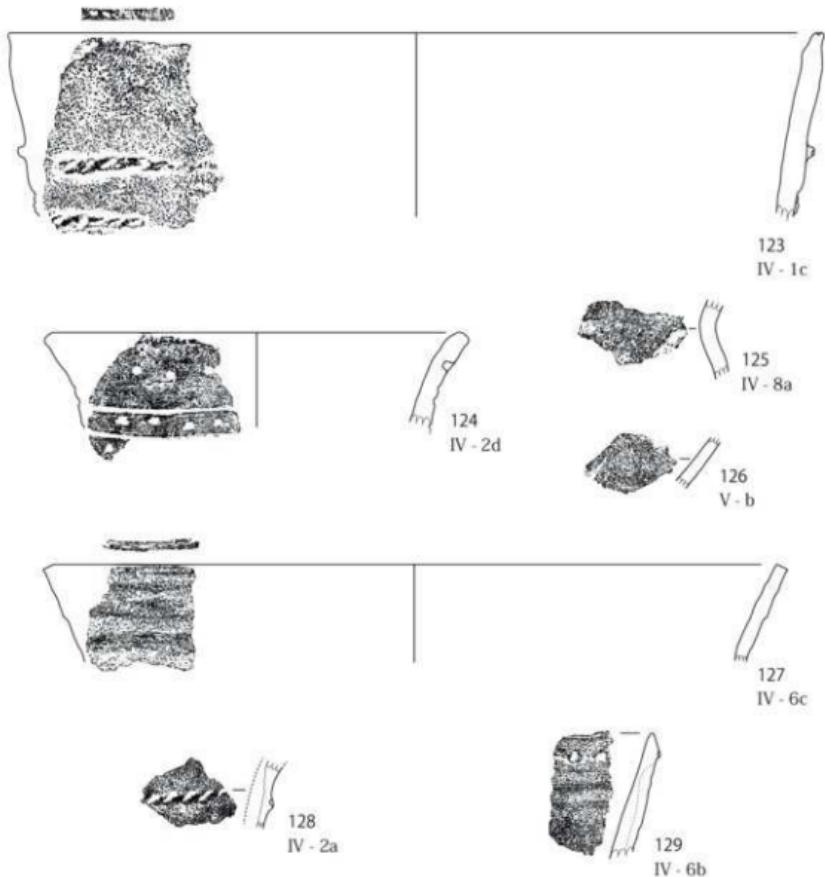
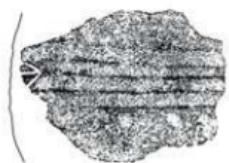


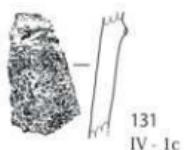
図37 B1 調査区出土土器 (13) (S=1/2)

第2層群中位 (B1b) (2)



130
IV - 6b

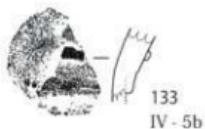
第2層群下位 (B1b)



131
IV - 1c



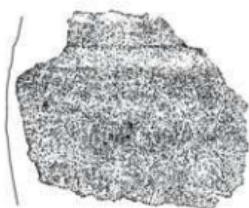
132
IV - 1a



133
IV - 5b



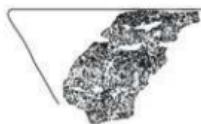
134
IV - 6b



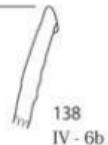
135
IV - 6c

図 38 B1 調査区出土土器 (14) (S=1/2)

US119 (B1a')



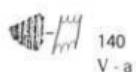
137
IV - 4b



138
IV - 6b

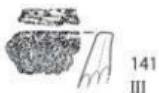


139
IV - 8c



140
V - a

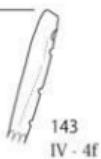
US119 (B1a) (1)



141
III



142
IV - 2d



143
IV - 4f

図39 B1 調査区出土土器 (15) (S=1/2)

US119 (B1a) (2)

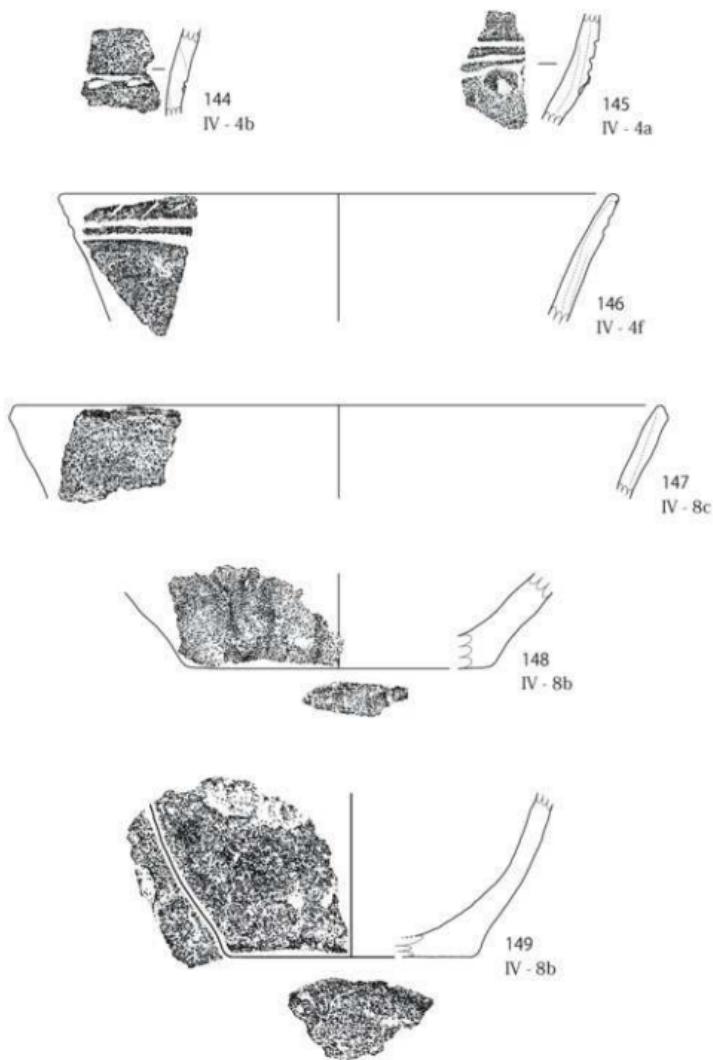


図 40 B1 調査区出土土器 (16) (S=1/2)

US119 (B1)

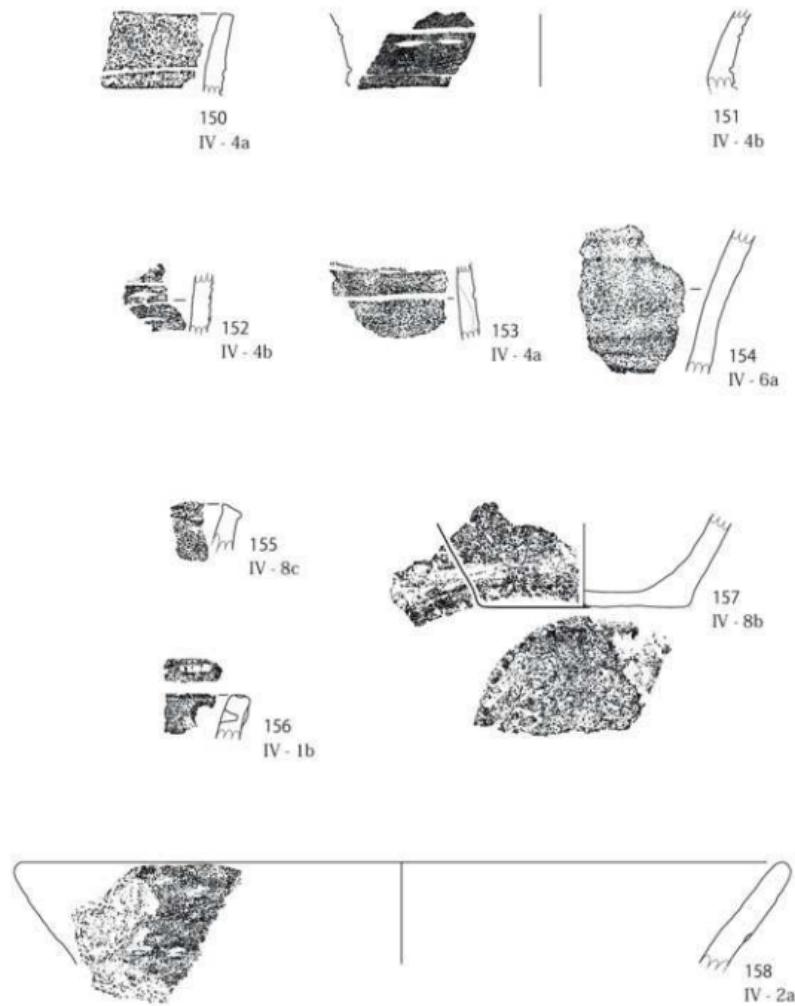


図41 B1 調査区出土土器 (17) (S=1/2)

US119 (B1b ベルト) (1)

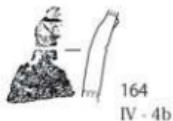
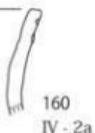
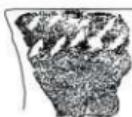
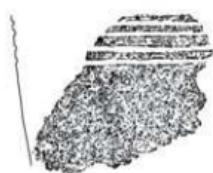
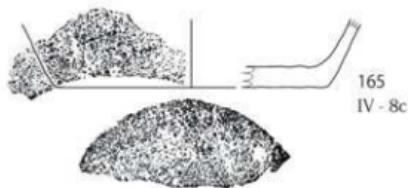
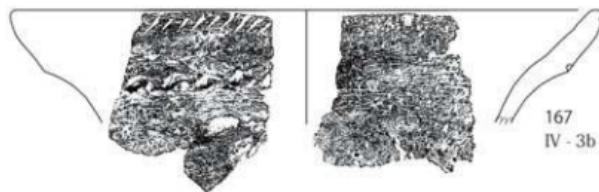


図42 B1 調査区出土土器 (18) (S=1/2、但し 161 のみ S=1/3)

US119 (B1b ベルト) (2)



US119 (B1b)



US169 (B1b) (1)

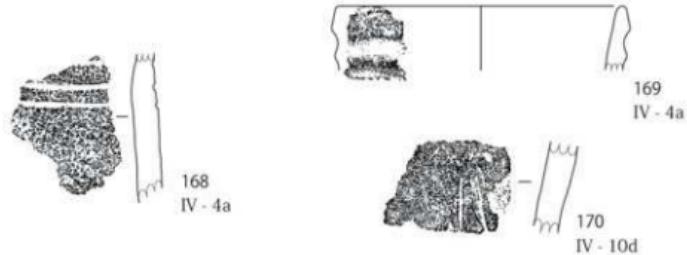
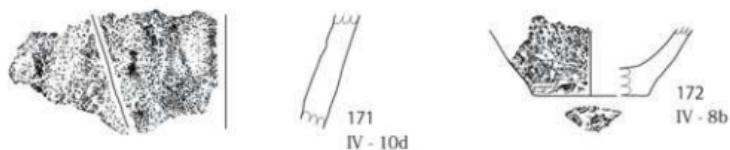


図43 B1 調査区出土土器 (19) (S=1/2)

US169 (B1b) (2)



US0 (B1a)



US0 (B1) (1)

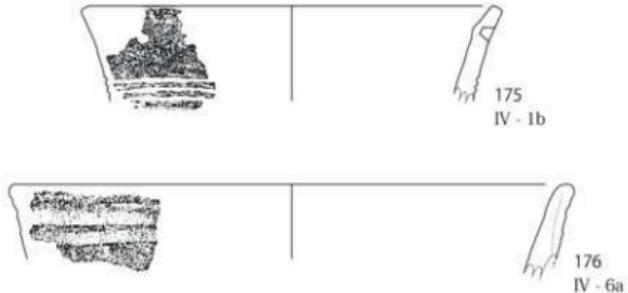
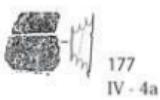


図 44 B1 調査区出土土器 (20) (S=1/2)

USO (B1) (2)



USO (B1b ベルト)



図45 B1 調査区出土土器 (21) (S=1/2)

(4) B3 区(図 46~47、表 14、写真 2)

B3 区は、第 1 次調査において第 2 層群に属する堆積層を完掘しており、今回調査においては第 3 層群に属する US131・138・139 の 3 層を掘削調査した。出土土器資料は、第 3 層群内の最上層にあたる US131 からのものに限られているうえ、出土点数も少ないので、ここで出土傾向に関する分析を行うことは難しい。出土事実としては、オホーツク式土器と元地式土器がそれぞれ少量出土している。
(岩城)

表 14 B3 区各層の土器分類別出土点数

US	土器分類別点数												不明	
	I	II	III	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	IV-5	IV-6	IV-8	IV-9	IV-10		
131							1			2	1	1	17	22
138														9
139														0

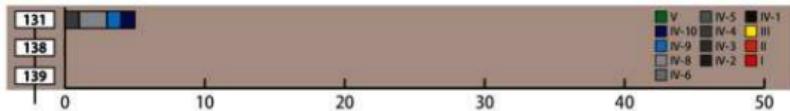
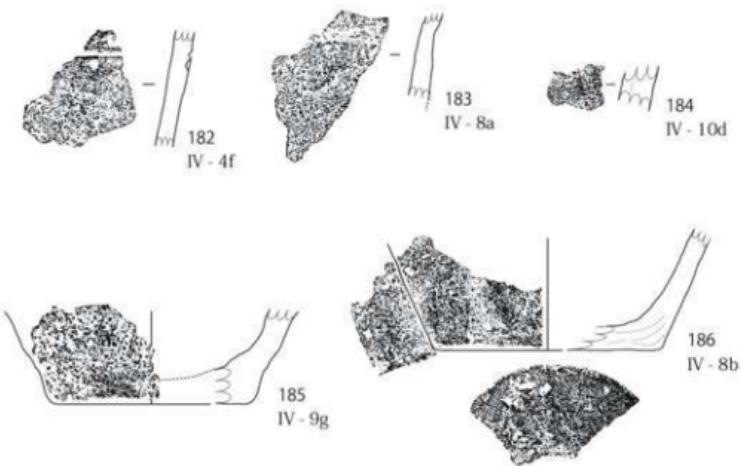


図 46 B3 区堆積各層の土器出土傾向（不明土器片は除く）



写真 2 B3 区出土土器

US131



USO

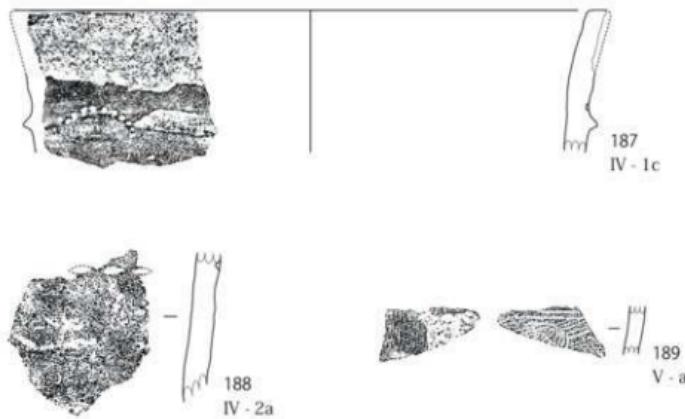


図47 B3区出土土器 (S=1/2)

(5) B7 区(図 48 ~ 73、表 15)

B7 区は現時点での第 2 層群の堆積が最も厚く、従って第 2 層群からの土器出土点数も多い。第 1 層群では主体となるオホーツク式土器の他に、ややまとまった数量の擦文土器と少量の続縄文土器が、第 2 層群では主体となるオホーツク式土器の他に、ややまとまった数量の元地式土器と擦文土器、他に続縄文土器と縄文土器が 1 点ずつ、それぞれ出土している。第 3 層群からは同定できる土器が 2 点のみ、オホーツク式土器と擦文土器が 1 点ずつ出土している。

(岩城)

表 15 B7 区各層の土器分類別出土点数

US	土器分類別出土点数													総点数
	I	II	III	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	IV-5	IV-6	IV-8	IV-9	IV-10	V	
101		1		2	3		4		1				4	85 100
129				1	5	2	8		1	4	1		3	65 90
149				1	1	1	4		3			2		29 41
147														0
145														0
162		1		1		1	3		1	3	1			19 30
163				1	-8	4	7		6	10	3	1	3	114 157
178										2	1		5	8
168														1 1
170								1						2 3
179								1			1	1		1 4
171	1				2		3			3	4	8		57 78
183													10	10
184						1							1	3 5

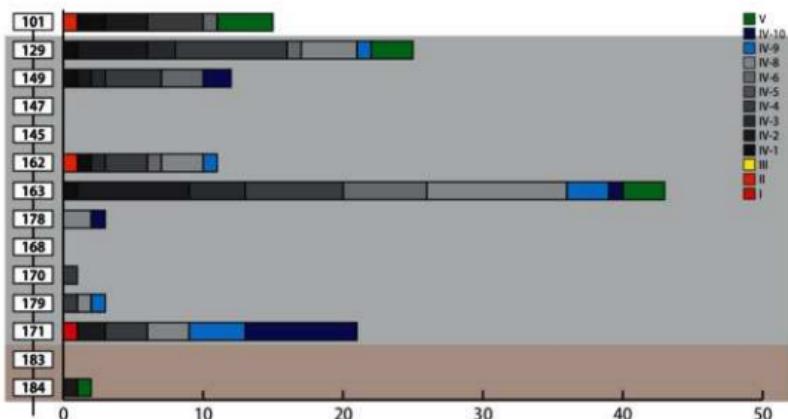


図 48 B7 区堆積各層の土器出土傾向 (不明土器片は除く)

US101 (1)

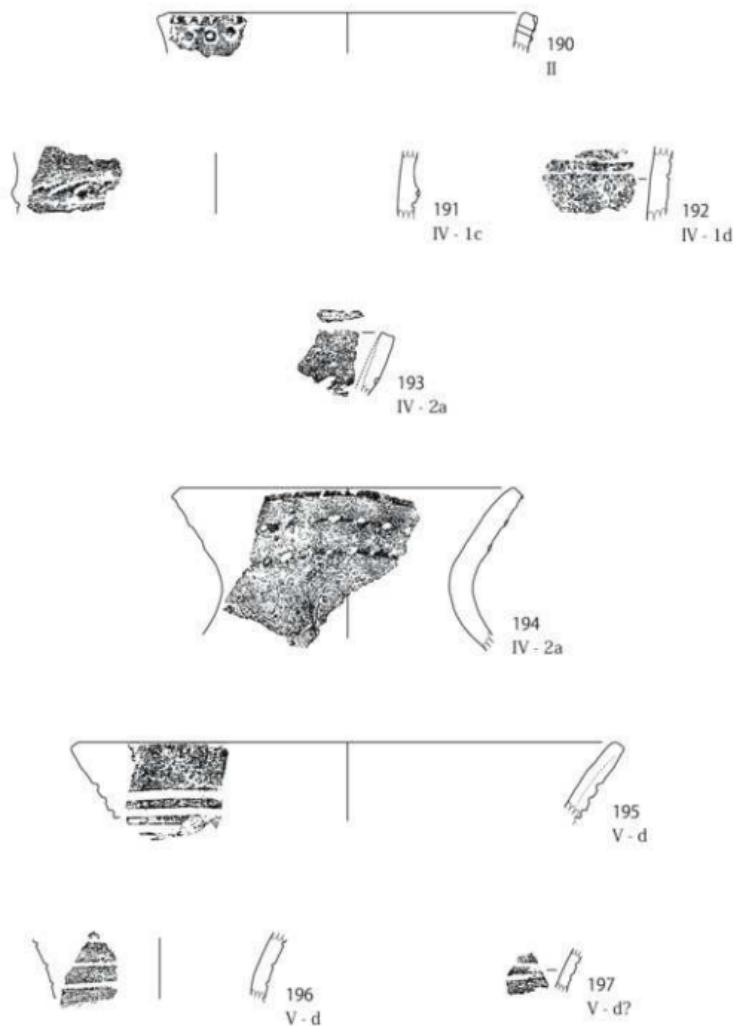


図49 B7区出土土器(1) (S=1/2)

US101 (2)



198
IV - 4f



199
IV - 4a



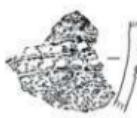
200
IV - 2a



201
IV - 4b



202
IV - 6b



203
IV - 4b



204
V - b

図 50 B7 区出土土器 (2) (S=1/2)

US129 (1)

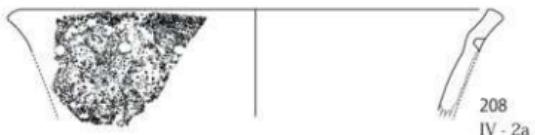
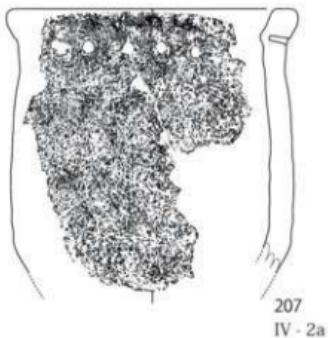
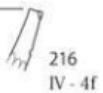
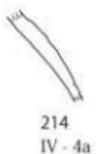


図 51 B7 区出土土器 (3) (S=1/2、但し 211 のみ S=1/3)

US129 (2)



217
IV - 3c



218
IV - 4b



219
IV - 4a

図 52 B7 区出土土器 (4) (S=1/2)

US129 (3)

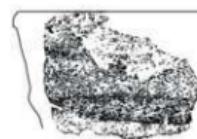
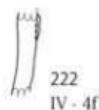


図 53 B7 区出土土器 (5) (S=1/2)

US129 (4)

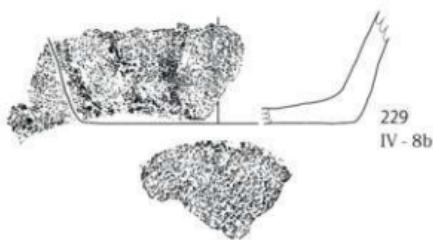
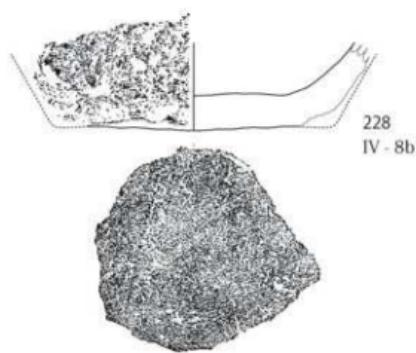


図 54 B7 区出土土器 (6) (S=1/2)

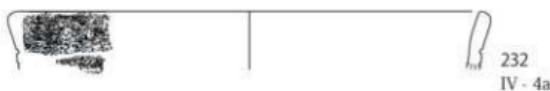
US149 (1)



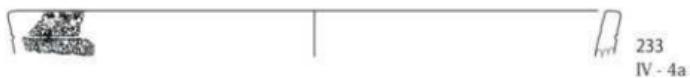
230
IV - 1a



231
IV - 3a



232
IV - 4a



233
IV - 4a



234
IV - 4b



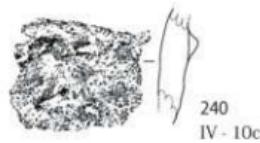
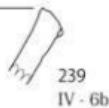
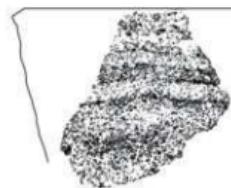
235
IV - 2a



236
IV - 4b

図 55 B7 区出土土器 (7) (S=1/2、但し 231 のみは S=1/3)

US149 (2)



240
IV-10c

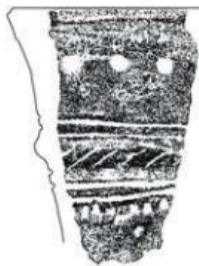


図 56 B7 区出土土器 (8) (S=1/2)

US162 (1)



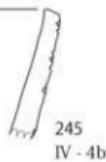
242
II



243
IV - 1b



244
IV - 3b



245
IV - 4b

図 57 B7 区出土土器 (9) (S=1/2)

US162 (2)



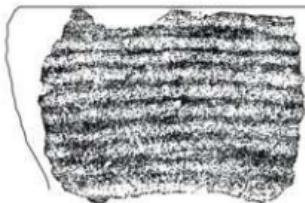
246
IV - 4b



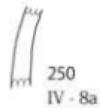
247
IV - 4b



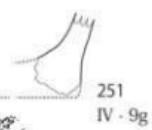
248
IV - 8c



249
IV - 6a



250
IV - 8a



251
IV - 9g



252
IV - 8b

図 58 B7 区出土土器 (10) (S=1/2)

US163 (1)

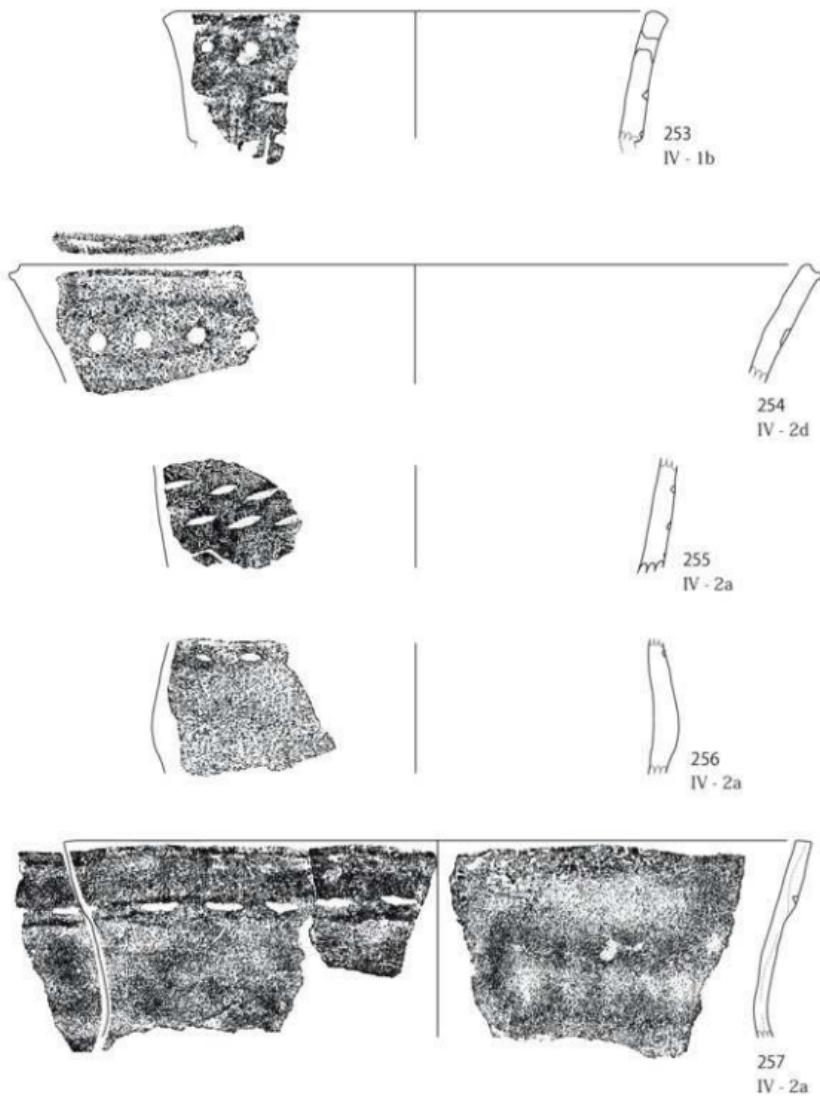


図 59 B7 区出土土器 (11) (S=1/2)

US163 (2)

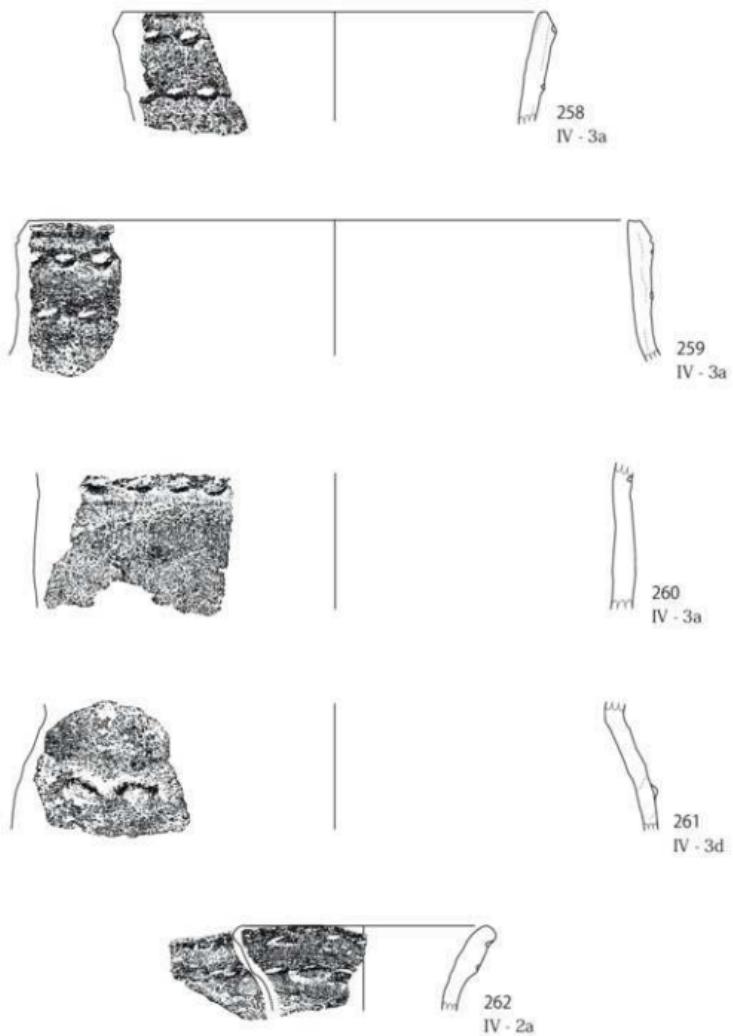
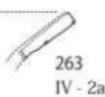
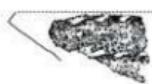


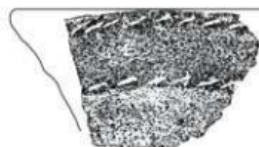
図 60 B7 区出土土器 (12) ($S=1/2$)

US163 (3)



263

IV - 2a



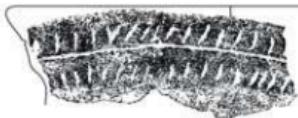
264

IV - 2a



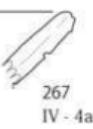
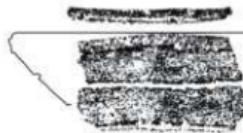
265

V - d



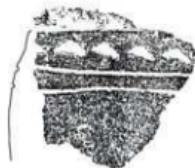
266

IV - 4f



267

IV - 4a



268

IV - 4f

図 61 B7 区出土土器 (13) (S=1/2)

US163 (4)

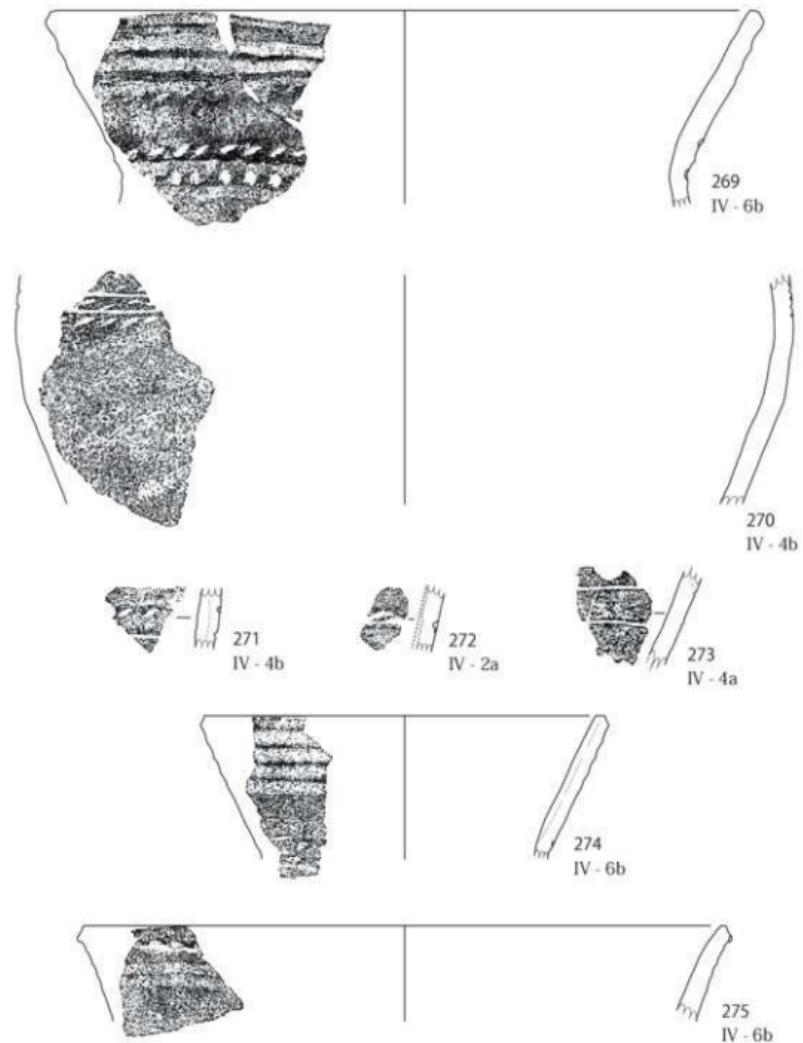


図62 B7区出土土器 (14) (S=1/2)

US163 (5)



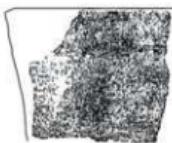
276
IV - 6b



277
IV - 4i



278
IV - 6a



279
IV - 8c



280
IV - 6a

図 63 B7 区出土土器 (15) (S=1/2)

US163 (6)



281
IV - 8c



282
IV - 8c



283
IV - 8c



284
IV - 8c



285
IV - 10d

図 64 B7 区出土土器 (16) (S=1/2)

US163 (7)

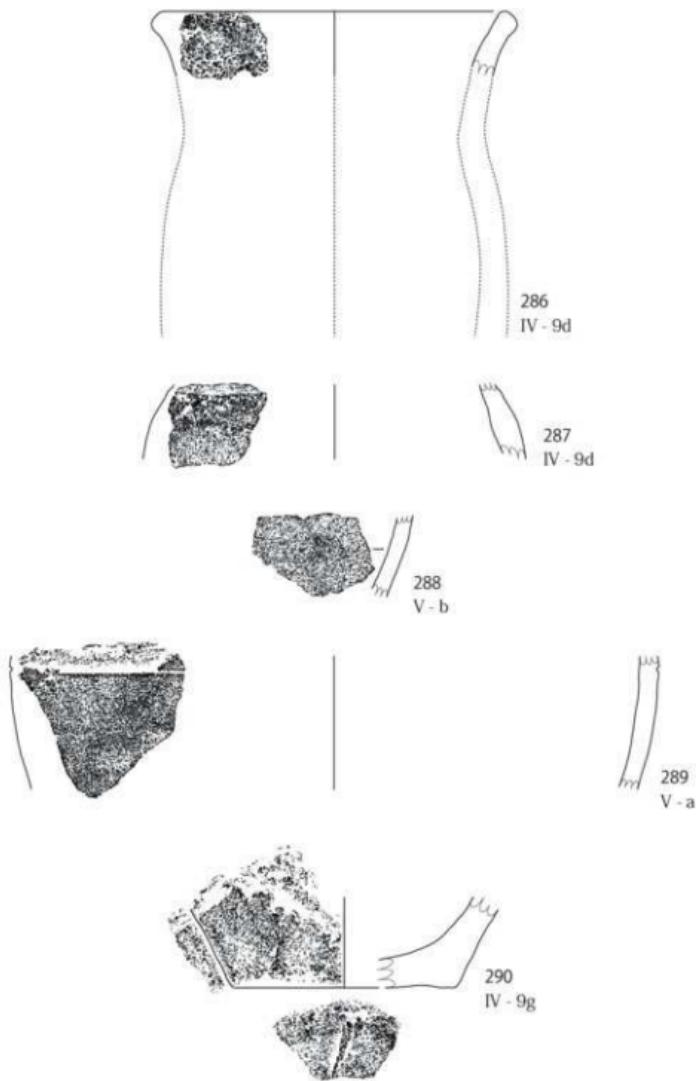
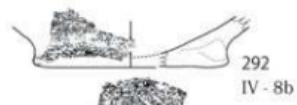


図 65 B7 区出土土器 (17) (S=1/2)

US163 (8)



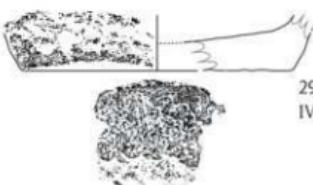
291
IV - 8b



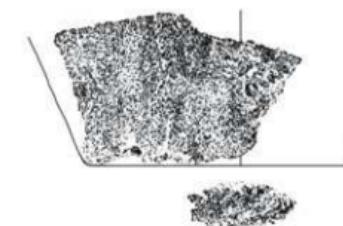
292
IV - 8b



293
IV - 8b



294
IV - 8b



295
IV - 8b

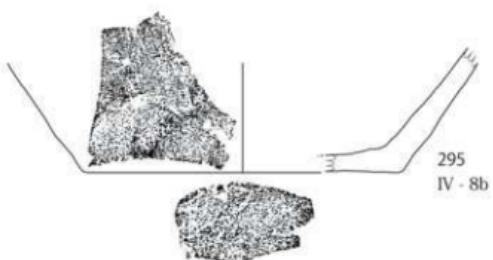


図 66 B7 区出土土器 (18) ($S=1/2$)

US178

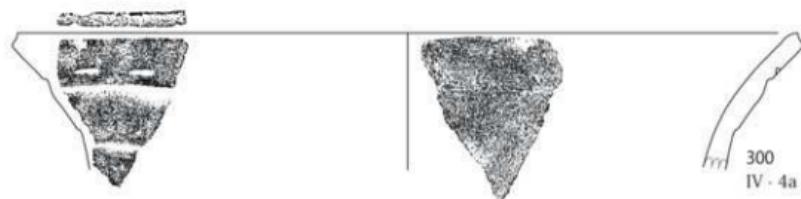


US170, 171



図 67 B7 区出土土器 (19) (S=1/2)

US179



US171 (1)

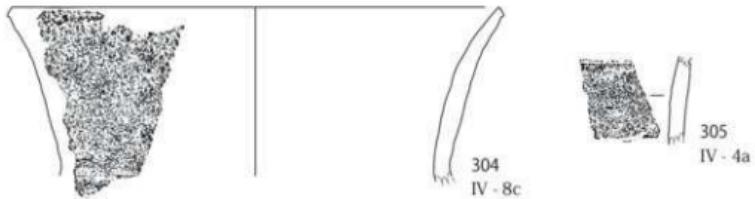
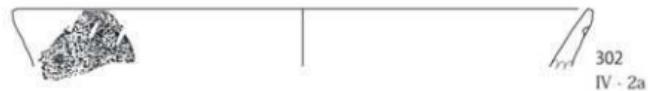


図 68 B7 区出土土器 (20) (S=1/2)

US171 (2)

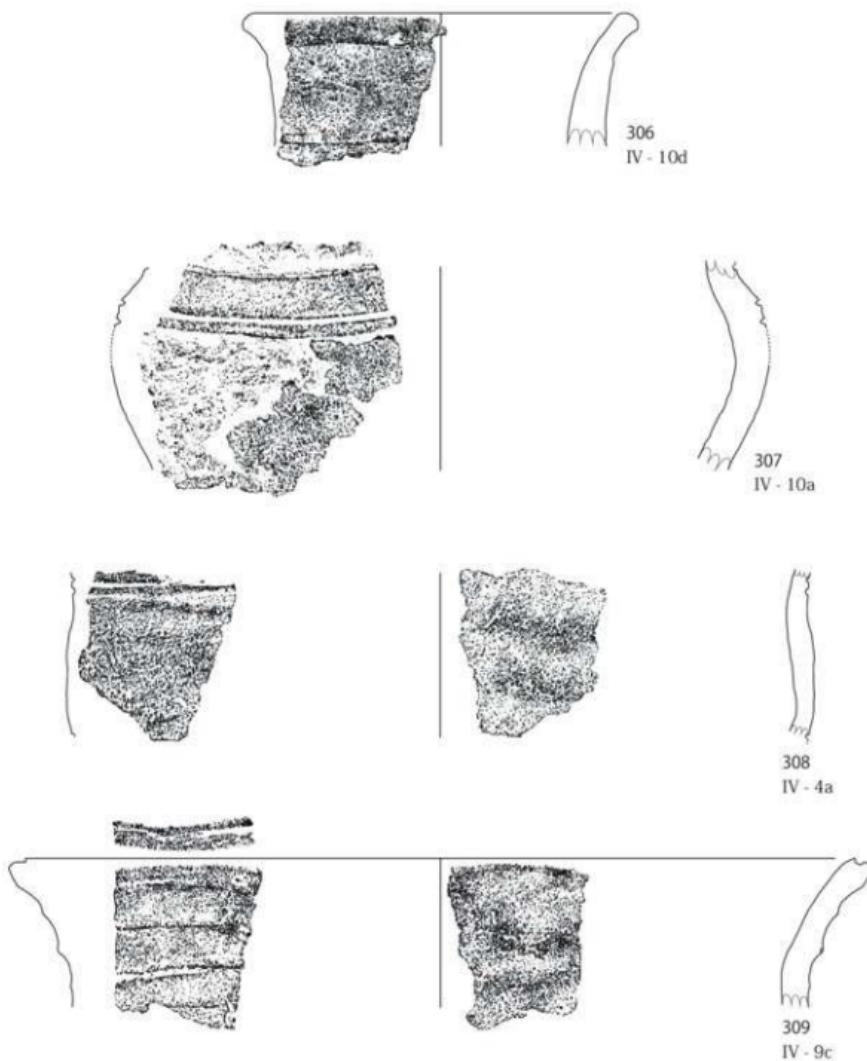
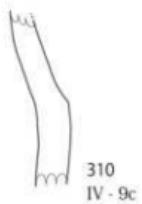
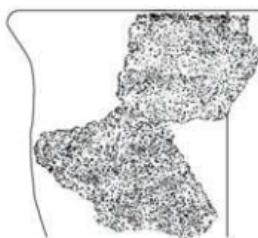


図 69 B7 区出土土器 (21) (S=1/2)

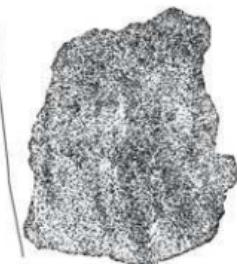
US171 (3)



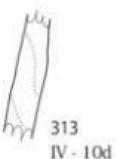
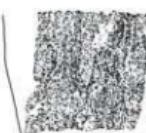
310
IV - 9c



311
IV - 9d



312
IV - 10d



313
IV - 10d



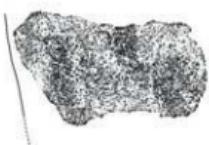
314
IV - 9d

図 70 B7 区出土土器 (22) (S=1/2)

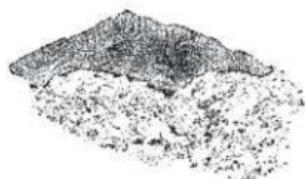
US171 (4)



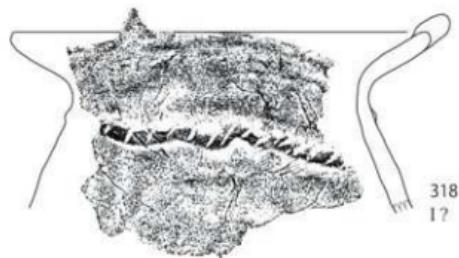
315
IV - 10d



316
IV - 10d



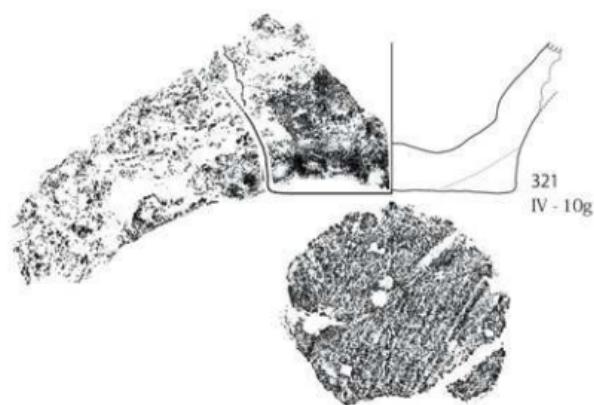
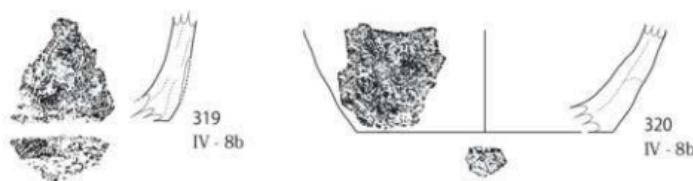
317
IV - 10d



318
1?

図 71 B7 区出土土器 (23) (S=1/2)

US171 (5)



US184

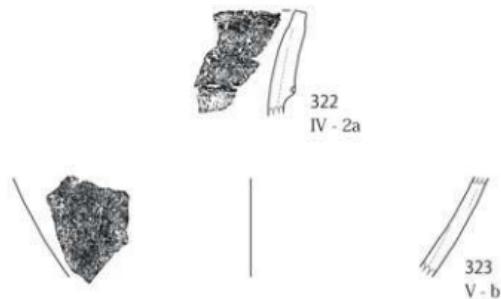


図 72 B7 区出土土器 (24) (S=1/2)

USO

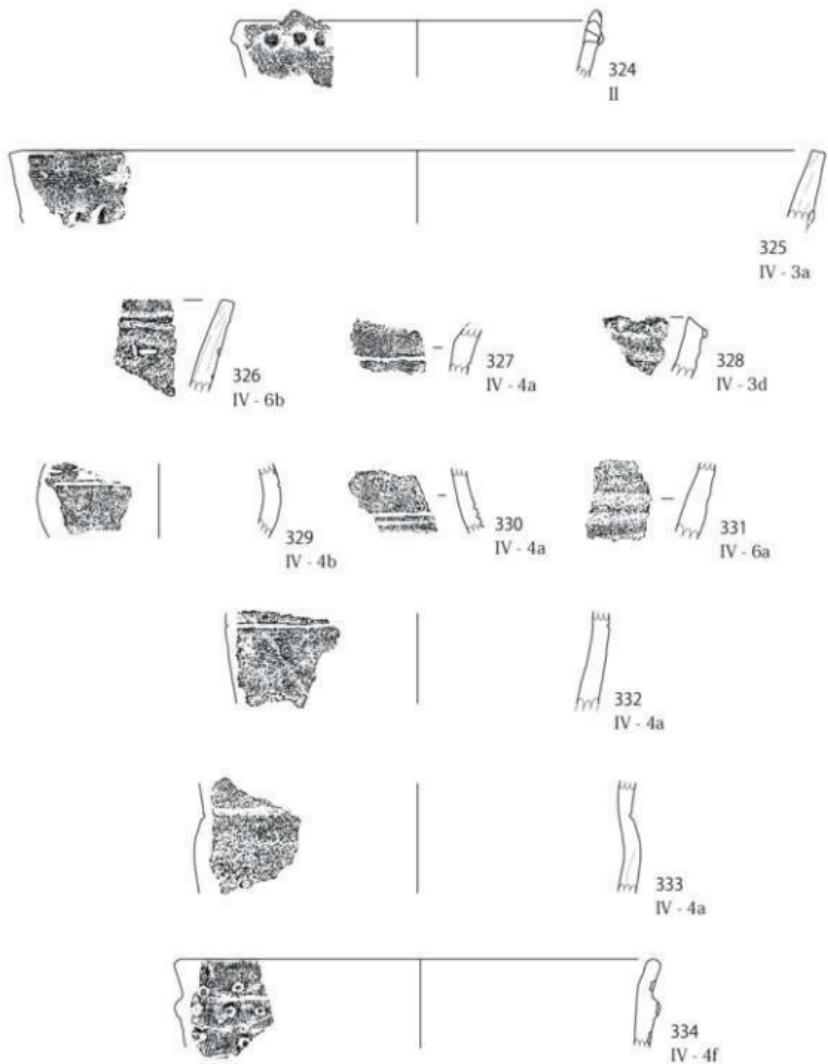


図 73 B7 区出土土器 (25) (S=1/2)

(6) E1 区(図 74 ~ 84、表 15)

E1 区の出土土器に関しては、調査面積(2.0 × 2.0m)の広さに比べて出土点数が少ないといえる。さらに、少ない出土点数のうち大部分を占めるのが近現代の擾乱を受けていると考えられる第 1 層群出土の土器資料であることから、層位学的な分析をすることは難しい。第 1 層群からは、主体となるオホーツク式土器の他に、縄文土器、鈴谷式土器、擦文土器がそれぞれ少量出土している。第 2 層群からは、オホーツク式土器のみが少量、第 3 層群からはオホーツク式土器と縄文土器が少量ずつ、それぞれ出土している。E1 区の特徴としては、鈴谷式の出土比率が他地点に比べるとわずかに高いということがあげられる。ただし、鈴谷式の出土はいずれも第 1 層群からのものであるので、現状ではこの区本来の様相を反映したものであるかどうかの判断は難しいと言わざるを得ない。E 地点周辺の土器出土傾向に関する資料・情報の蓄積を待って、改めて検討する必要がある。

(岩城)

表 16 E1 区各層の土器分類別出土点数

US	土器分類別点数												総点数		
	I	II	III	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	IV-5	IV-6	IV-8	IV-9	IV-10	V		
601			1					2		1	3			33	40
602		4	2	3	3	3	9			4	3		4	140	175
603							1			1				19	21
604	2				1	1	1						10	15	
605														0	

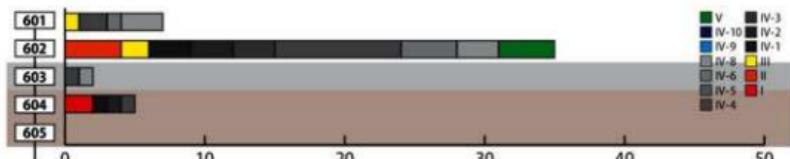


図 74 E1 区堆積各層の土器出土傾向(不明土器片は除く)

US601

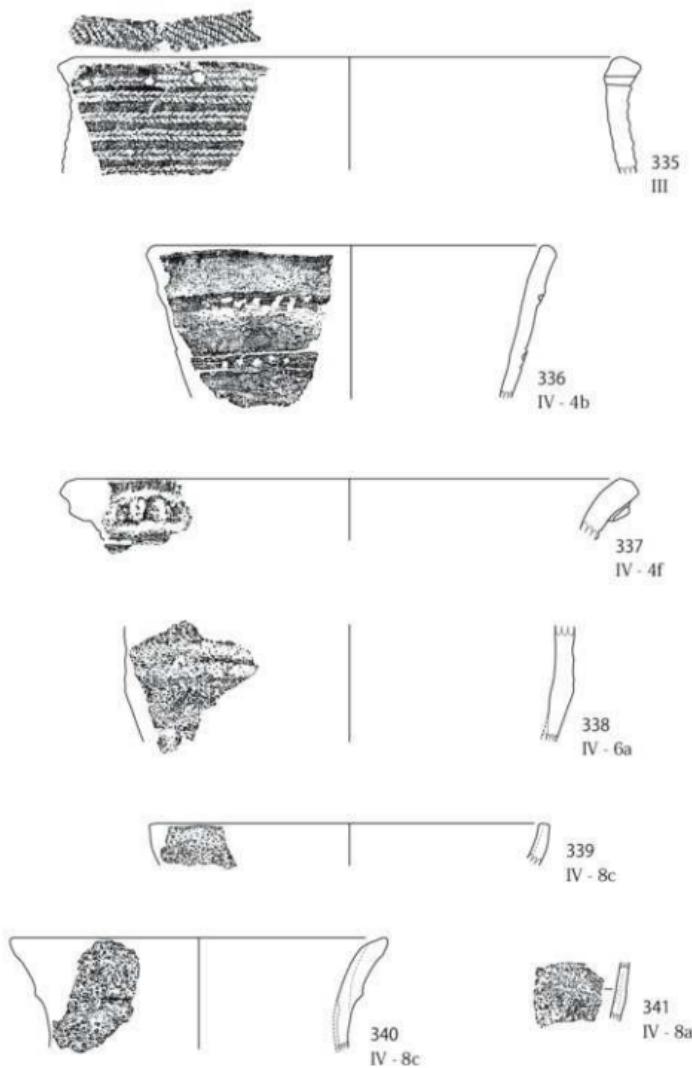


図 75 E1 区出土土器 (1) (S=1/2)

US602 (1)

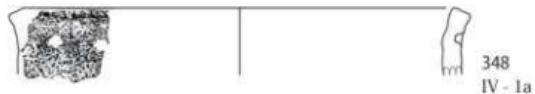


図 76 E1 区出土土器 (2) (S=1/2)

US602 (2)

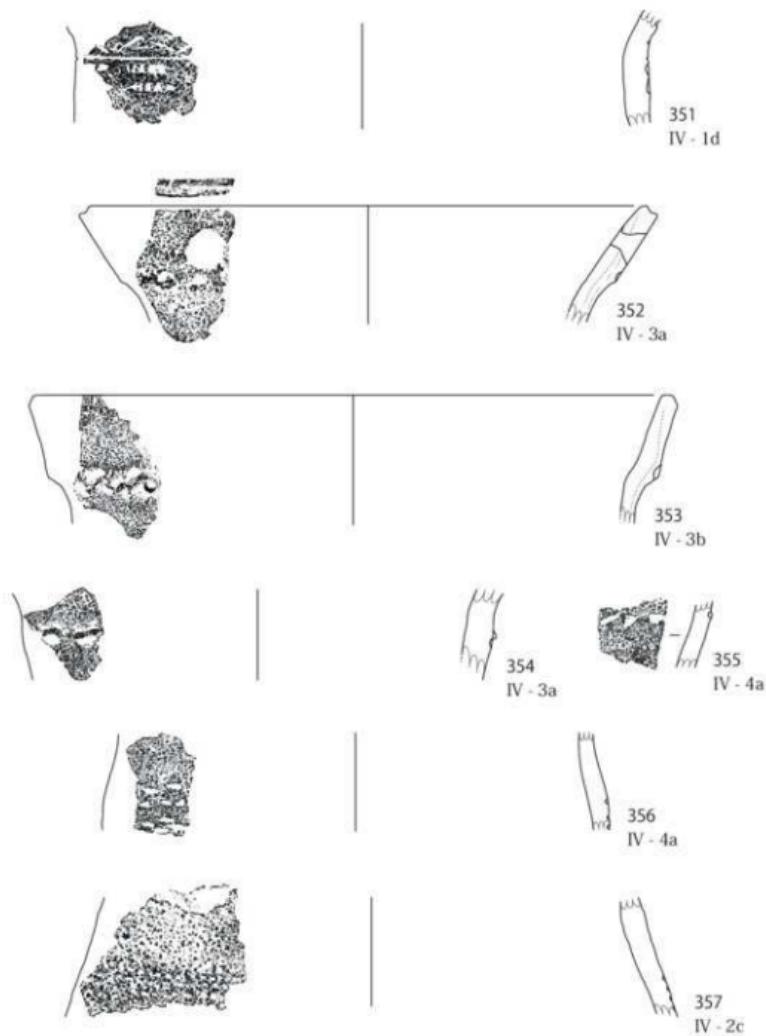


図 77 E1区出土土器 (3) (S=1/2)

US602 (3)

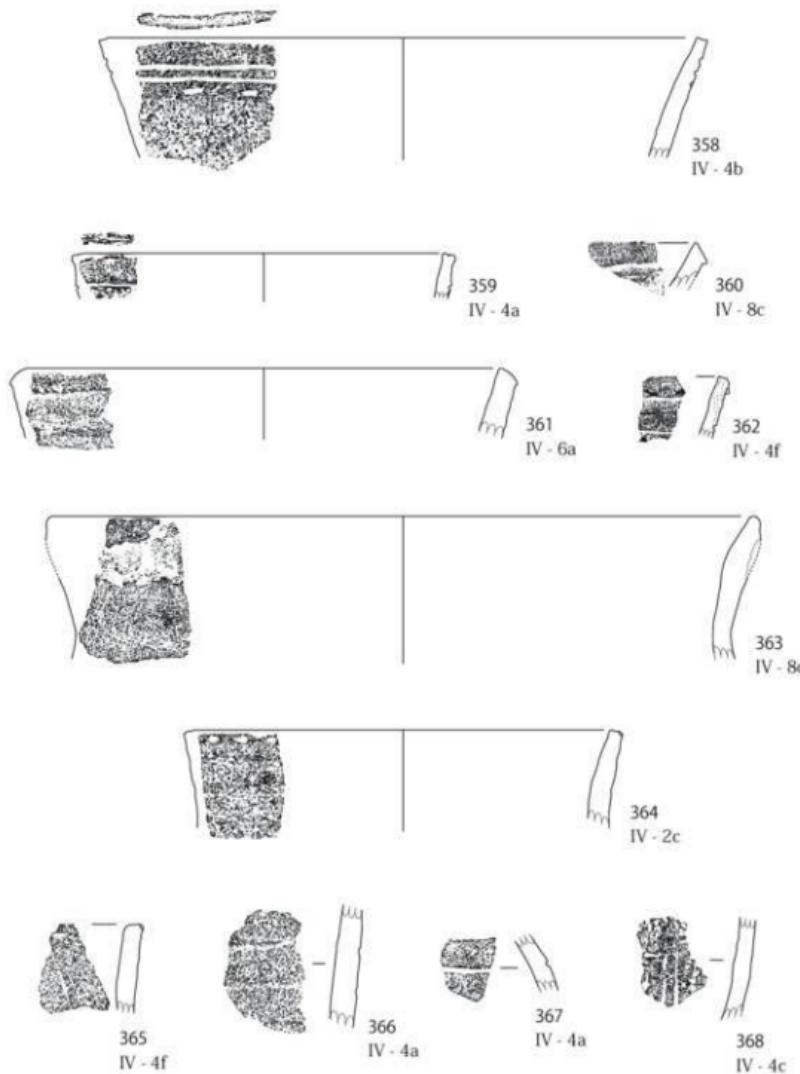
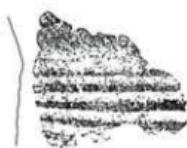


図 78 E1 区出土土器 (4) (S=1/2)

US602 (4)



369
IV - 6a



370
IV - 6a



371
IV - 6b



372
V - d

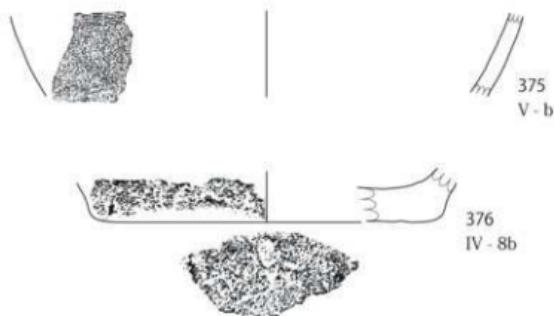
373
V - a



374
V - a

図 79 E1 区出土土器 (5) (S=1/2)

US602 (5)



US603



US604 (1)

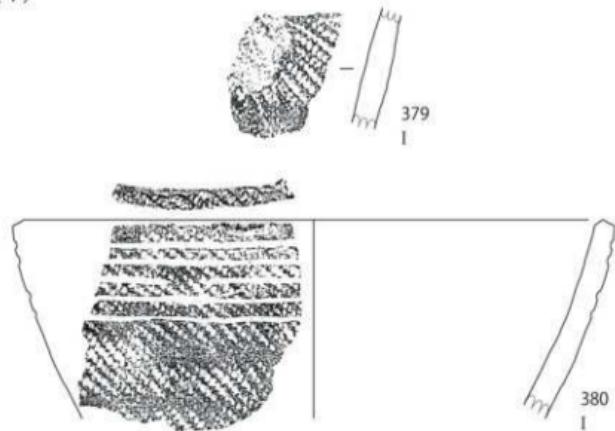
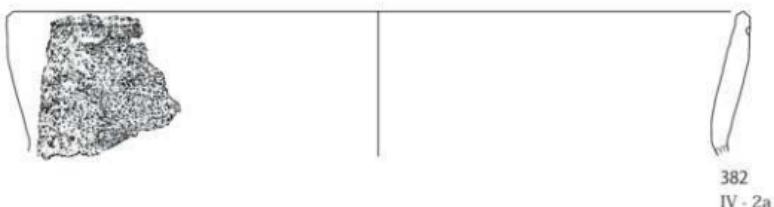


図 80 E1 区出土土器 (6) (S=1/2)

US604 (2)



381
IV - 1b



382
IV - 2a

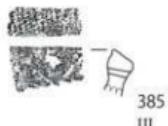


383
IV - 4f

US60 (1)



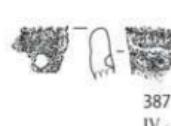
384
III



385
III



386
II



387
IV - 1a



388
IV - 3b

図 81 E1 区出土土器 (7) (S=1/2)

USO (2)

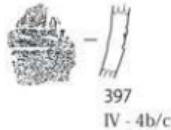
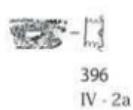
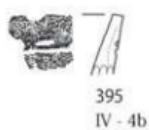
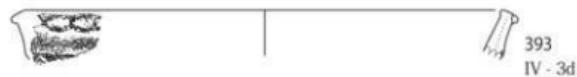
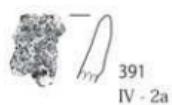
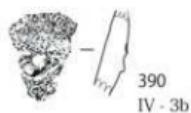


図 82 E1 区出土土器 (8) (S=1/2)

USO (3)

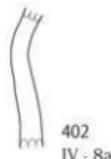
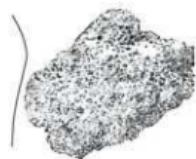


図 83 E1 区出土土器 (9) (S=1/2)

USO (4)

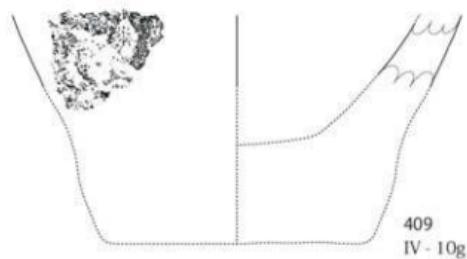
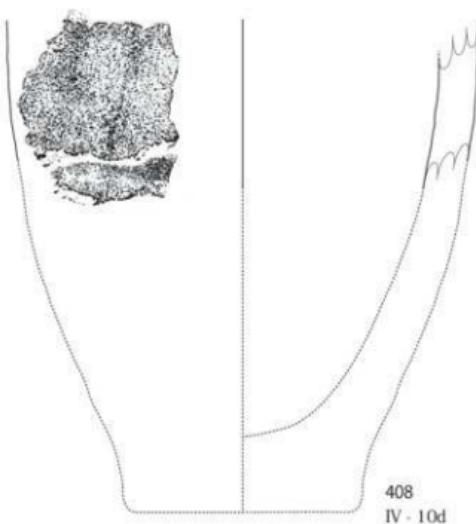


図 84 E1 区出土土器 (10) ($S=1/2$)

(7) TP1 (図 85 ~ 88、表 17、写真 3)

TP1 の堆積土層は、現在までのところ近接する B 地点を中心とする第 1 層群～第 3 層群の土層大別とは異なる層相を見せており、他区との層位的な比較が難しい。また、絶対的な土器出土点数も少ないことから、単独で出土傾向について分析を行うことにも限界がある。一点だけここで指摘できるとすれば、下部の堆積層である US155 の出土土器がオホーツク式に限られ、後世の混入物も検出されていないことから、この堆積層が B 地点の第 2 層群に時期的に並行するものである可能性が考えられる。

(岩城)

表 17 TP1 各層の土器分類別出土点数

US	土器分類別出土点数												総点数		
	I	II	III	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	IV-5	IV-6	IV-7	IV-8	IV-9	IV-10		
205		1												2	3
154	1	1						2			3		1	24	32
206															0
155						1		2	2	3				23	31

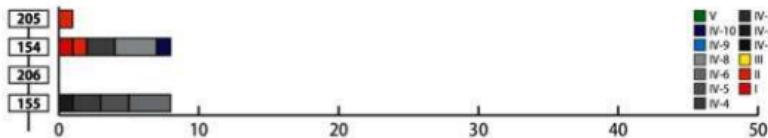


図 85 TP1 堆積各層の土器出土傾向（不明土器片は除く）

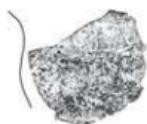
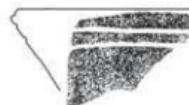


写真3 TP1 出土土器

US205



US154



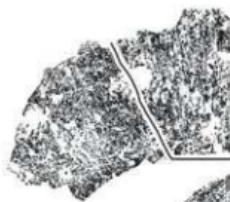
414
IV - 4a



415
I



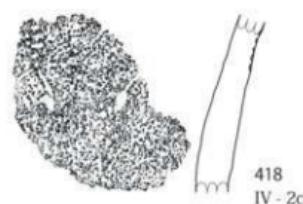
416
II



417
IV - 10d

図 86 TP1 出土土器 (1) (S=1/2)

US155 (1)



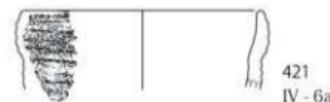
418
IV - 2c



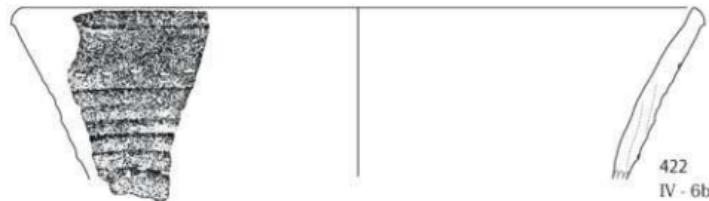
419
IV - 4b



420
IV - 4f



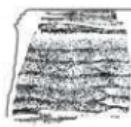
421
IV - 6a



422
IV - 6b

図 87 TP1 出土土器 (2) (S=1/2)

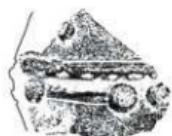
US155 (2)



423
IV - 6b



424
IV - 5a



425
IV - 5g

US0



426
IV - 1a



427
IV - 4c

図 88 TP1 出土土器 (3) (S=1/2)

(8) D1・D2 区 (図 89～91、表 18)

D1・D2 区は、沼浦海水浴場遺跡の南側に位置する沼浦遺跡内に設定された調査区で、B 地点から南西に 350m 程度の距離がある。両遺跡とも、沼浦マールの南東部、火口壁が沈水して海に向かって開口している部分に形成された海岸砂丘上に位置していることは共通しているが、沼浦海水浴場遺跡が北端に位置しているのに対して、沼浦遺跡は南端に近い部分に位置している。海岸砂丘本体を構成すると考えられる第3層群に属する堆積層は、D1・D2 区においても検出されているが、これらが上部において全面的に近現代の営為によって削平・攪乱を受けているため、第2層群に相当する堆積層は存在せず、第3層群の上に直接第1層群の堆積層がのっている。このような堆積状況の中で、図 89 を見ても分かる通り、D1・D2 区の土器出土傾向は他区とは明確に異なるものになっている。まず、第3層群からの出土はほぼ縦繩文土器のみであり、この付近での明確な縦繩文期の活動痕跡と捉えられる。上部が攪乱を受けているため、第3層群内における時系列上の位置は明確ではないが、おそらく B 地点の第3層群上部からの遺物出土例の時期よりは古い、堆積形成の中期頃に位置づけられると考えられる。もう一点留意すべき点としては、第1層群 US401 から 3 点出土している鈴谷式の存在が挙げられる。D1・D2 区近辺においては、鈴谷式の表採例が散見されていることから、近現代の削平・攪乱を受ける前の段階で、第3層群の上部、あるいはその上に形成された第2層群相当層という形で鈴谷式期の文化層が存在していた可能性が考えられる。周辺の状況を改めて精査する必要がある。（岩城）

表 18 D1・D2 区各層の土器分類別出土点数

US	上部分類別点数												総点数
	I	II	III	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	IV-5	IV-6	IV-7	IV-10	V	
401		2	3										5
402													0
405		1											1
404	18											16	34
407	2									1			3
408													0
409													0

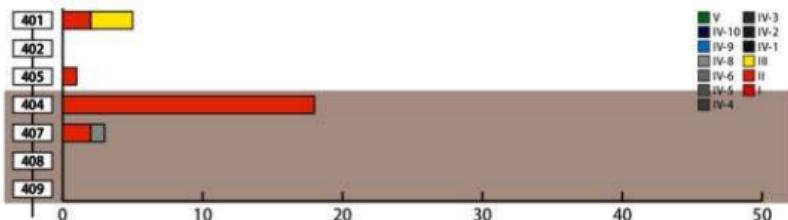
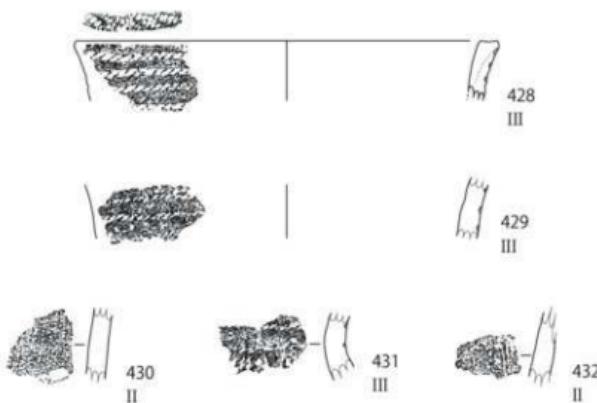
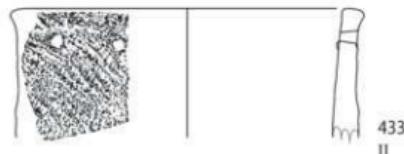


図 89 D1・D2 区堆積各層の土器出土傾向（不明土器片は除く）

US401



US405



US404 (1)

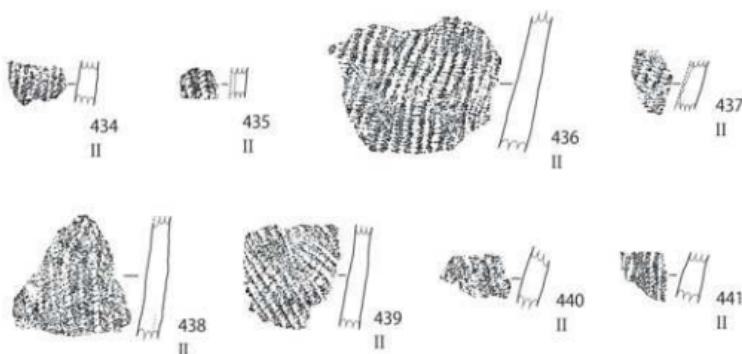
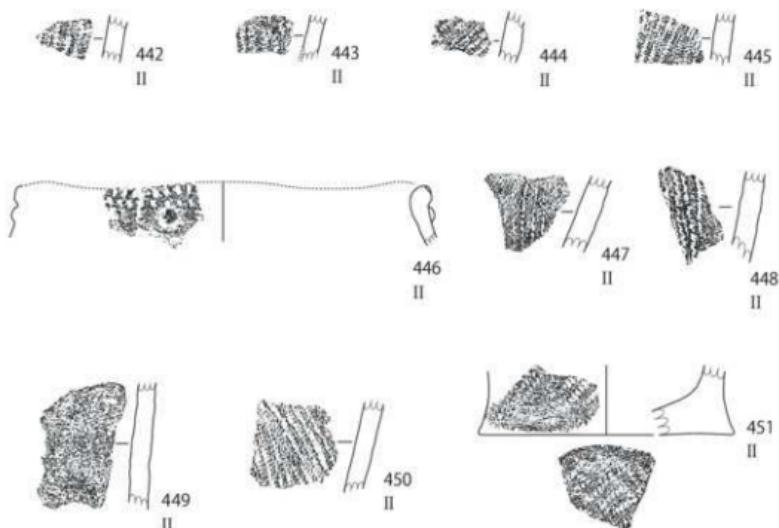
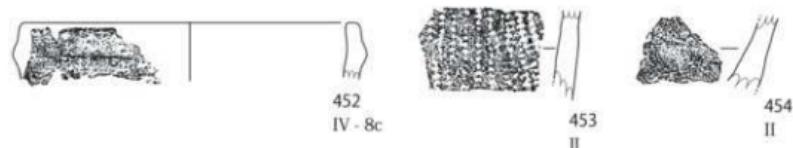


図 90 D1・D2 区出土土器 (1) (S=1/2)

US404 (2)



US407



US50



図91 D1・D2区出土土器(2) (S=1/2)

2. 出土石器（表 19、写真 4）

B1 区、B7 区、E 区において石器が出土している。以下それらを一括して掲載する。



写真 4 出土石器 (S=1/2)

表 19 出土石器観察表

番号	調査区	US	器種	全長 (cm)	全幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
456	B1a'	159	尖頭器	1.72	1.52	0.42	1.057
457	B1b	102	剥片石器？	3.2	2.6	0.43	3.057
458	B1b	102	剥片石器？	1.96	1.5	0.59	1.224
459	B1b	119	剥片石器	2.69	1.71	0.75	3.605
460	B1b	203	磨製石斧	8.27	3.08	0.92	50.765
461	B7	101	石鏹未成品？	3.47	1.8	0.55	2.412
462	B7	129	石鏹（無茎）	1.5	1.75	0.51	1.396
463	B7 周辺	101	石鏹	3.0	1.28	0.4	1.127
464	B7	129	石鏹未成品？	2.5	2.0	0.59	1.682
465	B7	149	石鏹（無茎）	4.42	3.01	0.85	7.342
466	B7	163	磨製石斧	9.9	4.05	1.7	80.674
467	B7	184	磨製石斧？	6.75	4.65	1.92	54.984
468	E	604	石鏹？	1.89	0.75	0.29	0.312
469	E	604	石鏹	3.23	2.38	0.61	4.101
470	E	604	搔器	5.79	2.57	0.75	6.072
471	E	604	搔器	6.41	2.8	0.55	9.132
472	E	605	搔器	4.3	2.02	0.43	5.305
473	E	605	搔器	3.11	3.94	0.7	11.534

3. 出土骨角器（表20、写真5）

B0区、B1区、B7区において骨角器が出土している。以下それらを一括して掲載する。



写真5 出土骨角器 (S=1/2)

表20 出土骨角器観察表

番号	調査区	US	器種	全長(cm)	全幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
474	B0	130	未成品	3.8	1.9	0.7	3.092
475	B0	135	未成品	9.7	1.3	0.4	5.829
476	B0	135	未成品	5.6	1.1	0.9	2.874
477	B0	195	装飾品--?	5.2	0.9	0.4	1.801
478	B1a'	159	装飾品	4.3	0.9	0.1	0.414
479	B1b ベルト	116	骨笄 / 骨鍔?	7.6	4.2	1.1	16.443
480	B1b ベルト	137	不明	1.3	0.6	0.6	0.552
481	B1b	102	刺突具	6.3	0.8	0.3	1.348
482	B7	178	未成品	13.2	5.7	2.9	52.001
483	B7	171	未成品	4.5	2.6	0.9	6.428
484	B7	171	骨鍔	3.7	0.7	0.6	0.867
485	B7	0	刺突具	10.6	1.1	0.5	3.104

IV. 沼浦海水浴場遺跡（第2次調査）の動物遺体

内山 幸子（東海大学）

はじめに

沼浦海水浴場遺跡では、2017年度に実施された第2次調査により、さまざまな種類の動物遺体が出土した。II-1にあるように、本遺跡の層位は新しい順に第1層群、第2層群、第3層群に大きく分けられ、このうち第2層群が本遺跡の主体を占める。第2層群では、刻文と沈線文が施されたオホーツク文化期の土器がおもに出土し、動物遺体の多くもこの時期に伴うものである。このため、ここで報告する動物遺体の内容については、この時期が中心となる。

表21に示したように、確認された動物種は50種以上に上る。形態のみからでは種名まで同定し得なかった資料も多くあるため、ここで示したのはあくまでも最低限の種数であり、実際にはより多くの動物種が利用されていたことが明らかである。

動物遺体の採取は、発掘時に目に付いたものを手で採取する方法と、サンプルとして土ごと採取する方法が採られた。表では、それぞれの分析結果を別に提示しているが、小形の資料ほど発掘時には見落としがちなため、サンプル資料と合わせてみていく必要がある。

75ヶ所で採取された1Lサンプル^(註1)は、1mm目の篩がかけられた上で残った資料について重量(g)を計量した^(註2)。分析時間が限られていたため、動物種ごとの容量・重量を量ることはできず、同定し得た動物の種類と数のみを記すことにとした。サンプルのなかには、動物遺体が細片化していたために種名の同定に至らなかったものや、肉眼で観察する限り、動物遺体が確認できなかったものも含まれている。

表22～32は、動物遺体を層群ごと、区ごとにまとめたものである。層群が同一の資料の場合は、より上層から順にUS番号ごとに提示している。US番号やその上下関係については、II-1を参照されたい。

オホーツク文化期の動物利用

上述したように、オホーツク文化期のなかでも、中期から後期に移りかわる時期が本遺跡の主体である。以下に、この時期を中心とする出土動物の内容や、そこからうかがわれる当時の動物利用の状況について、動物種ごとに述べることとする。

1) 貝類・フジツボ類（表22・29～32）

貝類とフジツボ類の出土は、表に示したように少ない。量的にやや目立つのは、エゾアワビやタマキビガイ、エゾチヂミボラ、ヒメエゾボラ、イガイである。このうち、タマキ

ビガイやエゾチヂミボラは小形で、これをおもな目的として採集が行われたとは考えにくく、混獲などによって遺跡内に持ちこまれた可能性が高い。食料としてはエゾアワビやイガイ、ヒメエゾボラが利用されたとみられるが、出土量は総じて少なく、他のオホーツク文化期の遺跡^(註3)と同様に、それほど貝類採集には熱心でなかった様子がうかがえる。

2) ウニ類（表 29～32）

ウニ類は、手による採取資料のなかにも破片がわずかに見られたが、ほとんどはサンプル中に含まれていた。表には、ウニ類の口器を構成する部位のなかでも出土量が多い顎骨片と中間骨（内山 2001）の数のみを記した^(註4)。

第 2 層群では全ての US でウニ類が確認できた。US ごとの最小個体数を見ると、B1 区 (US114) の 7 個体を最多とし、半数近くの箇所では 1 個体にとどまった。この結果から、「ウニ層」が形成されるほどウニ類の採集が集中的に行われていたとは言えないが、食料として一定程度の役割を担っていたことは明らかである。なお、顎骨片や中間骨では種の区別は困難だが、殻や棘の観察から、キタムラサキウニを中心にバフンウニが混ざるという状況であることが見て取れた。

3) 魚類（表 23・24・29～32）

魚類では小形の部位が多いこともあり、手による採取だけでなくサンプルから得られた資料の分析結果も合わせて総合的に見ていく必要がある。

軟骨魚類としては、サメ類が 2 種確認されている。ツノザメ科とネズミザメ科であるが、いずれも出土量は少なく、積極的に漁の対象にしていたとは言い難い。

硬骨魚類では、科レベルで 10 種の魚種が確認されている。小形の魚種であるニシン科やアイナメ科は、手による採取では一見出土量が少ないよう見えるが、サンプル中には多く含まれており、タラ科やフサカサゴ科と並んで、本遺跡の主体種である。

ニシンの可能性が高いとみられるニシン科は、1 サンプルあたりの出土量はそれほど多くないながらも、ほとんどのサンプルに含まれている。

アイナメ科は、形態的にホッケ、アイナメの双方が含まれる可能性がある。アイナメに似た方骨や角骨を体長 40cm の現生標本と比較したところ、ほぼ同大の資料とかなり大きい資料が確認できた。このことから、大きく成長した個体を捕獲していたことが分かる。

タラ科は、出土部位の大きさからみて、その多くがマダラである可能性が高い。これも成魚がおもに捕られていたようである。

フサカサゴ科は、最小個体数でみれば、本遺跡でもっとも多く出土している魚種である。フサカサゴ科は利尻島周辺で多数の種類が生息しており、複数種が漁の対象にされた可能性が考えられる。

その他の魚種はいずれも出土量が限られる。サケ科は椎骨が少量確認されるのみである。カジカ科も第 2 層群を中心に少量確認されているに過ぎず、今回の資料で見る限り、

積極的に捕る対象にはされていなかったようである。

ヒラメと同定された資料も少ないが、現生標本と比較したところ、体長70cmを超えるような大形の資料であることが明らかであった。

カレイ科の出土量も少ないが、カレイ科は種数が多い上に形態も多様性に富む（尼岡2016）。骨格も部位ごと・左右ごとに形態差がみられるため、複数種の現生標本と比較したところ、主上顎骨や歯骨、角骨2点（全て右）ではマガレイ、前上顎骨（右）ではアサバガレイ、角骨1点（右）と方骨（右）ではクロガシラガレイやクロガレイに似た形態が確認された。これらはいずれも利尻島周辺海域で多くみられる種類である。このように形態の多様性から、フサカサゴ科と同じく、複数種が捕られたものと推測される。

フグ科とした資料は分布域を考慮するとマフグである可能性が高い。出土量は僅か4点ときわめて少ないが、マフグの現生標本と比較したところ、最小個体数2個体のうち、1個体は体長42cmの標本と同大、もう1個体はそれより大きな個体であった。マフグであるとすれば、肝臓や卵巣、腸、皮膚に人を死に至らしめるような猛毒や強毒があるため（落合・田中1986）、当時の遺跡の担い手が毒に関する知識を備えていた可能性は高い。

4) 鳥類（表25・29～32）

鳥類では、9種類ほどが確認されている^(註5)。アホウドリ科とウ科、ウミスズメ科がやや目立つが、それらの種類を含めても出土量はそれほど多くない。

出土鳥骨のうち、アビ属、ミズナギドリ目、カモ科、ガン族、カモメ科、カラス科は、調査区全体で数点ずつが出土しているに過ぎない。このうち、カモメ科では、オオセグロカモメよりもはるかに大きくワシカモメに相当するような大形の種類の脛骨が確認されている（B1b区第2層群）。

出土量が割合多い種類のうち、アホウドリ科では、B7区第2層群（US171）の中手骨のように、鳥管骨盤の素材とされた資料も見られる。他にも、表には記載していないが、切断された痕跡をとどめる資料もあり、鳥類は、食料としてだけでなく、道具の素材としても利用されたことが分かる。

ウ科では、ヒメウと同大の資料が多かったが、わずかにウミウ大の資料やその中間的な大きさの資料もみられた。種ごとでも大きさには幅があるため、大きさのみをもって種名の特定はできないが、複数種が利用されたとはいえるだろう。

ウミスズメ科でも、ウトウ大の資料からハシブトウミガラス大の資料まで、大きさの異なる資料がみられる。出土数的には、後者の資料が主体を占める。

‘種不明鳥類’として表に提示した資料のうち注目されるのは、B1a'区第2層群（US159）から出土した大形鳥類の右上腕骨である。形態的にみて周囲の遺跡ではあまり報告例のないツル科の可能性もあり、今後さらなる検討を進める必要がある。

5) 哺乳類（表 26～32）

哺乳類はほとんどが発掘時の採取資料中に含まれていた。サンプル資料のなかでしか見られなかった種類としては、トガリネズミ科がある。

トガリネズミ科とネズミ科は小形であり、意図的に利用されたものではなく紛れこみと考えられる。

陸生哺乳類のなかで目立つのは、ブタである。全身の部位が散乱した状態で出土しており、傷も 2 例のみだがみられたため、解体されたことは明らかである。死亡年齢が査定できた資料の多くは亜成獣であった。オホーツク文化期においてブタは食用家畜とみなされており、若い個体に偏る本遺跡での年齢構成も、前述した出土状況や傷の存在と合わせて、食料にされた根拠となる。性別としては雌雄ともに確認されている。

ブタと並ぶ家畜であるイヌは、第 1 層群で橈骨が 1 点確認されたのみである。

キタキツネは陸生哺乳類のなかでブタに次いで多い。イヌと形態的に近い部位も多いが、大きさを含めた形態からキタキツネと判断した。キタキツネは毛皮が良質のため、毛皮に高い価値が見出された結果、捕獲されたとも考えられる。

海獣類としては、アシカ科とアザラシ科、クジラ目が確認されている。出土点数はいずれもそれほど多くない。

アシカ科では、オットセイ、ニホンアシカに加えて、ニホンアシカかトドの可能性のある資料がみられた。アシカ科は性差が大きく、オットセイでは雌が確認されている。冬から春の時期に繁殖地から南下してきた個体であろう。B1b 区第 2 層群の下顎骨では、頬側に傷がみられ、肉量の少ない部位であることから、毛皮採取時にいた傷であると考えられる。オットセイの毛皮は特に良質なため、食用としての利用だけでなく、毛皮を目的とした獵が行われたことは想像に難くない。ニホンアシカでは上顎骨が出土している。欠損部があるなどの理由により、アシカ科とまでしか同定できなかった資料では、四肢骨で傷が複数確認されている。解体に伴うものとみられる。

アザラシ科は第 2 層群を中心に出土が確認されている。出土量としてはそれほど多いわけではないが、食用としてだけでなく、水にも強い丈夫な毛皮を持つ点で、アシカ科とともにアザラシ科の価値が高かったことは容易に想像される。欠損部の少ない上腕骨をみると、ゴマフアザラシの形態に近い。

クジラ目としては、尺骨 1 点以外は、破片資料のみの出土である。尺骨は全長が 58mm ほどしかなく、イルカに分類されるクジラ目のなかでもかなり小形の種類である。

おわりに

以上、動物種ごとに見てきた通り、2017 年度の発掘調査で出土した動物遺体の内容にもとづけば、沼浦海水浴場遺跡では、他のオホーツク文化期の遺跡の例に漏れず、遺跡周辺に生息する動物を中心に利用していたことが明らかである。それに加えて、もともとはこの地にいなかったブタへの依存度が割合高く、北海道内では利尻島・礼文島のみに特有

の特徴も備えている。

本遺跡の発掘調査は今後も継続されるため、遺跡全体の動物利用に対する評価は、調査が完了した後に行いたい。

註

- (1) 容量が 1L に満たないサンプルも 1 ケ所のみだが含まれている (B7 区第 2 層群 US145)。
- (2) 計量前に土器片や骨角器（未成品）が抜かれたサンプルも 3 ケ所みられる。
- (3) 貝塚が形成されることもあるサハリンの遺跡を除く。
- (4) 頸骨片は対称的な形態の骨 2 点で 1 つの頸骨を構成する。ここでは頸骨片をそれぞれ便宜的に a, b として区分した上でカウントした。頸骨と中間骨は、1 個体のウニ類に 5 つずつあり、これをもとに最小個体数を算出し、サンプルごとの出土量の客観的比較が可能になる。
- (5) 出土鳥骨のうち、手元にある現生標本と比較しても同定が困難であった資料については、北海道大学総合博物館の江田真毅氏の教示を得た。ここに記して感謝申し上げます。

文献

- 尼岡 邦夫 2016 『日本産ヒラメ・カレイ類』東海大学出版部
内山 幸子 2001 「ウニ類の出土量の算出方法について」『海と考古学』3 号 1-8 頁
落合明・田中克 1986 『新版魚類学(下)』恒星社厚生閣

表 21 出土動物一覧

軟足動物門	Phylum Mollusca	脊椎動物門	Phylum Chondrichthyes
腹足綱	Class Gastropoda	軟骨魚綱	Class Chondrichthyes
エゾアワビ	<i>Haliotis discus hannah</i>	ツノサメ科	Squalidae gen.
ユキノカサガイ	<i>Acanaea pallidula</i>	ネズミサメ科	Lamnidae gen.
ヘソアシクボガイ	<i>Chlorostoma argyrostoma turbinata</i>	硬骨魚綱	Class Osteichthyes
チャイロタマキビガイ?	<i>Tenagella turrita?</i>	ニシン	<i>Clupea pallasi</i>
タマキビガイ	<i>Littorina brevicula</i>	サケ科	Salmonidae gen.
クロタマキビガイ	<i>Neritrella sitkana kurilensis?</i>	タラ科	Gadidae gen.
タマキビガイ科	Littorinidae gen.	マダラ	<i>Gadus macrocephalus</i>
ウミニナ科	Pomatidae gen.	フサカサゴ科	Scorpaenidae gen.
エゾタマガイ	<i>Cryptonatica janthostomoides</i>	アイナメ科	Hexagrammidae gen.
エゾチヂミボラ	<i>Nucella freycinetii</i>	カジカ科	Centroscyllidae gen.
ヒメエゾボラ	<i>Neptunes arithritica</i>	ヒラメ	<i>Paralichthys olivaceus</i>
マイマイ貝	Stylommatophora fam.	カレイ科	Pleuronectidae gen.
浮足綱	Class Pelecypoda	フグ科	Tetraodontidae gen.
エゾタマキガイ	<i>Glycymeris sessoensis</i>	鳥綱	Class Aves
イガイ	<i>Mytilus coruscus</i>	アビ属	<i>Gavia sp.</i>
シジミガイ科	Corbiculidae gen.	ミズガドリ目	Procellariiformes gen.
ウバガイ	<i>Spatula sachalinensis</i>	アホウドリ科	Diomedidae gen.
節足動物門	Phylum Arthropoda	ウ科	Phalacrocoracidae gen.
頭脚綱	Class Maxillopoda	カタ科	Anatinae gen.
フジツボ類	Balanomorpha fam.	ガン族	Anserini sp.
棘皮動物門	Phylum Echinodermata	カモメ科	Laridae gen.
ウニ綱	Class Echinoidea	ウズスズメ科	Alcidae gen.
エゾバフンウニ	<i>Strongylocentrotus intermedius</i>	カラス科	Corvidae gen.
キタムラサキウニ	<i>Strongylocentrotus nudus</i>	哺乳綱	Class Mammalia
		トガリネズミ科	Soricidae gen.
		ネズミ科	Muridae gen.
		キタキツネ	<i>Vulpes vulpes schrenckii</i>
		イヌ	<i>Canis familiaris</i>
		ブタ	<i>Sus scrofa domesticus</i>
		アシカ科	Otaridae gen.
		トド?	<i>Eumetopias jubatus</i>
		ニホンアシカ	<i>Zakophus californianus japonicus</i>
		オットセイ	<i>Callorhinus ursinus</i>
		アザラシ科	Phocidae gen.
		クジラ目	Cetacea fam.

表 22 軟體動物門(腹足綱・斧足綱)・節足動物綱

		区	US								
1	BO	130	fr								
	Bla'	101-102, 151		1						fr	右
	Bla	102								fr	
	Bib	134		1	1			fr		L, R 1	
	B7	101								fr	右
	El	601-602	1 1	2				4		L, 2 R, 2	
2	D	401		1				1			
	BO	132-133, 135-136, 141	2	2				1 3	fr	R 3	
	Bla'	159	2	4				2 1 2	fr		
		152, 173	3	2				1		R 1	
	Bia	105	fr		1			1		R 1	
		146, 173	2				2				
		177				1					
	Bl	118								fr	
	Bib-bek	107							LR 2 1		
		114								R 1	
		116	fr	4 1				1 1		R 1	R 1
		137		1	1					R 1	
		142	1	1 14	4 3			R 1		L, 1 R, 5	
	Bib	137, 142-143, 150, 157	5		21	2	2	10 1		L, 6 R, 4	
	B7	129	1	1			2			L 1	
		149	1								
		162	1				1				
		163	5	5		1	8 5	1 LR 2 1 L, 8 R, 10			
		178	1	1			1 1			L, 3 R, 1	
		170					1 1			R 1	
		171	6	1		1		2		L, 6 R, 6	R 2
3	El	603	1								fr
-	TP1	205								L 1	
	B1	0			2					R 1	
	B7	0	fr	2		1				L, 1 R, 1	
	El	0					1				
	-	0			1						

凡例 L: 左側 R: 右側 fr: 磁片

表23 魚綱(1)

		ブノザメ科	ネズミザメ科	ニシン科	サケ科	タラ科	フサカサゴ科?	フサカサゴ科	アイナメ科	カジカ科	カジカ科?	ヒラメ	カレイ科	ヒラメ/カレイ科	ブグ科	種不明魚類
組	区	US														
B0	130															
B1a	402356															
B1a	402															△
B1b(b1)	134															
		海帶目														
			上上物目 I	前上物目 L1	上上物目 L2	前上物目 L2 R1	海帶目	海帶目	前上物目 L3 R1	前上物目 L4	前上物目 L5 R1	海帶目 I	前-海帶目	海帶目 I		
	B7	101	海帶目	海帶目 I	海帶目	海帶目 I	海帶目	海帶目	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I		
	E	604-602	海帶目 I	海帶目 I	海帶目	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I		
B0	132-133,	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 L1	海帶目 L1	海帶目 L1	海帶目 L1	海帶目 L1	海帶目 L1	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I		
	135-136,															
	140-139															
	138															
	159															
B1a																
			海帶目 I	前上物目 X2	海帶目 L2	海帶目 L2	海帶目 L3	海帶目 L3 R1	海帶目 L4	海帶目 L4 R1	海帶目 L5	海帶目 L5	海帶目 L5	海帶目 L5	海帶目 I	
	152															
B1a	105-111	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	海帶目 I	
	190															
	174															
	146-172															
	176															△
B1b(b1)	114															
	136															
B1b(b1)	117															
	137															
	142															

表 24 魚綱 (2)

種類	区	US	ツノギメ科	ネズミザメ科	ニシン科	サケ科	タラ科	ブサカサゴ科?	フサカサゴ科?	アイナメ科	カジカ科?	カジカ科?	ヒラメ	カレイ科	ヒラメ/カレイ科	フグ科	種不明魚類
			新作1	(上) 鮎作 L1.0 (上) 鮎作 L1.0 内作 L1.0 鰐作 2.5						内作 L1.3 鮎作 L1.1			(上) 鮎作 L1 (鮎作 L1.0) 内作 L1 第一鯙作 L1 内作 L1 鰐作 L1				
	E15	137.142- 143.150-157	L29										鰐作 L1 第一鯙作 L1	内作 L1			
Z	E7	149											鰐作 L1.0 (鮎作 L2 内作 L1 鯛作 L1 鰐作 6	鰐作 L1			
		162											鰐作 L1 (鮎作 L2 内作 L1 鯛作 L1 鯛作 2	鰐作 L1			
		143	新作 1		(上) 鮎作 L1 (上) 鮎作 L1.3 鮎作 1					内作 L1	内作 L1				内作 L1		
		176		新作 2													鰐作 1
		177		新作 1													
3	E	600												新作 2			
	Re	0												内作 1			
	RRe	0												新作 1			
	和	0	新作 2														
	和	0											新作 L1 鮎作 L1 鰐作 10	鰐作 L1 鮎作 L1	新作 L1	新作 3	
													上) 鮎作 L2 (上) 鮎作 L2 内作 L2 (内作 L2 鰐作 L1 鯛作 7	内作 L1			鰐作 2
	E	0													第 一 鯙 作 1		
	-	0												鰐作 1			

表 25 烏網

種類	EC	US	アビ 属性	ミズ ナギ ヨリ 目	アホ ウヨ リ科	ク 科	ウ 科 ?	カモ 科	ガ ン 族	カモメ 科	ツ ミス ズメ 科	カラ ス科	種 不 品 類	
1	80	130				上脚性 L p 1 脚性 R p 1					上脚性 R p 1 大脚性 R m 1			
	Bla	102.150				上脚性 R m 1								
	Bla	102					脚性 L m 1						脚性 L m 1	
	Bla	124				脚性 L p 1					脚性 L m 1			
2	80	130.135.136 140-141				上脚性 R p 1 R d 1 脚性 L p 1 脚性 R d 1 脚性 R p 1					上脚性 R m 1 脚性 R m 1		脚性 R d 1 脚性 L 脚性 R d 1	
	Bla	130				上脚性 L p 1 上脚性 R d 1					脚性 L p 1 脚性 R m 1		脚性 L 1 脚性 R m 1 脚性 R d 1 脚性 L 脚性 R d 1	
	Bla	132				大脚性 L d 1 脚性 L d 1					脚性 L p 1		脚性 R d 1 脚性 R d 1	
	Bla	109											上脚性 R d 1 脚性 R d 1	
3	Bla	174					脚性 L 1						脚性 R d 1 脚性 R d 1	
	Bla	175											脚性 R d 1 脚性 R d 1	
	Bla	108											脚性 R p 1 脚性 R p 1	
	Bla	127				上脚性 L p 1							脚性 L 1 脚性 L 1	
	Bla	137											脚性 L m 1 脚性 L m 1	
	Bla	142				脚性 R 1								
4	Bla	137.142-143				脚性 L d 1 中手性 R L 1 中手性 L 1 中足性 R d 1					脚性 R d 1		脚性 R d 1 脚性 L	
	Bla	129				中手性 R m 1 大脚性 L d 1							上脚性 R p 1 脚性 R m 1 脚性 L	
	Bla	149				中足性 R d 1 中足性 R 1							脚性 L	
	Bla	162											脚性 R d 1 脚性 R d 1	
	Bla	187				中足性 R d 1 上脚性 L p 1 R d 1 脚性 L d 1 上脚性 R p 1 脚性 R d 1 中手性 L p 1 脚性 L p 2 脚性 R 1		上脚性 L p 1 R d 1 脚性 R d 1 脚性 R d 1 脚性 R d 1 脚性 L 1 脚性 R d 1 脚性 R d 1		上脚性 L p 1 R d 1 脚性 R d 1 脚性 R d 1 脚性 R d 1 脚性 L 1 脚性 R d 1 脚性 R d 1		脚性 R d 1 脚性 R d 1 脚性 R d 1 脚性 R d 1 脚性 L 1 脚性 R d 1 脚性 R d 1		
	Bla	300.170				大脚性的脚性 R p 1 中足性 L 1							脚性 L	
	Bla	179				脚性 R d 1 上脚性 L 1								
	Bla	171				脚性 R d 1 中手性 R 1 上脚性 R d 1 中手性 L p 1 脚性 L 1 中足性 R d 1		上脚性 L d 1 脚性 L 1 脚性 L 1 脚性 R d 1 脚性 R d 1 脚性 R d 1		上脚性 L 1 脚性 R d 1		脚性 R d 1 脚性 R d 1		
	Bla	0					脚性 R d 1							
	Bla	0												
	Bla	0				中足性 R d 1								

凡例 1. 未調査 2. 有調査 3. 400

p. 有記載 d. 通じる事

y. 認め

表29 1Lサンプル(1)

番号	目次	部品番号	部品名	部材	機器		機器			機器		機器			
					機器	機器	機器	機器	機器	機器	機器	機器	機器	機器	
1	600	13030	アクリル板	板	4.1	8	2	2	2	2	2	2	2	2	2
1	610	13006	20	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
1	620	13010	3	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
1	630	13025	8	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	640	13033	(1) (2)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	650	13055	(3)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	660	13062	(4)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	670	13032	(5)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	680	13030	(6)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	690	13020	(7)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	700	13034	(8)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	710	13035	(9)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	720	13060	(10)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	730	13080	(11)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	740	13081	(12)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	750	13082	(13)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	760	13083	(14)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	770	13084	(15)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	780	13085	(16)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	790	13086	(17)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	800	13087	(18)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	810	13088	(19)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	820	13089	(20)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	830	13090	(21)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	840	13091	(22)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	850	13092	(23)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	860	13093	(24)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	870	13094	(25)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	880	13095	(26)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	890	13096	(27)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	900	13097	(28)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	910	13098	(29)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	920	13099	(30)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	930	13100	(31)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	940	13101	(32)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	950	13102	(33)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	960	13103	(34)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	970	13104	(35)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	980	13105	(36)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	990	13106	(37)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
2	1000	13107	(38)	板	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	

V. 沼浦海水浴場遺跡 第1・2次調査出土人骨について

藤田 尚（新潟県立看護大学）

2016年から調査されている沼浦海水浴場遺跡から、人骨片が出土している。これら人骨片資料は、断片的なもので、その形態の詳細をうかがい知ることは難しい。しかし、人骨か否か、さらには身体のどの部位の骨であるかについて、鑑定を行ったので報告する。なお、今回の鑑定資料は2017年（第2次）の発掘資料であるが、2016年（第1次）資料（追加分を含む）についても、合わせて報告する。

2016年度（第1次）資料

B1区

- NK04002 (501) : 表土 (US101)
ヒト (下顎・橈骨と思われる)
- NK04023 (502) : 表土 (US101)
ヒト (肋骨)
- NK04027 (503) : 2層 (US102)
ヒト (顎骨片、左肋骨)
- NK04028 (504) : 2層 (US102)
ヒト (顎骨片)、未成年
- NK04029 (505) : 2層 (US102)
ヒト (頭骨片)
- NK04030 (506) : 2層 (US102)
ヒト (肋骨?)
- NK04031 (507) : 2層 (US102)
ヒト (左大腿骨近位部)
- NK04035 (508) : 2層 (US102)
ヒト (椎骨)
- NK04036 (509) : 2層 (US102)
ヒト (大腿骨頭)、未成年
- NK04037 (510) : 2層 (US102)
ヒト (大腿骨遠位端)、未成年
- NK04042 (511, 512, 513) : DK1 埋土中一括 (US105)
ヒト (頭骨、下顎、椎骨、肋骨、大腿骨頭左右)

NK04052 (514) : DK1・壁面、埋土中 (US105)

ヒト（頭骨）

NK04106 (516) : DK1 埋土中 (US105)

ヒト（下顎）、NK04052 と同一個体

NK04108 (515) : DK1 埋土中 (US105)

ヒト（椎骨）

B3 区

NK05014 (517) : 3 層 (US121)

この資料について鑑定を行った結果、人骨であることは明らかである。部位については、胸椎 3 個、腰椎 1 個、鎖骨 3 個、中指骨 3 本、距骨 1 個、であると考えられた。おおよそ 15-16 歳程度の未成年人骨と考えられる。

NK05017 (518) : 3 層下部 (US122)

ヒト椎骨の一部と考えられる。

B1a 区

NK06014 (519) : DK1 埋土中 (US105)

ヒト頭骨片

NK06022 (520) : DK4 埋土 (US111)

腓骨及び大腿骨遠位端と思われるが、ヒトではない可能性が大きいと思われる。

NK06028 (521) : DK3 埋土 (US109)

ヒト肋骨片、中足骨と思われた。残る骨片の部位については、さらなる詳細な検討が必要と思われた。

2017 年度（第 2 次）資料

B0 区

NK11169 (522) : US135

本資料は土器袋から抽出されたものであるが、成人ヒト頭頂骨の一部である。

B1a 区

NK11034 (523) : DK1 (US104)

成人ヒト頭頂骨の一部である。

NK11035 (524) : DK1 (US104)

成人ヒト頭頂骨の一部である。

NK11100 (525) : DK1 (US104)

成人ヒト肋骨の一部である。

B1a' 区

NK11142 (526) : US173

ヒト大腿骨近位部である。

NK11297 (527) : US 159

ヒト尺骨の可能性が高いと思われた。

NK11422 (528) : US173

ヒトの頭骨片である。

B7 区

NK11125 (529) : US129

本資料は、ヒト大腿骨の骨体部と思われるが、土が付着しており、詳細な観察が不可能であった。可能性は低いが脛骨片であることも考えられる。

NK11235 (530) : US129

ヒトの橈骨片である。

NK11299 (531) : US163

ヒトの肋骨片である。

まとめ

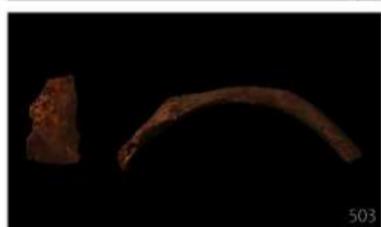
今回鑑定した人骨は、残存状況が悪く、詳細な形態学的検討は、不可能と思われる。しかしながら、今後のDNA分析によって、これらの人骨の人類学上の位置が明らかになる可能性がある。また、年代分析や植生分析など、理化学的分析を進めることも意義あることと思われる。



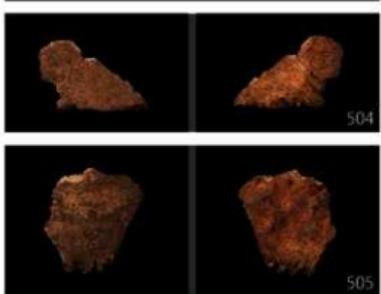
501



502



503



504

505



506



508



507



509



510

写真6 沼浦海水浴場遺跡の出土人骨写真（1）(S=1/2)



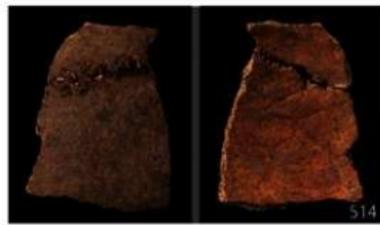
511



512



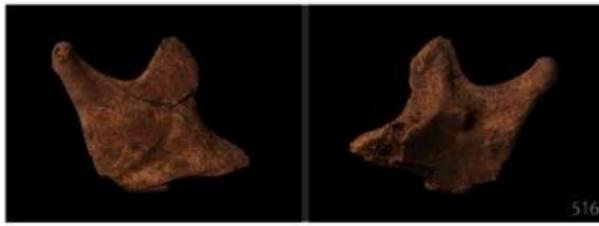
513



514



515



516

写真7 沼浦海水浴場遺跡の出土人骨写真（2）(S=1/2)

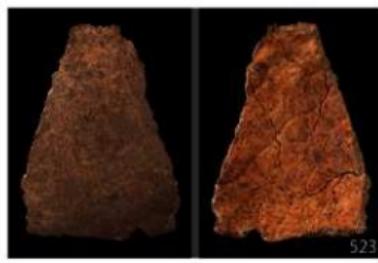
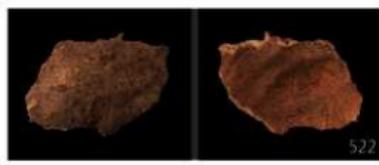
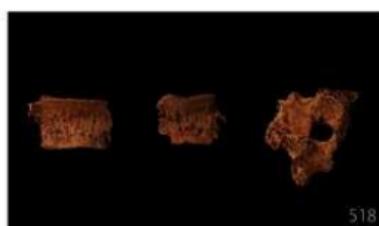
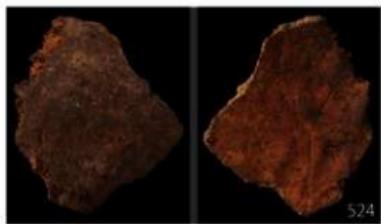
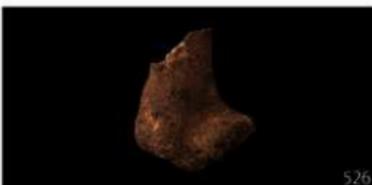


写真8 沼浦海水浴場遺跡の出土人骨写真（3）(S=1/2)



524



526



525



527



528



530



529



531

写真9 沼浦海水浴場遺跡の出土人骨写真（4）(S=1/2)

VI. 附篇

1. 過去の調査・採集資料 その（2）

今回は沼浦海水浴場遺跡の資料を補足し、新たに亦稚貝塚の資料から竪穴住居より上位の1区資料を、利尻町立博物館の佐藤雅彦氏の格別のご配慮により掲載することとした。

（1）沼浦海水浴場遺跡

沼浦地区とくに沼浦海水浴場遺跡は、過去の調査例にも指摘されているとおり、地表面に相当量の遺物が露出する島内でも屈指の場所で、地元の住民や来跡者により容易に採集できた歴史がある。

利尻富士町教育委員会には、そうした過去の採集資料が保管されており、前報の附篇でもそれら資料について紹介されたが、今回掲載した土器片についても、調査により得られた資料とともに一定の評価が与えられるものと思い、ここに報告するものである。

掲載点数は、55点におよぶ。これらの採集時期を判断する材料としては、ラベルやメモを頼りとし、新たに注記を施した。対象資料には、沼浦海水浴場遺跡のものと考えられるNKあるいはNK?、1991年の道教委によるB調査で得られたNKB、1975年採集のNK750718-9、NK751116、1978.7.30沼浦がある。55点のうち、NKBは601、644、648の3点。NK750718-19は614、616、621、622、633、641、642、650の8点。NK751116は602、603、610、613、615、618、619、620、623、630、631、634、635、639、640、649の16点。1978.7.30沼浦は632の1点で、そのほか27点は、NKあるいはNK?である。

601は、I群晚期と思われる胴部片。602、603は、II群の口縁部片。604もII群だが、後北式か。605、606はIII群で、606は口縁上部に縦列の繩線文が施される。607～611はIV群1類で、610のみ1b類。607は長胴の深鉢形土器であろう。612～620は、IV群2a類で、612～616は1段の刻文が施された口縁部片。616は、有段口縁でやや開く器形。617～620は、2段の刻文が施される。621、623～628は、IV群6b類で、押捺が施されたもの。629、630はIV群2c類で、629は櫛歯状の施文具による。631～634、647は、IV群4b類。635、636は、IV群4a類。637は、IV群5d類。639～642は無文で、642には補修孔が穿たれている。643、644はIV群9d類。645は、口縁部が肥厚した厚手土器。646は、IV群10b類で、3段の円形のスタンプ文が施されている。648はIV群に縄目がついたもの。649、650はIV群の胴部資料で、貼付文がつけられている。651～653はIV群の肩部資料で、651は櫛歯状のスタンプ文、652は横位の沈線下に同間隔で窓枠状の沈線が施されている。653は、3段のスタンプ文の上下端に2本一組の刻文がジグザグに施文されている。654、655は底部資料である。NKB以外は、B地点周辺の畑地などからの採集品が大半を占めるものと考えられる。（山谷）

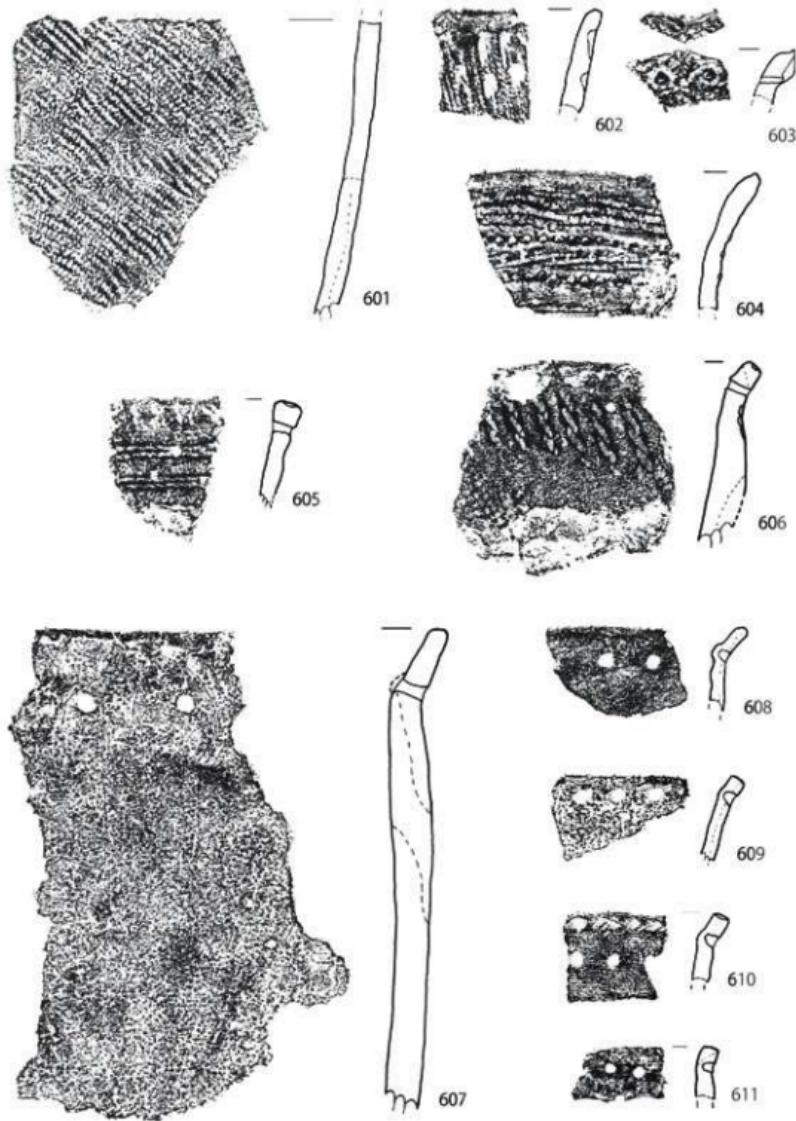


図 92 沼浦海水浴場遺跡採集資料（1）(S=1/2)

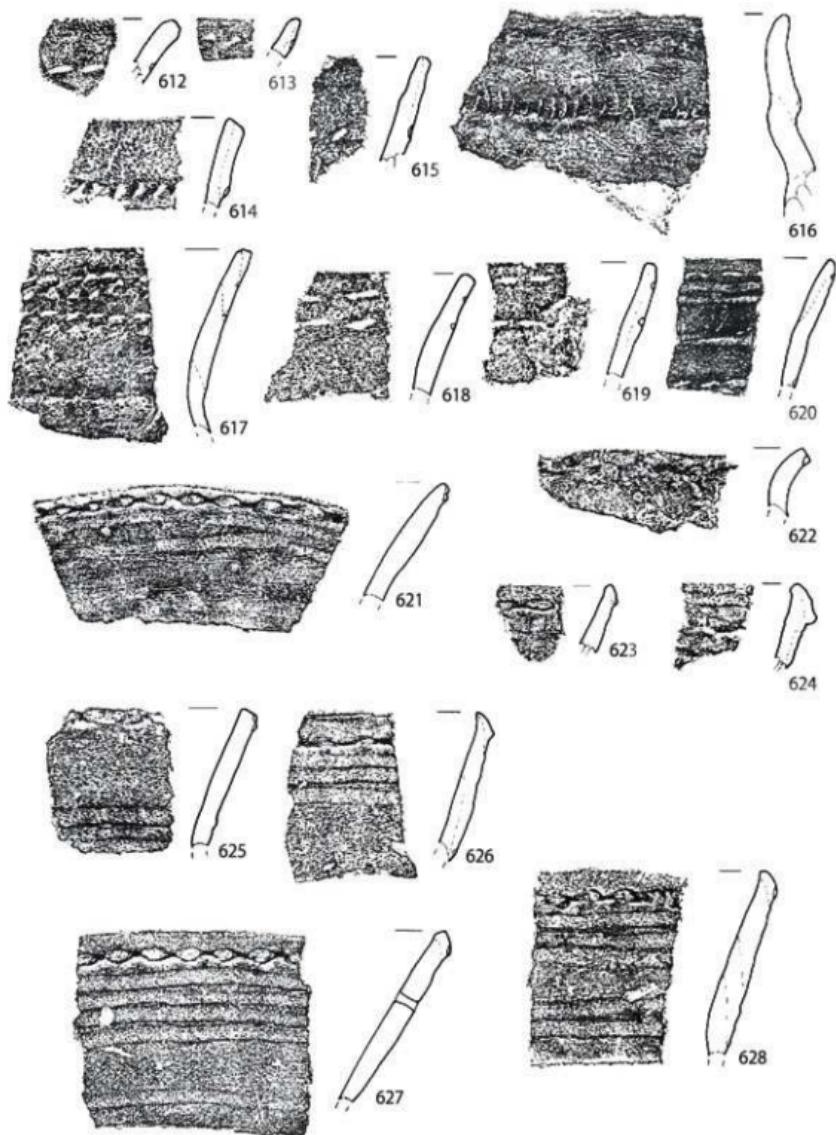


図 93 沼浦海水浴場遺跡採集資料（2）(S=1/2)

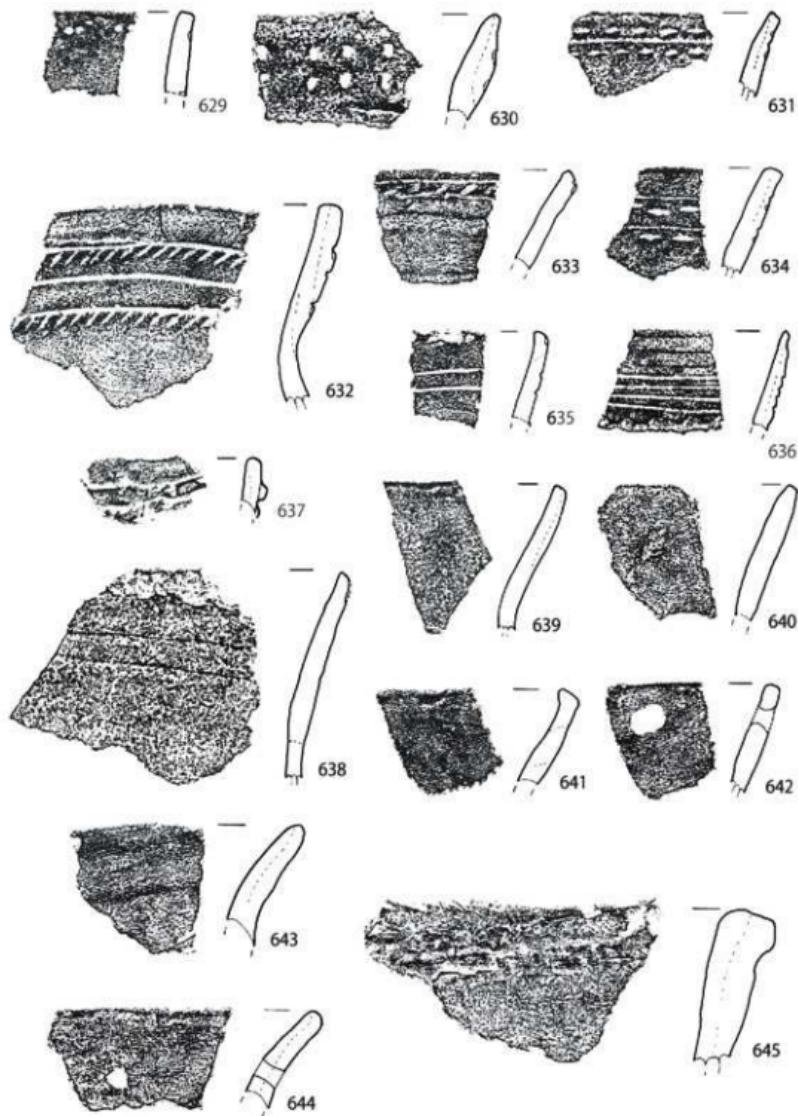


図 94 沼浦海水浴場遺跡採集資料（3）(S=1/2)

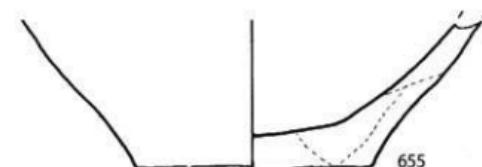
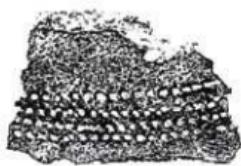
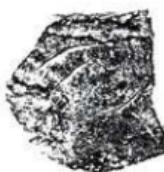
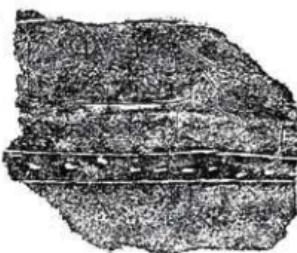
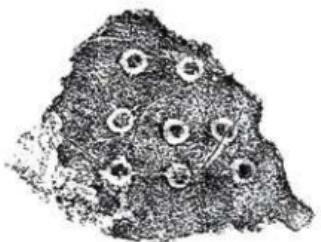


図 95 沼浦海水浴場遺跡採集資料 (4) (S=1/2)

(2) 亦稚貝塚出土の土器資料 その(1) I区

本遺跡の発掘調査は1978年に実施され、翌年には、すみやかに正式な報告書（岡田淳子・相田光明・西谷榮治ほか1978）が刊行された。利尻島内では屈指の遺物内容を示すことから、多くの研究者に注目され、沼浦海水浴場遺跡との比較から、その重要性は一段と高まりつつあるように思われる。現在、出土遺物や調査資料は利尻町立博物館に一括収蔵・保管されており、一般の見学と研究者の利用に広く供されている。

筆者は2015～2017年にかけて、博物館の佐藤雅彦氏より格別のご配慮をいただき、土器類を対象とした悉皆的な実査を継続中である。前回は沼浦海水浴場遺跡の採集・調査資料の資料化を試みたが、今回の集成では亦稚貝塚のI区を特に取り上げる。この地点は、トナカイ角の彫刻品や多數の完形土器を出土した「焼土遺構」に隣接しており、報告された資料群（第22～24図）と、その他の未掲載の資料をできる限りまとめて紹介したい。

ただし、鈴谷式期に比定される1号竪穴資料（埋土・床面）や一部の資料については、未見のため、今回の集成作業からは割愛する。

報告によるとI区の出土土器は、「第3プロック」（C・D・E・H・I・Jグリッド）に帰属するとされ、完形品十数点を含む73点が報告されている。筆者の実査では、この他にも、興味深い資料が数多く見いだされた。また、拓本・実測・トレースを完了した資料も存在する。以下の集成では未報告の資料を含め、総数で197点を大小に係わりなく、網羅的に掲載する。竪穴住居址より上位のI区資料は、これらでほぼ資料化されたと考えて良いであろう。未発見のものや他区のテンバコから発見されたものについては、次回に補充を心がけたい。

なおI区の全資料の整理と発表については、佐藤雅彦氏より格別のご配慮をいただき、付属のDVD-ROMに収録した写真資料については、東京女子医科大学の藤原吉希氏より尽力をいただいた。末筆ながら両氏のご厚意に感謝を申し上げる。

以下、集成資料に係わる必要事項について、前もって述べておきたい。

- (1) I区の資料はポスターカラーで注記され、ニスの塗布で保全されている。注記内容の表記は、「H-09-2 I41～I44」の書式でほぼ統一されている。
- (2) 「カクラン」資料は、ビニール袋に「カクラン（層）」と記入されているか、資料に「カクラン」と注記されている。
- (3) 注記番号I41～I44及びそれ以下の層の「一括」扱い資料（注記番号I45～I47）の出土月日及び出土層位は、遺物台帳のI区欄末尾において、以下のとおり記載されている。これらの記載内容は、報告書の層序記載、記述とは必ずしも一致しない。

I区遺物番号	月 / 日	出土層位	注記番号
41	4/26	黒色土（層）	I41
42	"	黒色砂層	I42
43	4/27	黒色土層	I43

44	"	茶褐色土層.....I44
45	4/28	" (住居内)I45
46	4/30	ピット内I46
47	"	住居床I47

- (4) 本集成では、各資料を層位順に配列し、最後に「カクラン」層の資料を一括掲載する。
- (6) 前回の「観察表」の項目の他に、新たに「出土層位」と「報告書の掲載」の二項目を追加し、掲載された付図・番号については、備考欄に記載する。
- (7) 「口径・底径」の推定は例言に記載したとおり、推定範囲の最小値を記載している。
- (8) 資料の一部には、縮尺を調整して報告書より転載したもの、及び報告書には未掲載の拓本・実測図・実測図トレースから転載したものがある。未掲載の実測図等には、残念ながら器形の傾き情報が欠けているうえに、対象資料の現物を確認できないものがある。これら資料の掲載に際しては、傾きを任意に設定している。
- (10) 整理済みだが報告書に未掲載とされた実測図等を転載した場合については、備考欄に「*」印を記載する。
- (11) 掲載資料の「分類と記載コード」については、前回の集成に含まれていない土器があるため、便宜的に、以下のように拡充・改訂したものを用いる(表33)。(柳澤)

表33 掲載土器の分類と記載コード

分類	コード	分類	コード
縄文土器	JM	元地2式の模倣・折衷系	MC ₂
破壊文土器	ZJ	ポスト元地式	PMC
鈎谷式 (広義)	SY	擬彌脂付文土器	GJ
十和田式 (広義)	TD	ソーメン文土器	SM
刻文土器 A	KA	擦文 I ~ IV	ST _(1~4)
刻文土器 A の模倣・折衷系	KA'	「擦文前期土器」	SZ
刻文・沈線文土器	KC	(変容土器) / 土師器	HJ
刻文・沈線文土器の模倣・折衷・変容系	KC'	不詳の口縁部 (無文を含む)	FK
元地1式	MC ₁	不詳の胴部 (無文を含む)	FD
元地2式	MC ₂	不詳の底部 (無文を含む)	FT

表34 亦稚貝塚（I区）出土土器資料一覧（1）

番号	目次番号	分類	寸法・既往	説明	出典	備考
701	I41	SM3		口縁部下。肩部に幅広く、直腹+波腹+直腹+2本の波腹。さらに3本の丸やかな波状斜文を施す。螺旋手法の可能性あり。斜文は薄片または平頭。	○	第23回25 (資料未見)
702	I41	SM1?	14.6	口縁部下。器厚7~8ミリ。赤褐色を呈する。口縁部に幅広くネコテ状のソーメン文を施す。貼付文は平頭。	○	第23回26
703	I41	GJ	19.4	口縁部下上片。器厚8~11ミリ。黄褐色を呈する。捻り波状と直腹の複合斜文で肩部に幅広く施し、その内側に浅い波腹で平行線を描き、桟木状に複斜文を加える。このマニーフは不明確であるが、螺旋斜文文脈における長い「素文」の併用を示しており、興味深い。先祖追いや例といえる。	○	第22回24
704	I41	PMC		胸部下。器厚10~12ミリ。赤褐色を呈し、凹凸や歪みを作う。焼成良好な個体。表裏ともにタテナデ。	×	
705	I41	PMC		胸部下。器厚8~13ミリ。赤褐色を呈する。表裏とも、指押による凹凸があり、歪みを作う。表裏ともヨコナデ。板作り手法。	×	
706	I41	PMC/MC2?		無蓋の胸部下。器厚は7~10ミリ。黒褐色を呈する。やや歪い個体。ヨコナデ。	×	
707	I41	PMC/KC?		口縁付近から肩部の破片。器厚7~10ミリ。黒・黒褐色を呈する。悪い個体で凹凸、歪みを作う。肥厚口縁端にごく浅い波腹を引く。	×	
708	I41	PMC		肩部の破片。器厚9~14ミリ。暗赤褐色を呈する。表裏とも指押による凹凸、歪みを作う。表はタテナデ。裏はヨコナデ。	×	第22回10例と大きさ、調節、焼成の傾向しており、同一個体と考えられる。
709	I41	PMC/MC2?		胸部下。器厚8~9ミリ。表裏に小凹凸、ヨコナデ。やや歪い個体。	×	
710	I41	KC		胸部下。器厚6~8ミリ。(浅い)波腹を2本引き。その下に粗雑な刻み目を引く貼付文を施す。	×	
711	I41	KC/MC2?	(12.8)	3/5円柱、I41(2点)とI42(4点)が接着。口縁部に1個の小ボツチが残存。これは744例に共通する。口縁部を無文扱いとして、肩部には大きなボツチを施し、その間を波腹で施断する。	○	第22回6
712	I41	KC		环片か? 器厚6~7ミリ。圓弧の器形をなすと推定される。胎土は砂鉄が多く、赤褐色を呈する。土端には深い波腹が施される。	×	
713	I41	KC		口縁下端~胸部下。器厚4~8ミリの済手で、胸部に米粒状の刻文を施す。	×	
714	I41	KC		括れ部分。器厚5~8ミリ。赤褐色を呈する。3本の大波腹の上下に円形刺突文を施す。刻文・波腹文・土器面の複雑からは外れた個体。板作り手法を用いる。	×	
715	I41	KC		胸部下。器厚6~8ミリ。平行波腹に粗文を施す。	×	
716	I41	KA	27.8	口縁部下。器厚6~10ミリ。赤褐色を呈する。捻り入りの爪形文を施し、その上に円形刺突文を加える。裏面は段状に凹面をなす。表裏ともヨコナデ。	○	第23回7
717	I41	KA	22.6	口縁部下。器厚7~10ミリ。赤褐色を呈する捻り入り爪形文を施す。口唇部は浅い平頭なす。表裏ともヨコナデ。	×	
718	I41	KA	13.4	口縁部下。器厚6~14ミリ。黄褐色を呈する。口唇部は深い凹面を呈し、口唇下端には指押による刺突文を加える。表はヨコナデ。裏は斜め差すナデ。板作り手法。	×	
719	I41	TD	22.2	口縁部下。器厚4~6ミリ。灰褐色・黒色を呈する。口唇部は浅い凹面を呈し、口唇下端には粗面をなし、そこに「八」の字状の深い凹面を施す。	○	第23回11
720	I41	PMC	7.0×7.4	ハツレの著しい完全底部。既燒成破壊で重い個体。底部部分は指押による調整。内面は凹凸が目立ち、底面はやや横円形を呈する。	×	
721	I41	PMC		底部下。器厚8~32ミリ。	×	* (資料未見)
722	I41	PMC?		底部下。器厚14~32ミリ。	×	* (資料未見)
723	I42	MC2	17.2	口縁部下~胸部上片。器厚8~12ミリ。厚手で悪い個体。(歪み、凹凸が目立つが、焼成良好。微細な砂を多く含み、胎土のは地は擦りぬけ)。	×	
724	I42	MC2	20.2	口縁部下。器厚9~15ミリ。黄褐色を呈する。拇指状に肥厚・外反し、口唇は丸状。指押によるごく浅い凹面帯が1条認められる。全体に凹凸と歪みを作う。	×	
725	I42	MC2	11.6	口縁部下~胸部上片。器厚9~12ミリで悪い個体。口縁部に浅い波腹で腰輪を描く。赤褐色を呈し、小さな凹凸、歪みを作う。表裏ともヨコナデ。	×	
726	I42	MC2		胸部下。器厚14~15ミリで悪い個体。褐色を呈する。小さい穴が目立ち、荒れた底面をなす。	×	

表35 亦稚貝塚（I区）出土土器資料一覧（2）

番号	目次番号	分類	寸法・概様	細部	基準	参考
727	I-42	MCZ	21.6	折り返し状の肥厚口縁部片。器厚8~15ミリで、板作り手法を用いる。赤褐色を呈し、胎土には大粒の砂を多く含む。口唇の溝みは削り目文か？	×	
728	I-42	MCZ	20.0	折り返し状の脇付口縁部片。器厚10~18ミリ。指押しによる3条の凹面帯を施す。器形は液形と推定される。砂粒を多く含み、陶面は淡黃褐色を呈する。	×	
729	I-42	KC/MCZ	(12.8)	3/5の残存の個体。I41(2点)とI42(4点)が接合。口脇部に1個の小突っ子が残す。744例に共通する。口頭部を輪文扱いとし、脇部にも大きなボッチを施す。その間に沈縫で連続する。	○	第22回6
730	I-42	MCZ		脇部片。器厚9~11ミリで無い個体。やや大きな円形ボッチを施す。表面ともヨコナギ。	×	*
731	I-42	MCZ		脇部片。器厚12~13ミリの重い個体。細く纏い沈縫で波状文を描く。	×	*
732	I-42	KC/MCZ		脇部片。器厚9~11ミリで無い個体。表はタテナデ、赤み大。赤褐色を呈し、焼成良好。裏は凹内・赤みなく、ヨコナデ。	×	
733	I-42	MCZ		脇部片。器厚10~11ミリで焼成堅穢。表タテナデ、裏ヨコナデ。脂青灰色を呈する。	×	
734	I-42	KC?		頭部・脇部片。器厚4~7ミリ、細褐色を呈し、表裏ヨコナデ。	×	
735	I-42	KC		口頭部・脇部片。器厚4~5ミリの薄手な作り。赤褐色で円板刺突文を2段施し、その間に「菱形文+円形刺突文」を連続したモチーフを反覆して挿入する。砂粒を多く含み、淡黄褐色を呈する。	○	第23回23
736	I-42	KC	17.4	折り返し状の口縁部片。器厚6~8ミリ、赤褐色を呈し、焼成堅穢。板作り手法。	×	
737	I-42	KC	19.2	口縁部・脇部片。器厚7~9ミリのやや重い個体。表面ともヨコナデ、帽褐色を呈する。	×	
738	I-42	KC		脇部片。器厚8~13ミリで重い個体。上端に明顯な沈縫を引く。赤褐色を呈し、表面ともヨコナデ。	×	
739	I-42	KC?		脇部片。器厚6~9ミリ、赤褐色を呈し、表面とも凹凸あり。	×	
740	I-42	KC		脇部片。器厚8~12ミリで重い個体。上端に細く深い平行沈縫を引く。赤褐色を呈し、小さい凹凸あり。表はタテナデ、裏はヨコナデ。胎土は砂粒を多く含む。	×	
741	I-42	KC	24.8	複数回に亘る有する個体片。器厚9~15ミリ。赤褐色を呈する。上段の下端、下段の下に斜面を削り、さらに平行沈縫を加える。その後の下にも平行沈縫を引き、それに輪文から借用したモチーフを間欠的に施すと推定される。焼成堅穢で重い個体。推文Ⅳの要素を構成した例であろう。	○	第23回18
742	I-42	KC	15.8	口縁部片。器厚7~11ミリ。下端に削文を施し、口頭部にボッチと、それを断続する疣痕を輪状に描く。ボッチの形状は744例に酷似。赤褐色を呈する。	○	第23回19
743	I-42	KC		口頭部片? 器厚7~8ミリ、帽褐色を呈する。3条の断続する沈縫を引き、ボタン状のボッチを施す。	×	
744	I-42	KC	17.8	口縁部・脇部上半の大破片。器厚7~13ミリ。口脇上に小ボッチを施す。口頭部に15本の平行沈縫を引く。さらに平行斜縫を幅広く組いて3本沈縫で模様帶を閉じる。第3描縫は間欠的にのみを持つボッチが施される。推文Ⅳを変形・模倣したものと認められる。	○	第23回17
745	I-42	KC	16.2	口縁部片。器厚4~6ミリで、赤褐色・帽褐色を呈する。焼成堅穢で、表面ともヨコナデ。口脇部に凹面を呈す。	○	第23回20
746	I-42	KC		脇部片。器厚7~9ミリ。細面・赤褐色を呈し、表面とも凹凸を作り。	×	
747	I-42	KC	(4.8)	小型の壺形土器。口縫直下に2箇一単位の削文を横位に施す。脇部には2本の平行沈縫を引き、大きなボッチを2箇。その間に割れ入りの状態付属を挿入する。これは男性シンボルを意識した装飾であろう。	○	第18回1 (資料未見)
748	I-42	KC		壺形土器の脇部片と推定される。器厚3~5ミリ、黒色を呈し、表面ともヨコナデ。	×	
749	I-42	KC		脇部片。器厚5~7ミリ。3本の平行沈縫を3本引き、その間に円形刺突文を施す。表面ともヨコナデ、帽褐色を呈する。板作り手法。	×	
750	I-42	KC	26.2	口縁・口頭部片。器厚7~9ミリ。二段の平行沈縫の間に横位の削文を施す。黒・帽褐色を呈し、表面ともヨコナデ。	○	第23回13
751	I-42	KC	11.4	口縁片。器厚5~7ミリで焼成堅穢、重い個体である。口頭部に2本の沈縫を引き、下の沈縫に指かかるように深い削文を斜めに施す。板作り手法。	×	
752	I-42	KC	12.0	口頭部片。器厚5~7ミリ。口脇部は深い凹面をなし、口端に大粒の削文を加え、頭部に2本の沈縫を引く。表面ともヨコナデ、ミガキ。	○	第23回14

表 36 亦稚貝塚（I 区）出土土器資料一覧（3）

番号	目次番号	分類	寸法・既往	説明	単純	備考
753	I42	ST		瓶部の側面片。施文土器を模倣したもの。灰赤褐色を呈する。表面は平滑。ヨコナデ。瓶底部に削痕を施す。	×	
754	I42	KA'		赤褐色土器の芯部片。器厚7~10ミリ、別に収納されていた2片が複合。やや大きい4枚の横走旋紋に斜格子文を加えて輪帯を幅広く構成する（「横走旋紋文・右斜縞・左斜縞」、複文II系）。さらに第1・2瓶にかけて、窓型のボッチ（軽量土器A系）を頭欠的に施す。1メタラ（新浜）土器の一例と認められる。胎土・焼成はオホーブ式。	×	
755	I42	KA	24.2	口縁部片。器厚5~10ミリ。下端に大粒の爪形文を施す。茶褐色を呈し、裏面もヨコナデ。	×	
756	I42	KA'	17.8	口縁一部断片。器厚6~10ミリ。下端に斜位の刻文、瓶部には断続するV字の浅い横走旋紋を施す。刻文土器Aと複文IIの要素を折衷したもの。瓶部の四面が丸くはね通り、並みが大。黒褐色を呈する直角側、口縁部は小波状をなし。燒成堅緻。	×	
757	I42	KA	17.8	口縁部片。器厚6~10ミリで、口唇部は角彌状をなす。口縁下端に爪形文を施し、その上に円形刻文を加える。茶褐色を呈し、裏面には小さな凹凸あり。胎土は砂粒を多く含む。	×	
758	I42	KA'	11.8	口縁一部断片。表面を呈するものか。器厚4~7ミリで薄手の作り、焼成良好で重い個体。暗褐／黒褐色を呈する。仕上がりの良い小型土器。	×	
759	I42	KA?		口縁部片。肥厚口縁？端に斜位の刻文を施す。	×	
760	I42	SY	18.2	口縁部片。口唇→頸部繩文と貫通孔を施す。	×	
761	I42	SY	12.6	口縁部片。口唇→頸部繩文と貫通孔を施す。	×	
762	I42	MC2	(5.6)	底盤付近の破片。内底面は丸底形状なし。条縞様の整形痕を残す。径の小さな底面に向て壁まる形態。胎土は焼状で多孔質。重い個体。	×	
763	I42	MC2?	(9.0)	底盤片。瓶底は瓶口具でタテ調整。底面には凸・段差あり。内面には小穴や凸凹が目立つ。	×	
764	I42	MC2?	8.9 × 8.7	底盤完形品。瓶底の内底面をなし、外底面には小穴が目立つ。瓶部分には押掌による凹面状の調整痕が連なる。	×	
765	I42	MC2?	(9.7)	底盤片。内底面は焼状をなし、外底面は平坦ながら、大小の凹面が目立つ部分は軽く外に張り出し、小さな凹面を有する。	×	
766	I43	MC2		胸部片。器厚16~20ミリ。焼成良好で重い個体。表面とも茶褐色を呈し、擦痕の調整痕を残す。	×	
767	I43	KC/MC2		胸部片。器厚10~13ミリ。赤黄褐色を呈し、表面はタケナデ。裏はヨコナデ。胎土は火砂粒を多く含む。	×	
768	I43	KC	25.6	口縁部片。器厚4~7ミリ。黒褐色を呈し、表面ともヨコナデ。小さな凹孔あり、焼成良好で重い個体。	×	
769	I43	KA		胸部上端片。器厚6~7ミリ。褐褐色を呈する。下端に逆「く」の字形にスタンプを施す。	×	
770	I43	KC	22.9	折り返し状の口縁部片。器厚6~10ミリ。赤褐色を呈し、ヨコナデ。胎土に砂粒を多く含む。肥厚した口縁部には、2本の斜引沈線を引き。下端に押掌の刺突を残す。	×	
771	I43	KC	19.6	口縁部片。器厚5~7ミリ。灰褐／褐色を呈し、表面ともヨコナデ。口縁部下の側面を呈する。その直下にややいた沈線を2本引き。レリー状の平行刻線を作成する。	○	第24回27 「区 オホーツク 磨石 砂刷」袋より出土。 822に近似した個体。
772	I43	KC	21.0	口縁部片。器厚5~7ミリ。黒褐色を呈し。胎土は砂粒を多く含む。口縁部下の側面を呈する。口縁部下の側面に爪形文を2段に施す。黒色を呈し、表面はヨコナデ・ミガキ。裏はヨコナデ。焼成堅緻。胎土に輝粒子を含む。沈線に沿って刻文を施す。	○	第24回25
773	I43	KC	20.2	口縁部片。器厚6~8ミリ。黒褐色を呈し、焼成良好。胎土に砂粒を多く含む。表面ともヨコナデ。口縁部は闊丸皿状。口縁部に2本の沈線と側面の切欠を施す。	○	第24回27
774	I43	KC	21.8	口縁部片。器厚4~6ミリ。赤褐色を呈し、表面ともヨコナデ。胎土は焼成好である。焼成堅緻。口縁部は凹面をなし、大粒の刻文と平行沈線を施す。	○	第24回24
775	I43	KC	22.8	口縁一部断片。器厚5~7ミリ。黒褐色を呈し、ヨコナデ。微細な砂を多く含み、焼成堅緻。口縁部は角彌状。口縁部に浅い沈線を2箇施す。	○	第24回26
776	I43	KC	20.0	口縁一部断片。器厚5~8ミリ。黄褐色を呈し、ヨコナデ。微細な砂を多く含み、焼成堅緻。口縁部は角彌状。口縁部に3本の平行沈線を引く。内側に三角角の大粒な刻文を施す。	○	第24回20
777	I43	KC		胸部片。器厚6~8ミリ。青灰色を呈する。裏面には段状の凹面帯。2本の沈線に沿って刻文を施す。	○	第24回23

表37 亦稚貝塚(I区)出土器資料一覧(4)

番号	目記番号	分類	寸法・概様	断面	断面	参考
778	I 43	KC	14.8	口縁部片。器厚6~7ミリ。周囲/黒褐色を呈する。口縁部は平角状をなし、沈継と横位の刻文を施す。	×	
779	I 43	KC	11.6	口縁部片。器厚3.5~5ミリ、赤褐色を呈し、表面ともヨコナデ。指押による凹脱部はさみ、口縁部には断面に横位の刻文を施す。	×	Ⅰ区オホーツク 黒色砂層袋より抽出
780	I 43	KC		胸部片。器厚6~7ミリ、赤褐色を呈し、裏面はタテナデされ、四凸・丸みあり。沈継と刻文を施す。	×	
781	I 43	KC	24.4	口縁部片。器厚6~8ミリ、暗褐色を呈し、表面ともヨコナデ。斜傾した口縁部に摩擦式浮文を施す。	×	
782	I 43	KC		胸部片。器厚7~8ミリ、暗褐色を呈する。表面ともヨコナデ。摩擦式浮文を施す。	×	
783	I 43	KC	28.6	口縁部片。器厚5~7ミリ、赤褐色を呈し、表面ともヨコナデ。焼成良好、胎土は推定的。輪く斜子を含む。口縁部は尖頭状をなし、べん状性に傾斜する。幅部に横位の指押と刺突を加え、その下に摩擦式浮文を施す。胎土は推定的。	○	第24回11
784	I 43	KC	10.8	口縁部・側部上半。器厚4~6ミリ。黒/黒褐色を呈し、ヨコナデされ。焼成良好。口縁部に4本の横走沈継文を施し、以下を無文側。胎文里の横走沈継文を複数、削除した模様であろう。	○	第22回8 Ⅰ区オホーツク 黑色砂層袋より抽出
785	I 43	ZJ/SY?	13.8	口縁部片。器厚5~6ミリ、暗褐色を呈し、ヨコナデ。捲直を残す。表面とも丸みあり。口縁部は側面半斜状。口縁部下端に次の胸腹部文様。	×	
786	I 43	KC		口縁部片。器厚5~6ミリ。口縁部直下にかなり低い段差がある。下端にやや丸い沈継を施す。胎土は砂粒を多く含み、焼成不良。	×	
787	I 43	KC	19.2	口縁部・側部片。幾形の器形で強く外反。器厚5~6ミリ。黒/黒褐色を呈し、ヨコナデ・ミガキ。光沢を帯びる。口縁部には棒状のスタンプ文を施す。頭部にへばり状具によるミガキが加えられる。	○	第24回17 Ⅰ区オホーツク 黑色砂層袋より抽出
788	I 43	KC	21.4	口縁部片。器厚4~7ミリ、赤褐色を呈し、表面ともヨコナデ。胎土は砂粒を多く含む。焼成良好。口縁部に指押と刻文。張頭部にはレリーフ状の模様を削り出し、それに沿って横位の刻文を施す。	×	
789	I 43	KC	16.4	口縁部・口縁部片。器厚9~10ミリ、赤褐色を呈し、表面ともヨコナデ。胎土には砂粒を多く含み、焼成不良。口下端に3段の円形文を施す。	×	Ⅰ区オホーツク 黑色砂層袋より抽出
790	I 43	KA/KC	14.0	口縁部片。器厚4~7ミリ。黒褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。口縁部は平角状をなし、口縁部下の凹面に爪足文を2段に施す。	×	
791	I 43	KA		剥離した口縁部片。肥厚口縁の横縫部分に斜位の刻文を施す。底白色を呈する。	×	Ⅰ区オホーツク 黑色砂層袋より抽出
792	I 43	KA	8.8	口縁・側部片。器厚3~7ミリ、赤褐色を呈し、表面ともヨコナデ・ミガキ。口縁部は丸頭半圓面をなし、肥厚した頭部に大粒の刻文を斜めに施す。	○	第24回7 Ⅰ区オホーツク 黑色砂層袋より抽出
793	I 43	KA	21.8	口縁・側部片。器厚4~6ミリ。黒/褐色を呈し。ヨコナデ。裏面には小さな凹凸の付いた。胎土は砂粒を多く含む。焼成良好。口縁の上方に斜位の刻文を施す。頭部に円形の刻文突出を加える。	○	第24回3 Ⅰ区オホーツク 黑色砂層袋より抽出
794	I 43	KA	20.4	口縁部片。器厚6~9ミリ。黒褐色を呈し。表面ともヨコナデ。焼成良好ない個体。口縁部下端は粘土により接縫部に膨らむ。そこに指押し文を施し、その上に横位の刻文を加える。板作り手法。	×	
795	I 43	KA	18.0	口縁・側部片。器厚7~8ミリ、暗褐色を呈する。口縁部は丸頭半圓面、肥厚した口縁端に大きな刻文を施す。焼成良好、硬質。	×	
796	I 43	KA		口縁・側部片。器厚4~8ミリ、黒褐色/茶褐色を呈する。表面ともヨコナデ・赤み。肥厚した口縁端に斜位の刻文を施す。	×	
797	I 43	KA	13.4	口縁部片。器厚3~6ミリ、黒色を呈し、光沢を帯びたミガキが施される。若干の歪みあり。焼成良好。肥厚した口縁部に大小の円形刻文を施す。	×	Ⅰ区オホーツク 黑色砂層袋より抽出
798	I 43	KA		口縁部片。器厚4~7ミリ。口縁部は小波状をなし、口縁部は浅い凹面を呈す。赤み、口縁部下端に刃文らしい痕跡が見える。	×	
799	I 43	KA		口縁下端・側部片。口縁は肥厚すると推定される。	×	
800	I 43	KA		口縁部附近か、斜位の刻文を施す。	×	
801	I 43	KA		口縁部附近か、斜位の刻文を施す。	×	
802	I 43	KA		胸部小片。三角状の小さな刻文を施す。	×	
803	I 43	KA		胸部小片。細長い横縫状のスタンプ文を施す。	○	第24回18 Ⅰ区オホーツク 黑色砂層袋より抽出
804	I 43	KA		胸部小片。丸形状に刻文を施す。	×	
805	I 43	KA		胸部小片。斜めに横縫状のスタンプ文を施す。	×	

表38 亦稚貝塚(I区)出土土器資料一覧(5)

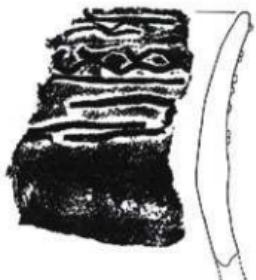
通号	目次番号	分類	工具・施技	調査	出範	備考
806	I43	KA		胸部片。804例と同一個体か。上下逆転の可能性あり。	○	第24回30 「I区 オホーツク 黒色 砂層」袋より抽出。
807	I43	KA?		拭れ部～胸上半片。器厚5～7ミリ、胎表面/黒褐色を呈する。「X」字状のモチーフに横棒の刻文を加える。十和田式の要素を借用した折衷的な土器と思われる。	○	第24回14 「I区 オホーツク 黑色 砂層」袋より抽出。
808	I43	KA?		赤褐色素面片。器厚7～8ミリ、黄褐色/青灰色を呈し、小凸・歪みあり。肩部に十和田式に由来する要素を施文する。	○	第24回13 「I区 オホーツク 黑色 砂層」袋より抽出。
809	I43	FD		胸部下半片。器厚8～10ミリ。やや不規則に二段の円形側突文を施す。胎面に荒れあり、淡黄褐色を呈する。広義の十和田式に含まれるのか。淡黄褐色を呈する。重い個体。	○	第24回28 「I区 オホーツク 黑色 砂層」袋より抽出。
810	I43	TD?		口縁部片? 横擦が脱落していると推定され、その直下に刻文が見え。	×	
811	I43	ZJ		胸部片。縦文を施文。	×	
812	I43	ZJ		胸部片。縦文を施文。	×	
813	I43	JM		胸部片。縦文を施文。	×	
814	I43	JM		胸部片。縦文を施文。	×	
815	I43	ZJ	16.8	口縁部片。口端に刻文、口縁部には沈線で工字文風のモチーフを描く。	×	
816	I43	FT		底部小片。内底面は斜面を呈すると推定される。	×	
817	I43	FT	(13.4)	僅かに斜面を残す底面片。内面は平坦で底面から立ち上がる。外底面は中筋が弱い凹面状なす。赤褐色を呈し、底部には横筋の条幅状の整筋を残す。	×	
818	I43	ZJ	(10.2)	底部付近片。縦文を施す。底面には錐形圧痕が見られる。	×	
819	I43	ZJ	(9.6)	底部片。底部・底面に縦文を施文。	×	
820	I44	MC2?		胸部大方片。器厚9～14ミリ。赤褐色/淡黄褐色を呈し、重い個体。表面は指押しによる滑らかな整形痕を呈す。裏はヨコケズリさき。多数の小穴を残す。底面は砂粒を多く含む。焼成良好。	×	I23(4/27)と I25(4/27) が複合したもの。赤褐色 土器(I44)に帰属する。
821	I44	KC		拭れ部～胸上半片。器厚6～9ミリ。淡黄褐色を呈し、胎上は砂粒を多く含む。拭れ部には指押しによる凹痕が残る。その下にボタン状の突起を施す。	×	
822	I44	KC	20.8	口縁～胸部片。器厚5～8ミリ。口縁下に2本の浅腹を引き。拭れ部に直角の貼付文?を施す。シート状の装飾といえる。口縁部は平角状をなす。胎褐色を呈し、ヨコナデ。	×	
823	I44	KC	24.0	口縁～胸部片。器厚5～7ミリ。口骨部は側丸平頭をなし。口端に大粒の刻文、2本の浅腹を施す。赤褐色を呈し、焼成堅緻。表面ともヨコナデ・ミガキ。	×	752例。第33回12例 と類似する。
824	I44	KC		胸部片。器厚4～6ミリ。赤褐色を呈し、表面ともヨコナデ。	○	左側: 第33回14 右側: 未記載
825	I44	KC	24.2	口縁部片。器厚6～7ミリ。茶/黒褐色を呈し、ヨコナデ。大粒の刻文を二段に施す。板作り手法。	○	第33回11
826	I44	KC	9.0	口縁～胸部片。器厚4～7ミリ。胎表面/ 黒褐色を呈し、表面ヨコナデ。裏はヨコナデ・ミガキ。胎上に砂粒少なく、焼成堅緻。板作り手法。	×	
827	I44	KA?	8.4	口縁～胸部上半片。器厚4～6ミリ。黑色を呈し、表面ともヨコナデ・ミガキ。板作り手法。	×	
828	I44	KA	17.0	口縁～胸部片。器厚5～8ミリ。赤褐色を呈し、胎上はヨコミガキ。焼成堅緻な発現。口縁部は側丸角頭状。	○	第33回2
829	I44	KA	16.2	口縁～胸部片。器厚5～7ミリ。赤褐色/ 黑褐色を呈し、表面ともヨコナデ。板作り手法。	○	第33回6
830	I44	KA	126.8	口縁～胸部片。口骨は丸頭状をなし、斜めの刻文を二段に施す。	×	* (資料未足)
831	I44	KA		口縁～胸部片。口骨が丸頭状をなす。斜めの刻文を一段施す。	○	第33回5 (資料未足)
832	I44	KA		拭れ部～胸部上半片。肩部に斜めの刻文を二段に施す。	○	第33回19 (資料未足) I42と I35の後治資料
833	I44	KA	21.2	口縁～胸部片。器厚7～12ミリ。赤褐色/ 黑褐色を呈し、表面ともヘラ拭工具でヨコミガキ。板作り手法の重い個体。	○	第33回8
834	I44	KA	14.2	口縁～胸部片。器厚5～6ミリ。胎表面/ 褐色を呈し、ヨコナデ。胎土は砂粒を多く含む。口縁部は側丸平頭/ 角頭状をなす。口縁下端にやや長い刻文を斜めに施す。	○	第33回4
835	I44	KA	21.4	口縁～胸部片。器厚4～8ミリ。軽く肥厚し、口縁部は角頭状をなす。淡黄褐色を呈し、表面ともヨコナデ。焼成良好。	○	第33回3

表39 亦稚貝塚（I区）出土土器資料一覧（6）

番号	目記番号	分類	口径・底径	断面	基期	参考
836	I 44	KA		頭部～胴上平片。器厚6～9ミリ、黒褐色を呈し、表面ともヨコナデ、胴上半に横状の工具で二単位の溝線文を引き、同じ工具によるスタンプ文を施す。	○	第33回 18 I44の5点が複合、D28に同一個体
837	I 44	KA		頭部～胴上平片。器厚6～7ミリ、黒褐色／茶褐色を呈し、表面ヨコナデ、ミガキ。裏はヨコナデ、使成堅密。若子の砂呑・盗みあり。	○	第33回 17
838	I 44	TD		胴部上平片。器厚6～8ミリ、黒色を呈し、胎土は砂粒に富む。平行沈縫に深い斜位の刻文、「八」字形の刻文を施す。	×	
839	I 44	TD	13.8	口縁～胴上平片。器厚5～8ミリ、赤褐色を呈し、盗み大の重い側体。外側から突窓文を施す。胎土は砂粒に富む。	×	
840	I 44	JM	21.8	口縁薄片。器厚6～7ミリ、暗褐色を呈し、表面は斜めナデ、裏はヨコナデ、口縁部に凹縫と盗み目文、直下にやや太い平行沈縫を引き、2箇単位の口縁突窓文を加える。	×	
841	I 44	ZJ		胴部片。圓文を施す。	×	
842	I 44	ZJ		胴部片。圓文を施す。	×	
843	I 44	ZJ		胴部片。圓文を施す。	×	
844	I 44	ZJ		胴部片。圓文を施す。	×	
845	I 44	MC2	7.0 × 7.7	底部定形品。やや梢円形をなす。内底面は皿状、外底面には深い凹凸、きわめて重く、分厚い側体。小穴が立ち、胎土にはタテの面取り輪。	○?	第22回 157
846	I 44	MC/KC?	9.8 × 10.3	底部定形品。やや梢円形を呈する。内底面には「匁」字状に立ち上がり、外底面は平坦、大小の凹凸あり。側面にはタテの明顯な面取り輪。胎土は外側に軽く張り出す。	×	
847	I カクラン	MC2		口縁～胴上平片。肥厚した口縁部下に幅狭い凹縫状の頭部を作り出す。頭部は楕円状で空まる。器厚4～9ミリで黒褐色を呈する。口縁部は表面とも盗み大。重い側体。	×	
848	I カクラン	PMC/MC2?		口縁～胴上平片。器厚7～8ミリで重い側体。黒／黒褐色を呈し、凹凸・盗みを伴う。頭部に指押しによる凹みが表面に連なる。口縁部は頭部状をなし、凸凹している。	×	
849	I カクラン	PMC/MC2?		口縁薄片。器厚10～12ミリ、すらりとした直い側体。口縁部は丸頭状で、口縁部の盗み大、暗褐色／赤褐色を呈する。	×	
850	I カクラン	PMC		胴部片。器厚10～12ミリ、赤褐色を呈し、表面ともタテナデ。表面には凹凸あり、四段の輪筋と底足を残す。	×	
851	I カクラン	PMC2?		口縁薄片。器厚8～10ミリで暗褐色／赤褐色を呈する。表面とも凹凸盗み大。斜め又はヨコナデ、重い側体である。	×	
852	I カクラン	MC2		胴部下平片。器厚5～8ミリ、赤褐色を呈し、帶状のタテ整形縫を残す。表面は粗いタテナデ、裏はヨコナデ、盗み大。胎土は砂粒を多く含み、使成不良。重い側体。	×	
853	I カクラン	MC2?		口縁～口縁部片。器厚8～10ミリ、暗褐色を呈し、表面は凹凸・盗み大。口縁部に幅広い凹凸が3帯施され、摩擦式浮子のように見える。表面ともヨコナデ。板作り手法。	×	
854	I カクラン	PMC2?		口縁薄片。器厚7～9ミリ、赤褐色を呈する。板作り手法の側体。口縁部は丸頭状工具による往復が見られる。表面には2条の深い段がある。表面ともヨコナデ。	×	
855	I カクラン	FD		表面下部の頭部片か？ 器厚8ミリ。黒褐色／暗褐色を呈し、表面ともヨコナデ。	×	
856	I カクラン	KC		口縁～口縁部片。やや内側に斜斜する角頭をなす。器厚6～8ミリで赤褐色を呈し、使成良好。表面ともヨコナデ。	×	
857	I カクラン	KC		口縁～口縁部片。器厚5～9ミリ、角頭をなし、黒褐色を呈する。表面ともヨコナデ、ミガキ。小さな凹凸を有する重い側体。口縁部には、ごく浅い凹面がめぐる。	×	
858	I カクラン	MC2		口縁～口縁部片。器厚7～8ミリで、黒褐色を呈し、指押しによる凹凸がめぐる。表面とも凹凸があり。胎土は砂粒を多く含む。口縁部は溝丸平頭をする。	×	
859	I カクラン	KC		口縁薄片。器厚7～8ミリ。口縁部は丸頭状で、暗褐色を呈する。表面ともヨコナデ。	×	
860	I カクラン	KC		口縁部～胴上平片。器厚6～10ミリ、黒褐色／暗褐色を呈し、表面ともヨコナデ。	×	
861	I カクラン	KC		胴部上平片。877例に類似。器厚7～9ミリ、黒褐色／暗褐色を呈し、表面ともヨコナデ、3本の平行沈縫を引き、間欠的に斜縫を加える。	×	
862	I カクラン	KC		口縁薄片。器厚8～10ミリで、数条の摩擦式浮子を施す。赤褐色を呈する。凹凸・盗みあり。	×	
863	I カクラン	KC		胴部片。器厚6～8ミリで、赤褐色を呈し、表面ともヨコナデ。4条の摩擦式浮子を施す。	×	

表40 亦稚貝塚（I区）出土土器資料一覧（7）

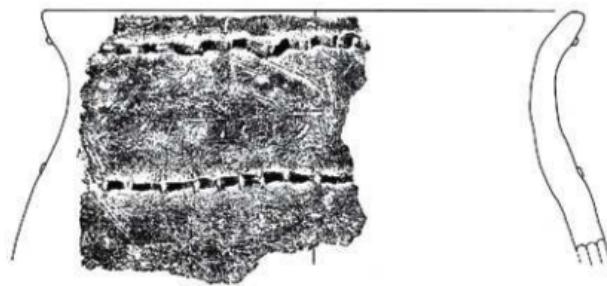
番号	目次番号	分類	寸法・既存	調査	単純	備考
864	Iカクラン	KA		口縁～口縁部片。器厚6～8ミリ、輪褐色を呈し、底土は砂を多く含む。輪広で口縁面に3帯の割文を施す。	×	
865	Iカクラン	KA		口縁部片。器厚4～8ミリ、口背筋は溝丸平頭をなす。輪広い口縁下端に捻りを加えた爪形文を施す。赤褐色を呈し、表裏ともヨコナデ、他成良好。板作り手。	×	
866	Iカクラン	KA		口縁部片。器厚3～5ミリの薄手、彫丸平頭をなし。赤褐色を呈し、表裏ともヨコナデ・ミガキ、他成厚壁。	×	
867	Iカクラン	MC2?	(6.6)	底部片。内底面は凹状、外底面はごく浅い凹面を呈する。ハラレ痕大、黒褐色を呈し、内面に段差あり。	×	
868	Iカクラン	MC2?	(10.2)	1/3 残存の底部、内底面は皿状。外底面は凸凹が著しい。赤褐色を呈し、ハラレ痕大。内面は粗・整形痕を残す。	×	
869	Iカクラン	KC		口縁部片。2条の輪広い四線文を施す。	×	*
870	Iカクラン	KC		口縁部片。2条の四線文の一端に斜立点を加える。	×	*
871	Iカクラン	KC		口縁部片。4条の沈線文の下端に斜立点を重ねて施す。	×	*
872	Iカクラン	KC?		括れ部片。やや深く削り、芯線でモチーフを描く。一般的な刻文・沈線文上端の輪廓には収まらない資料。	×	*
873	Iカクラン	KC		口縁部付近の破片。3条の沈線文の上に横位の例文を施す。	×	*
874	Iカクラン	KC		口縁部片。4条の沈線文の下端に斜立点を重ねて施す。斜傾した口縁部に斜立点を加え、口縁部に2本の沈線を施す。	×	*
875	Iカクラン	KC		括れ部・側溝上半の破片。2条の沈線文に横位の例文を間欠的に加える。	×	*
876	Iカクラン	KC		斜縁口縁部片。	×	*
877	Iカクラン	KC		胸部片。3条の沈線文に3本の短割縫を間欠的に加える。	×	*
878	Iカクラン	KC		胸部片。3条の沈線文に3本の短割縫を間欠的に加える。4条の沈線文を施す。	×	*
879	Iカクラン	KC		幅広く指紋文と刻文を二段に施し、その下に浅い摩擦式浮文を加える。	×	*
880	Iカクラン	KA		押捺状に肥厚する口縁部片。棘線上に細かい刻文を二段に施す。	×	*
881	Iカクラン	KA		口縁部片。口背筋と二段の棘線上に深い刻文を施す。	×	*
882	Iカクラン	KA		幅広くやや内傾する口縁部片。上端には刻文、下端には捻り爪形文を施す。	×	*
883	Iカクラン	KA		括れ部・側溝上半片。四回の橋轍状のスタンプ文を施す。	×	*
884	Iカクラン	KA		軽く肥厚する口縁部片。下端に明瞭な刻文を施す。	×	*
885	Iカクラン	KA		小波状の口縁部片。軽く捻りを加えた爪跡を施す。	×	*
886	Iカクラン	KA		胸部片。1条の刻文を横位に施す。	×	*
887	Iカクラン	KA		口縁部～側溝片。二段の横位例文の間に橋轍状のスタンプ文を充填する。	×	*
888	Iカクラン	ZJ		口縁部片。棒状工具による丸い沈線文。	×	*
889	Iカクラン	ZJ		口縁部片。棒状工具による丸い沈線文。	×	*
890	Iカクラン	ZJ		胸部片。圓文施文。	×	*
891	Iカクラン	JM		胸部片。圓文施文。	×	*
892	Iカクラン	JM?		胸部片。圓文施文。	×	*
893	Iカクラン	ZJ		底部片。圓文施文。	×	*
894	Iカクラン	ZJ		胸部片。圓文施文。	×	*
895	Iカクラン	ZJ		底部片。圓文施文。	×	*
896	Iカクラン	ZJ		胸部片。圓文施文。	×	*
897	Iカクラン	ZJ		底部片。圓文施文。	×	*



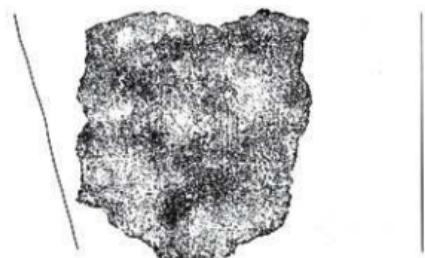
701



702

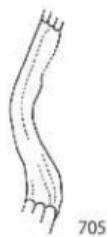
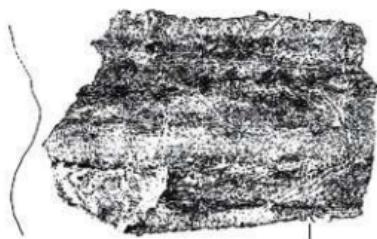


703

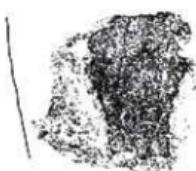


704

図96 1区 141(「黒色土」)出土土器(1) (S=1/2)



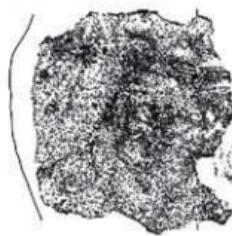
705



706



707



708

図97 1区 141(「黒色土」)出土土器(2)(S=1/2)

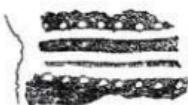
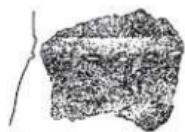
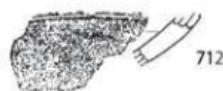
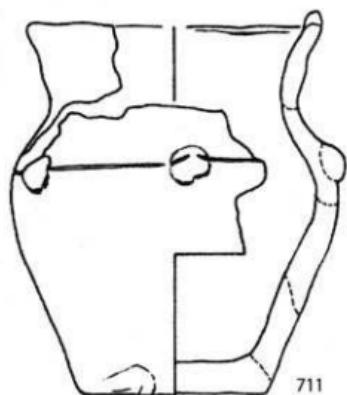
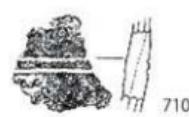
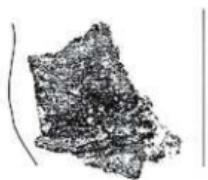
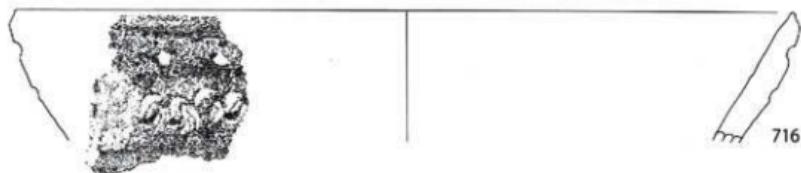


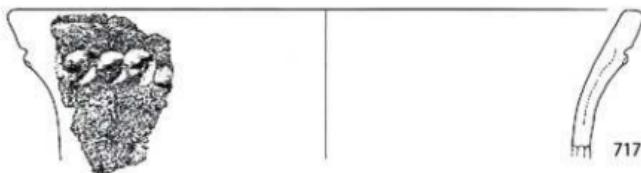
図98 1区 141(「黒色土」)出土土器(3)(S=1/2)



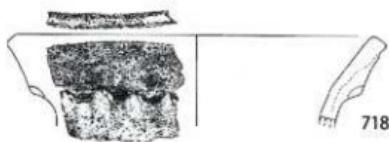
715



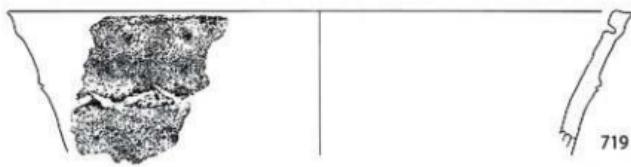
716



717



718



719

図99 1区 141(「黒色土」)出土土器(4)(S=1/2)

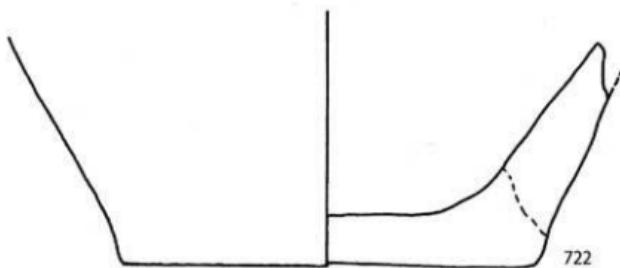
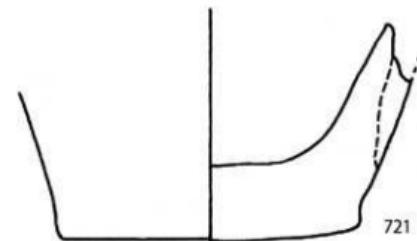
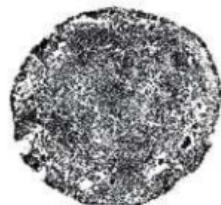
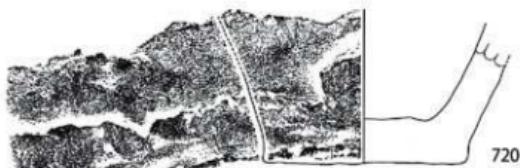


図100 1区 141 (「黒色土」) 出土土器 (5) (S=1/2)

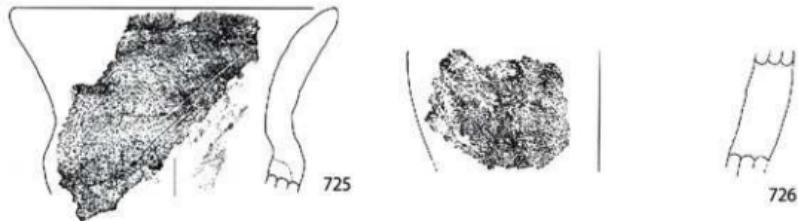
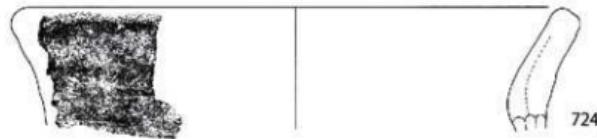
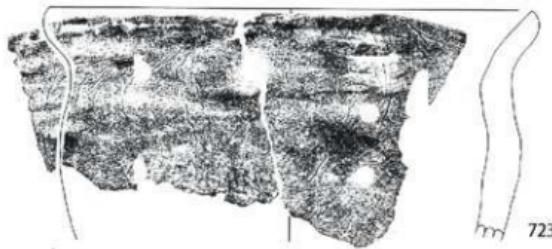


図 101 1区 142 (「黒色砂層」) 出土土器 (1) (S=1/2)

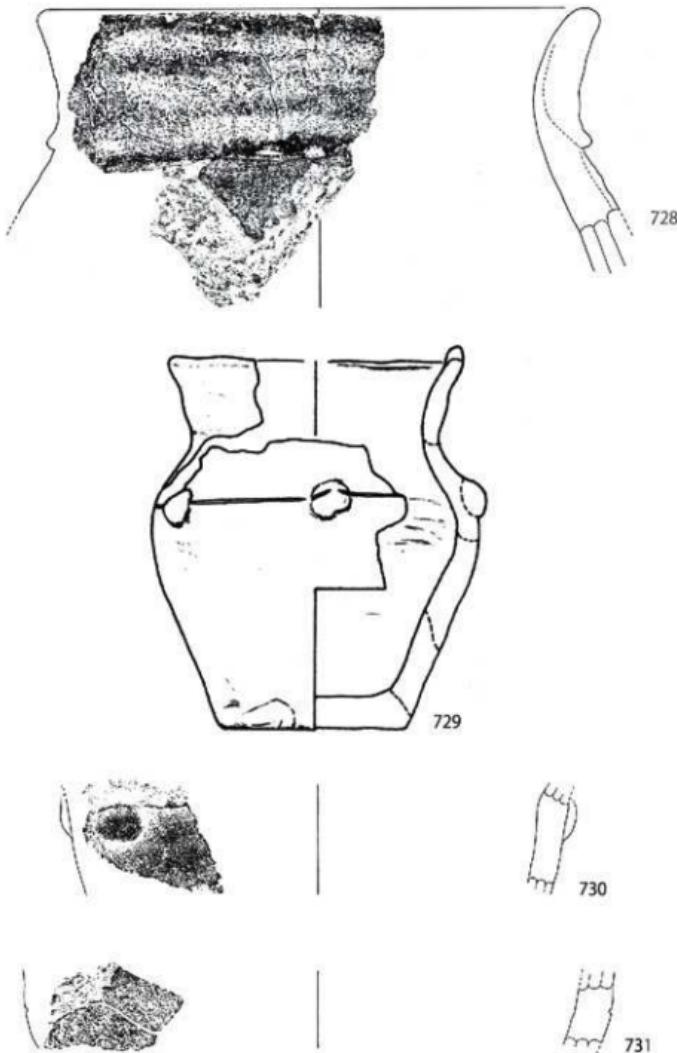


図 102 I区 I42 (「黒色砂層」) 出土土器 (2) (S=1/2)

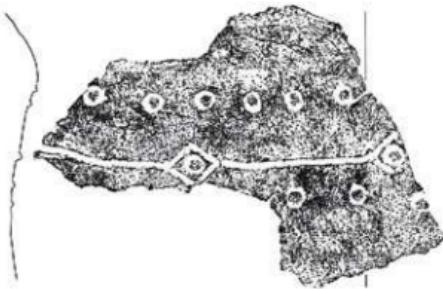
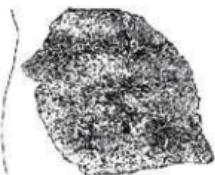


図 103 1区 142 (「黒色砂層」) 出土土器 (3) (S=1/2)

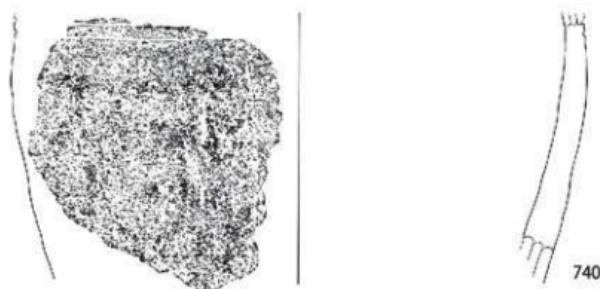
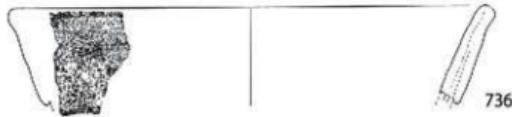
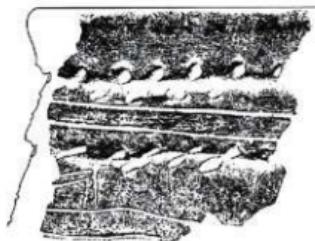


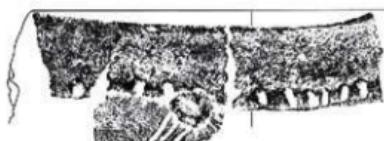
図 104 I区 I42 (「黒色砂層」) 出土土器 (4) (S=1/2)



|



741



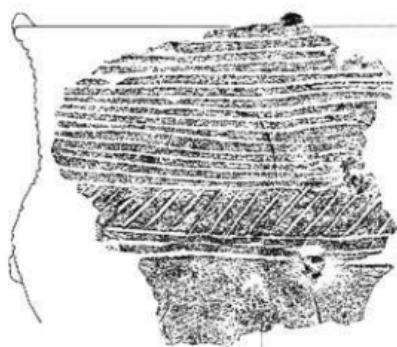
742



|



743



744

図 105 1区 142 (「黒色砂層」) 出土土器 (5) (S=1/2)



745



746



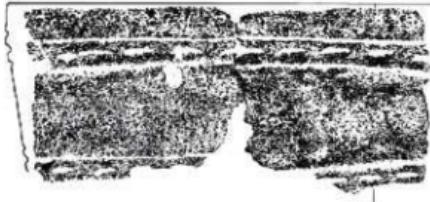
747



748



749



750

図 106 I区 142 (「黒色砂層」) 出土土器 (6) (S=1/2)

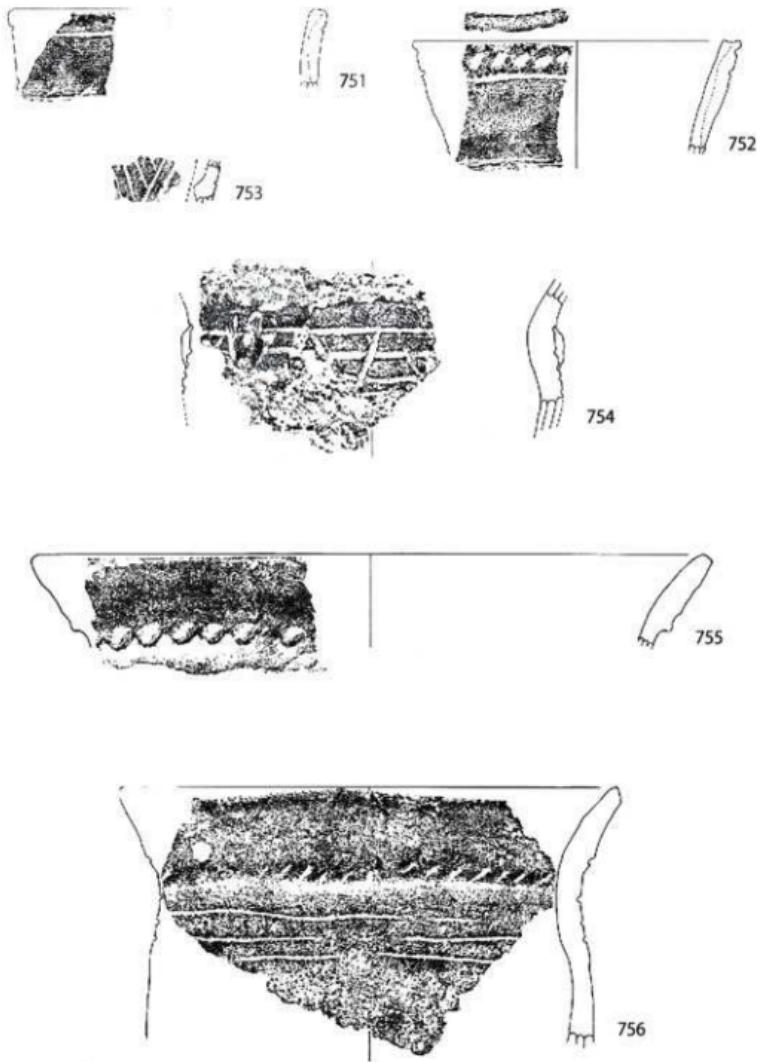


図 107 1区 142 (「黒色砂層」) 出土土器 (7) (S=1/2)

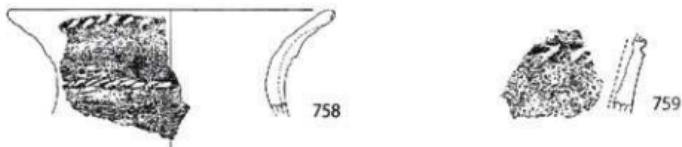
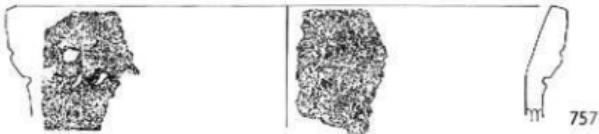


図 108 I区 142 (「黒色砂層」) 出土土器 (8) (S=1/2)

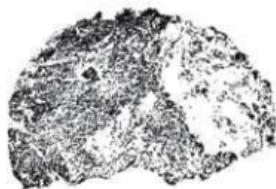
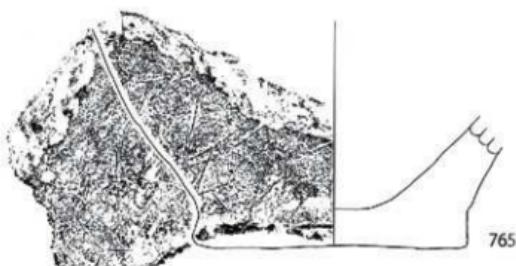
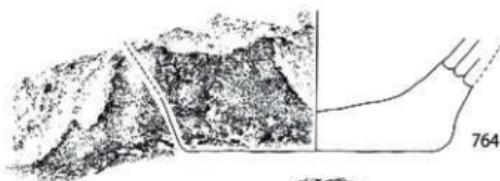


図 109 1区 142 (「黒色砂層」) 出土土器 (9) (S=1/2)

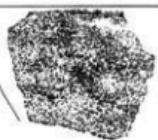
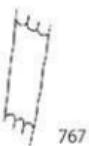
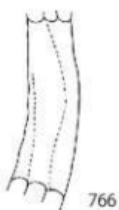
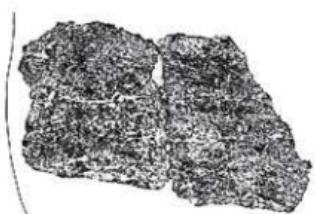


図 110 I区 143(「黒色土層」)出土土器(1)(S=1/2)



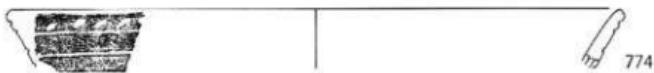
771



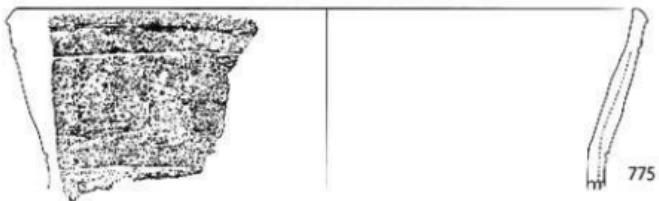
772



773

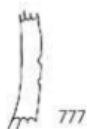
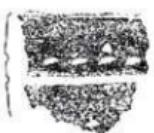
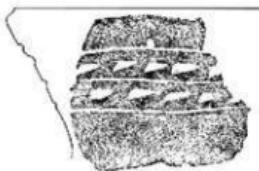


774



775

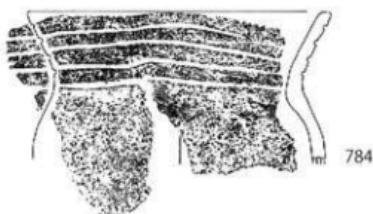
図 111 1区 143 (「黒色土層」) 出土土器 (2) (S=1/2)



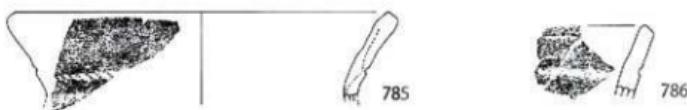
780



図 112 1区 143 (「黒色土層」) 出土土器 (3) (S=1/2)



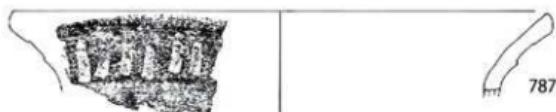
784



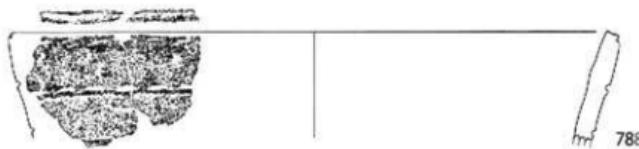
785



786



787



788

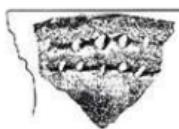


789

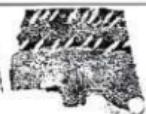
図 113 1区 143 (「黒色土層」) 出土土器 (4) (S=1/2)



791



792



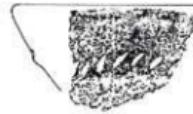
793



794



795



796

図 114 I区 143 (「黒色土層」) 出土土器 (5) (S=1/2)



797



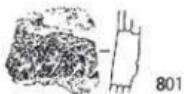
798



799



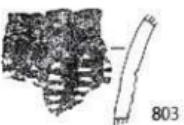
800



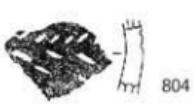
801



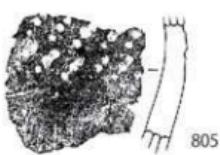
802



803



804



805



806



807

図 115 1区 143 (「黒色土層」) 出土土器 (6) (S=1/2)

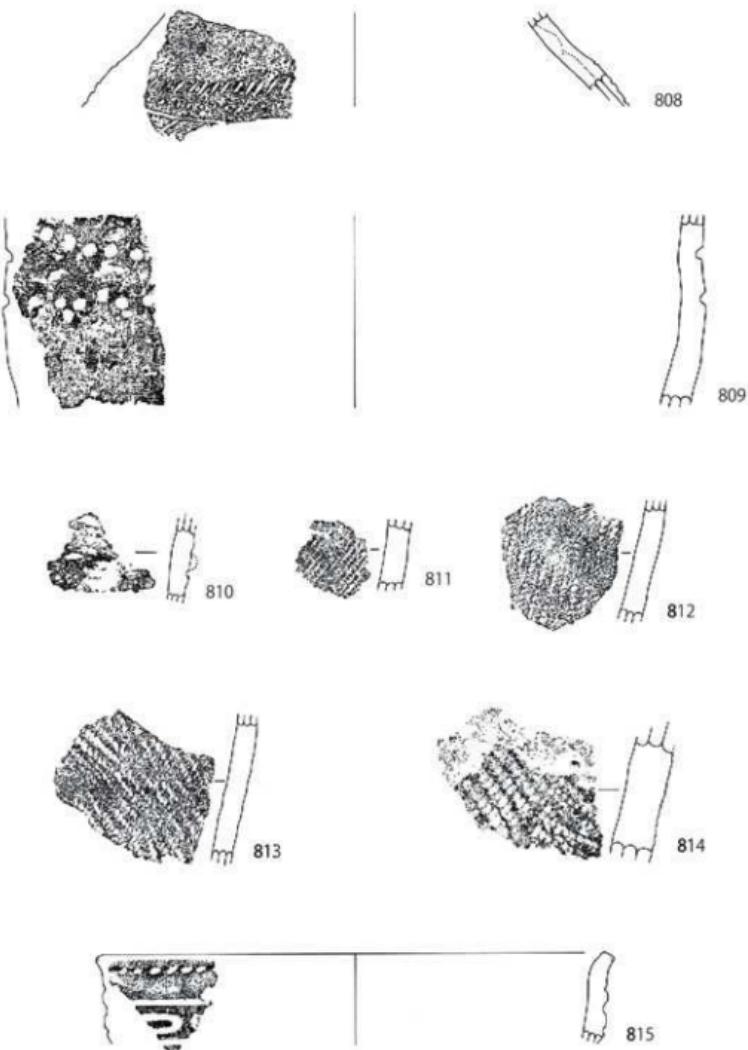


図 116 1区 I43 (「黒色土層」) 出土土器 (7) (S=1/2)

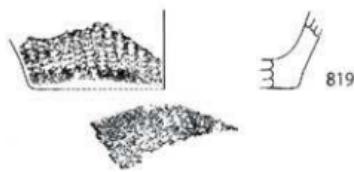
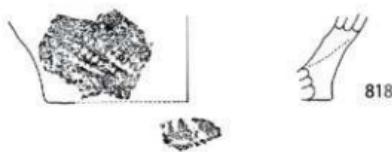
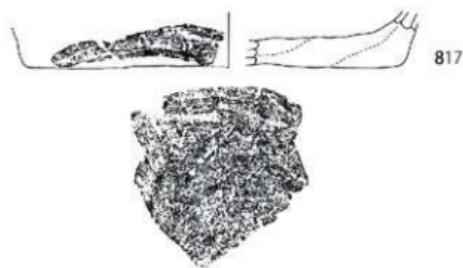


図 117 1区 143 (「黒色土層」) 出土土器 (8) (S=1/2)

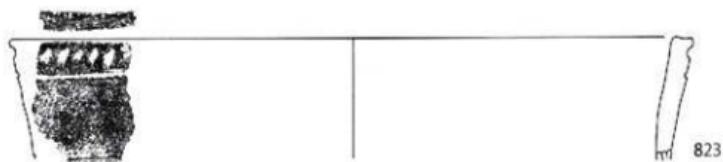
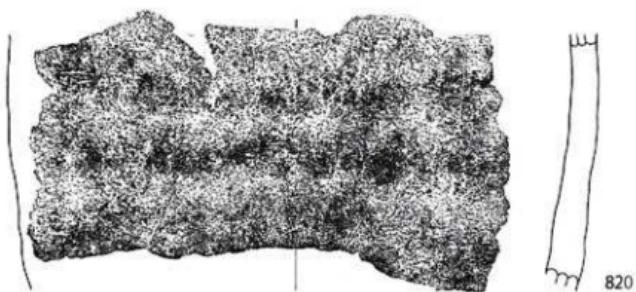


図 118 1区 144 (「茶褐色土層」) 出土土器 (1) (S=1/2)

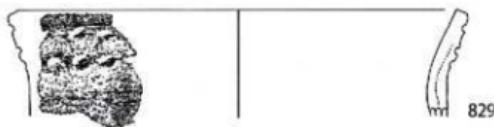
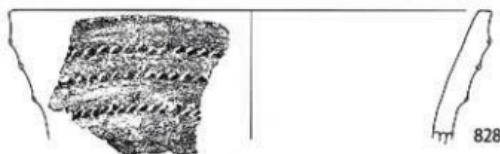
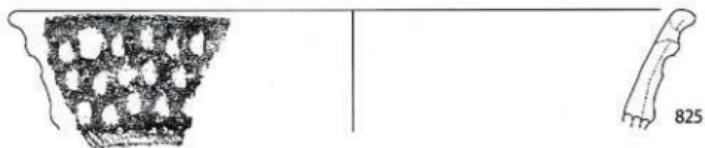
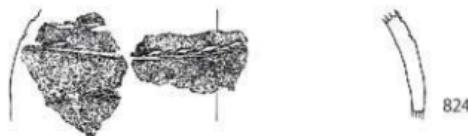


図119 1区 144(「茶褐色土層」)出土土器(2)(S=1/2)

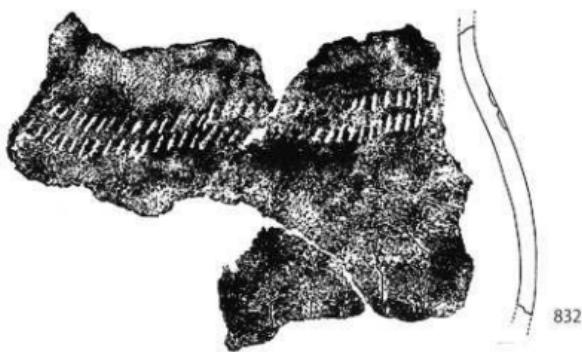
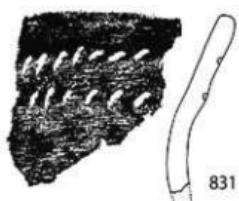
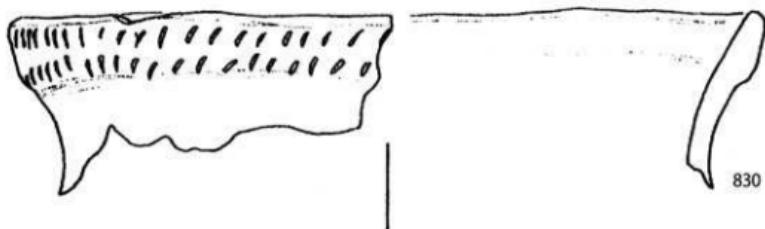


図 120 1区 144 (「茶褐色土層」) 出土土器 (3) (S=1/2)

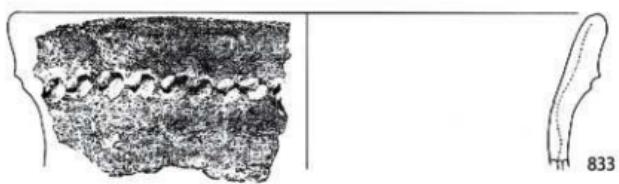
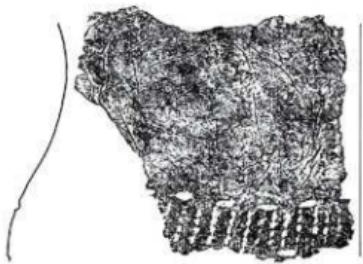


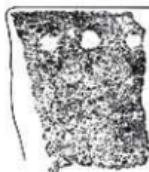
図121 1区 144(「茶褐色土層」)出土土器(4)(S=1/2)



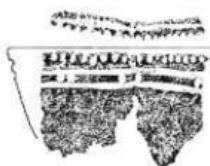
837



838



839



840

図 122 1区 144 (「茶褐色土層」) 出土土器 (5) (S=1/2)

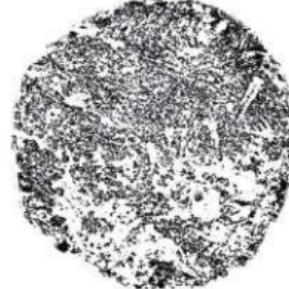
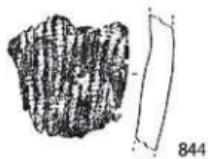
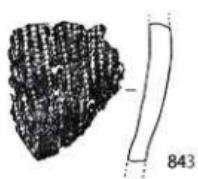
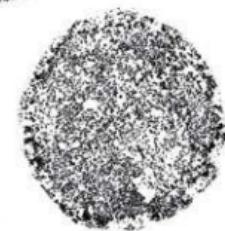
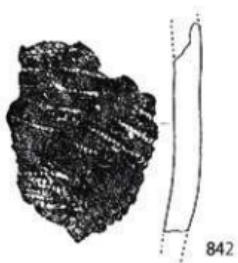
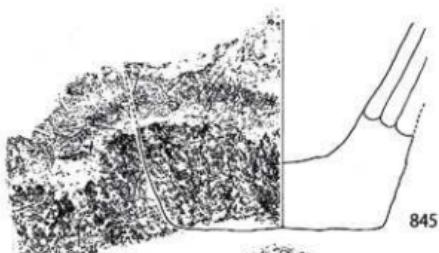
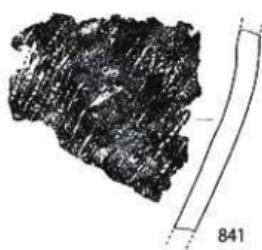
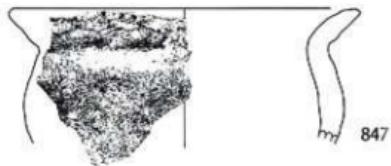
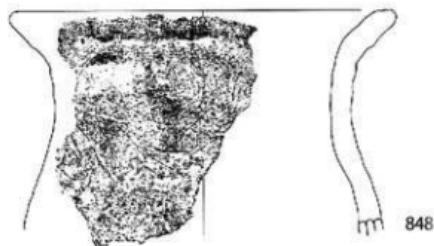


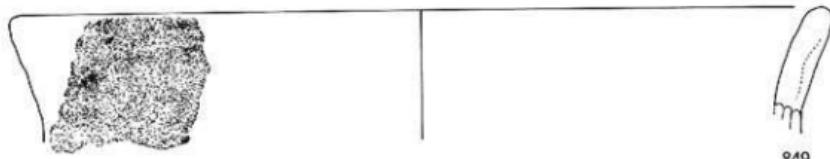
図123 1区 144(「茶褐色土層」)出土土器(6)(S=1/2)



847



848



849



850

図124 1区「カクラン」出土土器(A)(1)(S=1/2)

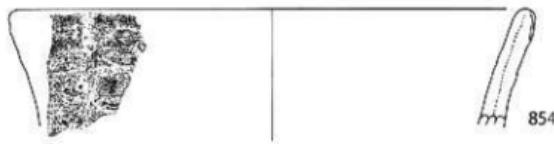
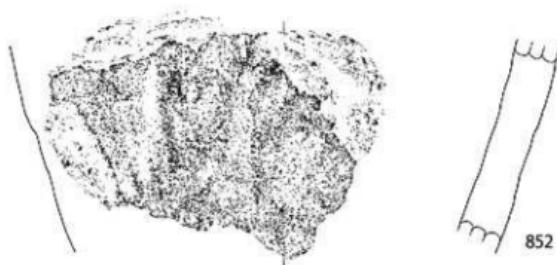
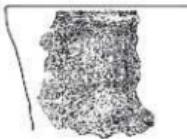
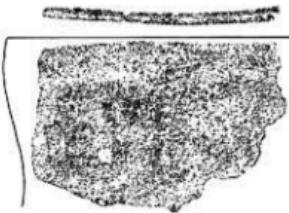


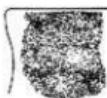
図 125 1区 「カクラン」出土土器 (A) (2) ($S=1/2$)



856



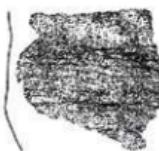
857



858



859



860



861

図126 1区「カクラン」出土土器(A)(3)(S=1/2)

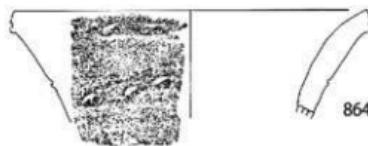


図 127 1区 「カクラン」 出土土器 (A) (4) ($S=1/2$)

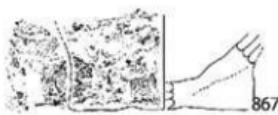


図128 1区 「カクラン」出土土器 (A) (5) ($S=1/2$)

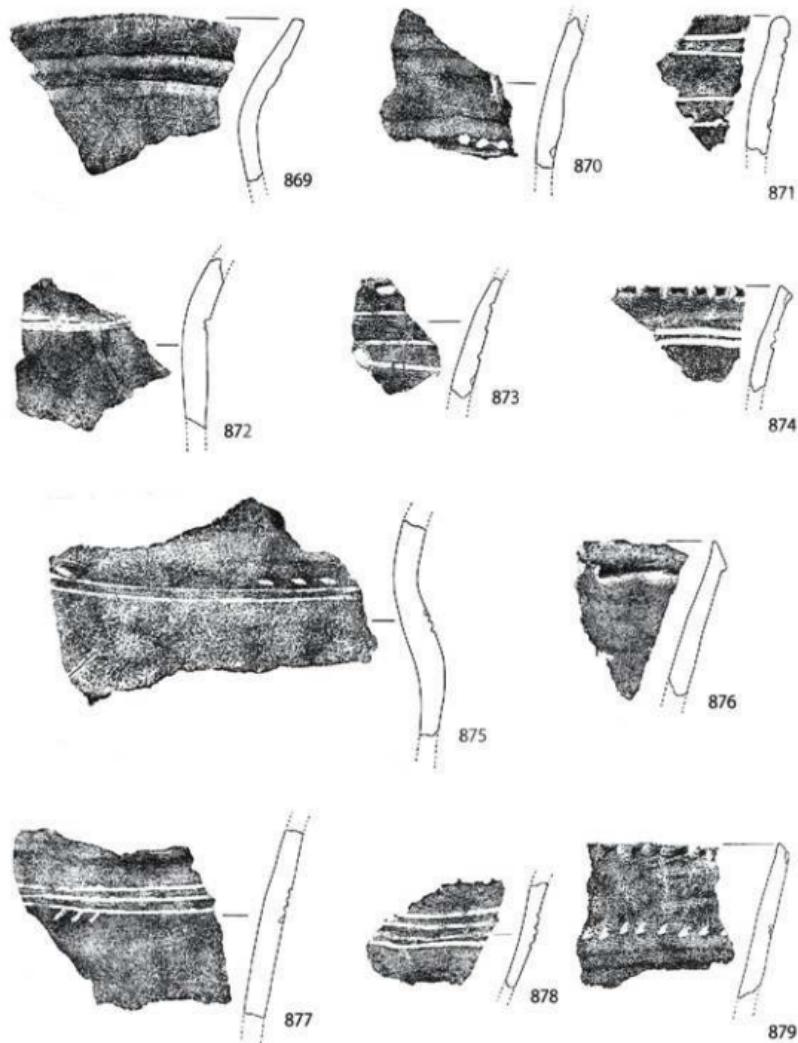


図129 1区「カクラン」出土土器(B)(1) (S=1/2)

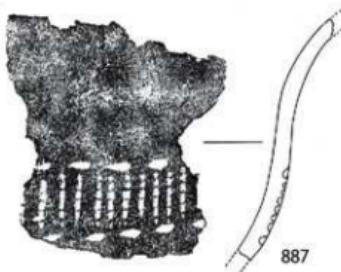
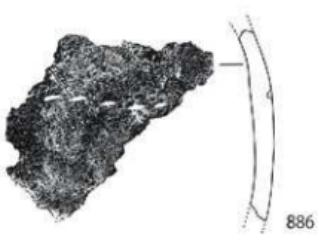
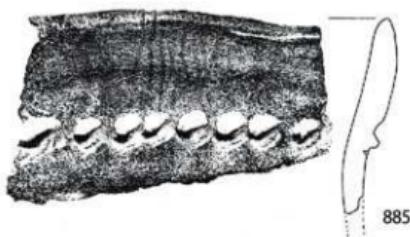
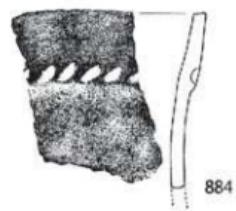
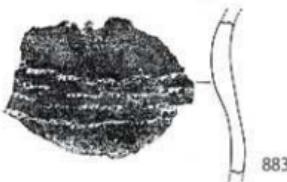
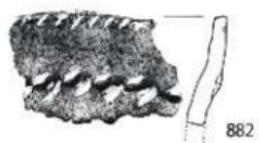
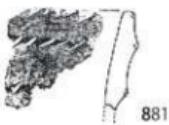
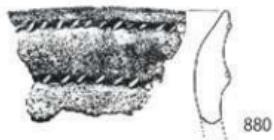
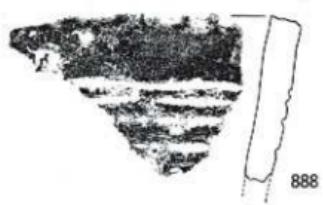
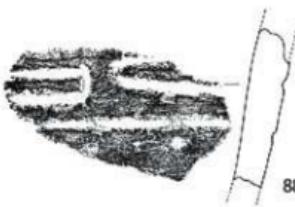


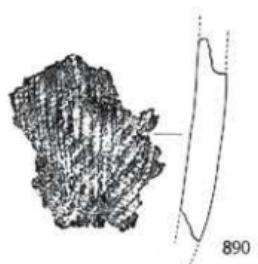
図 130 1区 「カクラン」出土土器 (B) (2) (S=1/2)



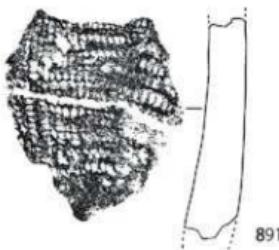
888



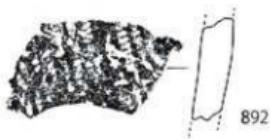
889



890



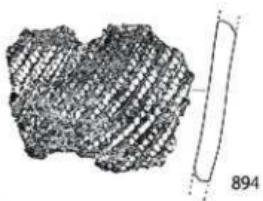
891



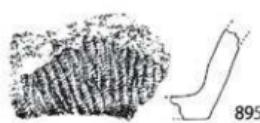
892



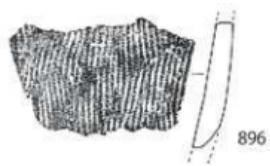
893



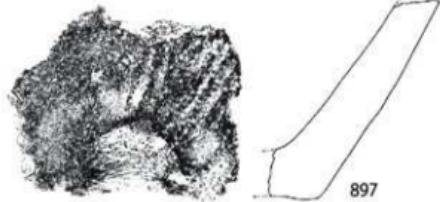
894



895



896



897

図131 1区「カクラン」出土土器(B)(3) (S=1/2)

まとめ

本年度は、沼浦遺跡（D 地点）の調査を併行して行い、海水浴場遺跡では E 地点を新設した。都合 B・E・TP1・D 地点の四箇所を掘削したが、その結果は本文の資料が示すとおり、小規模ながら注目すべき成果が得られた。以下、各地点の概要をまとめたい。

B0 区 第 2 層群では十和田式や続縄文土器・刻文土器 A・擦文 III・元地 2 式などが見られるが、それらを除くと主体を占めるのは刻文・沈線文土器（古）である。これは浜中 2 遺跡の B4・5 区に先行する層位的な土器様相の一例として注目されよう。

B1a' ~ B1b 区 系統を異にした堆積層が重なり東西壁の様相は一致しない。第 1 層群は攪乱され新旧の土器が混在する。第 2 層群では刻文・沈線文土器（古）が主体を占め、続縄文土器・擦文 III・元地 2 式を含む。第 3 層群でも刻文・沈線文土器が検出される。

B3 区 刻文・沈線文土器・元地 2 式の小片が出土し、ハケメ痕を持つ擦文片も採取された。

B7 区 明瞭な堆積状態が観察され、注目すべき土器組成を示している。第 2 層群では刻文・沈線文土器が主体を占めるが、刻文土器 A や十和田式もやや目立つ。それらと共に擦文 III（古）やその模倣土器、元地 2 式の影響をうけて作られた模倣的な土器が検出された。また横走沈線文を施し、刻文・沈線文土器の胎土・焼成を示す個体も認められる。

E1 区 耕作や遺構の構築に伴う攪乱がある。第 2 層群では、刻文・沈線文土器が主体を占め、刻文土器 A・鈴谷式・十和田式・中厚手の模倣土器・擦文 III などが見られる。表掲資料にも同様の組成が認められ、元地 2 式も含まれている。

D 地点 この地点ではごく僅かの鈴谷式片と、それに先行する続縄文系土器片を若干検出したに留まる。後者は時期的には繰り返しがあるように観察される。

人骨・土壤 B 地点では人骨が検出された。ただし明確に墓壙に伴うものは DK1 の成人・未成人骨に限定され、一部の遺存骨には切削やひび割れ痕が観察された。DK3 は攪乱されており、規模・形状は判然としないが、人骨片（第 1 次）を伴っており墓壙の可能性が想定される。DK1 の東側に置かれた板状石は、おそらく墓標的な意味を持つのであろう。B1a 区の東壁にも類似の大石が見られたが、土壤や人骨片などは検出されていない。

動物遺存体・骨角・石器類 B・E 地点で多くの動物遺存体が確認された。鑑定数は 50 種以上を数える。第 1 次調査に比べてブタが増加し、魚類ではアイナメ・フサカサゴ・ニシン科が主体を占める。時期的には刻文・沈線文土器の前半に比定される。骨角器では骨針・刺突具や骨鏃、装飾品など、石器類では石鏃・磨製石斧、削器が僅かに出土したにとどまる。亦稚貝塚や浜中 2 遺跡とは異なり、利器類に乏しい様相が再確認された。

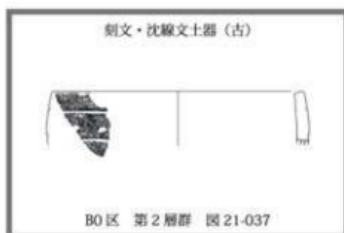
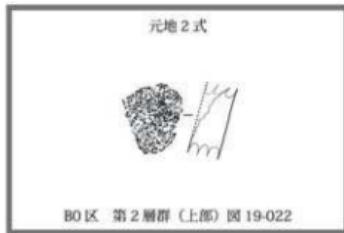
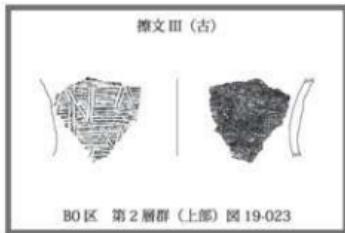
さて本年度で注目されるのは、B 区における層位事実である。総括すると、「第 1 層群：表土・攪乱層、第 2 層群：刻文・沈線文土器に若干の擦文 III・元地 2 式、第 3 層群：刻文・沈線文土器」という流れで捉えられる。この所見は通説的な島嶼域・道央編年案とは一致しない。第 3 次調査での検証を心掛け、層位資料の充実と補填に努めたい。（柳澤）

参考文献

- 荒川 幡雄 1997『礼文町香深井5遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 岩城 克洋・北 沙織・土肥 幸子編 2016『北海道礼文町浜中2遺跡第5次発掘調査概報』礼文・利尻島遺跡調査の会
- 岩城 克洋・北 沙織・土肥 幸子編・藤原 吉希・柳澤 清一・山谷 文人 2017『北海道利尻富士町沼浦海水浴場遺跡第1次発掘調査報告書』礼文・利尻島遺跡調査の会
- 宇田川 洋 校註 1983『河野常吉ノート 考古篇2』北海道出版企画センター
- 内山 真澄ほか 1995『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書』利尻富士町教育委員会
- 大川 清 1998『北海二島一禮文・利尻島の考古資料一』窯業史博物館
- 大場 利夫・大井 哲男編 1976・1981『オホツク文化の研究2 香深井遺跡(上・下)』東京大学出版会
- 大谷 喬司編 2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版社
- 岡田 淳子・西谷 荣治ほか 1983『利尻島の埋蔵文化財(1)』『利尻町立博物館年報』2
- 岡田 淳子ほか 1984『利尻島の埋蔵文化財(2)』『利尻町立博物館年報』3
- 佐藤 達夫 1972『掠文土器の変遷について』『常呂』東京大学文学部
- 岡田 淳子・相田 光明・西谷 荣治ほか 1978『亦稚貝塚』利尻町教育委員会
- 種市 幸生編 1977『北海道礼文町香深井5遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 種屯内遺跡調査団 1998『種屯内遺跡第2次発掘調査概要(1996年)』『利尻研究』17
- 種屯内遺跡調査団 1999『種屯内遺跡第3次発掘調査概要(1997年)』『利尻研究』18
- 種屯内遺跡調査団 2001『種屯内遺跡第5次発掘調査概要(1999年)』『利尻研究』20
- 種屯内遺跡調査団 2004『利尻島種屯内遺跡の考古学的調査』『歴史人類』32
- 種屯内遺跡調査団 2002『種屯内遺跡発掘調査報告 総括篇1 事実関係』『利尻研究』21
- 千葉大学文学部考古学研究室編 2012～2016『北海道礼文町浜中2遺跡(第1～5次)発掘調査概報』
- 名取 武光 1933『利尻・禮文島紀行』『蝦夷往来』11
- 前田 潮・藤沢 隆史編 2001『礼文町香深井6遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 前田 潮・山浦 清編 1992『浜中2遺跡の調査』礼文町教育委員会
- 前田 潮・山浦 清編 2002『礼文島浜中2遺跡第2～4次発掘調査報告』『筑波大学先史学考古学研究』13
- 前田 潮・西谷 荣治 1997『利尻町種屯内遺跡発掘調査報告』『利尻研究』16
- 山谷 文人・内山 幸子 2011『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書II』利尻富士町教育委員会
- 山谷 文人・内山 幸子 2004『利尻島沼浦海水浴場遺跡発掘調査報告』『海と考古学』7
- 柳澤 清一 2011『北方考古学の新展開－火山灰・薪手刀をめぐる編年体系の見直しと精密化－』六一書房
- 柳澤 清一 2015a『北方考古学の新潮流－「逆転編年」説の検証と年代観の改訂－』六一書房
- 柳澤 清一 2015b『道東における掠文IV期以降の層位事実と文様現象について』『先史考古学研究』12
- 柳澤 清一 2015c『水禽・「鱈」状モチーフから見た「貼付文系土器」の広域編年』『古代』137
- 柳澤 清一 2017『礼文・利尻島編年の新検討 その(1)・香深井5遺跡を中心として』『利尻研究』36
- 柳澤 清一 2018『礼文・利尻島編年の新検討 その(2)・亦稚貝塚を中心として』『利尻研究』37

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ほっかいどうりしりふじょう むまうらかいすいよくじょういせき (だいにじ) むまうらいせき (だいいちじ) はっくつちょうさほうこくしょ							
書名	北海道利尻富士町 沿海水浴場遺跡(第2次) 沿海遺跡(第1次) 発掘調査報告書							
圖書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	柳澤清一・内山幸子・藤田尚・山谷文人・岩城克洋・大野彩奈・北沙織・高坂勇佑・箱石幸祐・藤原吉希・横田真名望							
編集機関	礼文・利尻島遺跡調査の会							
所在地	〒263-8522 千葉県千葉市緑区赤井町1-33 千葉大学文学部考古学研究室 気付 TEL:043-290-2304							
発行年月日	2018年12月20日							
所 収 遺 跡 名	所 在 地	コ ー ド		世 界 断 地 系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北 緯	東 緯			
むまうらかいすいよくじょういせき 沿海水浴場遺跡	ほっかいどうりしりぐらむじょういせき 北海道利尻郡利尻富士町鬼脇 あざぬまうら 字招福132、145、146番地	015199	H-10-16	45° 06' 52.3"	141° 17' 29.7"	2017.04.28 ~ 2017.05.15	16.5m ²	学術研究
むまうらいせき 沿海遺跡	ほっかいどうりしりぐらむじょういせき 北海道利尻郡利尻富士町鬼脇 あざぬまうら 字招福 99番地	015199	H-10-17	45° 06' 40.5"	141° 17' 17.3"	2017.04.28 ~ 2017.05.15	8.0m ²	学術研究
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項		
沿海水浴場遺跡	貝塚	縄文 統縄文 オホーツク 推文 近現代	墓壙 (1・2次) 2基 土壙 (1・2次) 2基	縄文土器 統縄文土器 オホーツク式土器 神文土器 石器 骨角器 各種の近現代遺物	船付文期と推定される墓壙 (1)。 ウニ殻・魚骨器などを伴う庶民場 などを検出			
沿海遺跡	貝塚	統縄文 近現代	道路状遺構	統縄文土器 各種の近現代遺物				



北海道利尻富士町

沼浦海水浴場遺跡（第 2 次）

沼浦遺跡（第 1 次）

発掘調査報告書

発行日 2018 年 12 月 20 日

編集 礼文・利尻島遺跡調査の会

写真撮影 藤原 吉希

発行所 礼文・利尻島遺跡調査の会（代表 柳澤 清一）

〒263-8522 千葉県千葉市稻毛区弥生町 1-33

千葉大学文学部考古学研究室（気付）

利尻富士町教育委員会（監修）

〒097-0101 北海道利尻郡利尻富士町駒泊字富士野 6